
ゲームになった現実

日島 青汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームになった現実

【Nコード】

N3476L

【作者名】

日島 青汰

【あらすじ】

突如世界に舞い降りた神様は「私は世界をゲーム化することにした」と全人類に告げる。それが実現されてから30年。世界はレベルこそが人間の優劣だとまで言われるレベル格差社会となってしまった。そんな中、国内3位、全国21位のレベルを持つ彼女は高校生になった。

1話 入学式翌日

「私は世界をゲーム化することにした」

ある日、神はそう全人類に告げた。メディアやネットなどの様々な手段を通して、誰一人聞き逃すことなくだ。本来ならばありえないことだが、それを可能にせしめる神の力が働いていたのだ。

神様は人間の少年のような姿をしていた。けれど人間はそれを神様だと疑わなかった。理由は簡単だ。神がそれを望んだから。人の意思など無視して、それを神だと認識させた。

神の一方通行な宣言は続く。

「人間の作ったゲームをやってみたが、あれは大変面白かった。その礼として、私は人類を救おう」

神様がゲームで遊んでいることには、人間も驚きだっただろう。

しかもその礼に人類を救うなんて、それほどまでに神を喜ばせたゲームとはなんだったのだろうかと一部の人間は思ったかもしれない。人類の救済はこうして、信者の祈りではなく、ゲームによって訪れることになった。

「とは言ったものの、それでは人間は墮落の一途をたどることになる。それはいけない。だから努力すれば必ず報われる世界にすることにした。それが世界のゲーム化だ」

それだけで意味が分かった者などいないはずだ。

力を使い理解させることも、神には可能だったがそうしなかった。「私は世界に会社を作る。食料から日用品など様々なものを取り扱う会社だ。この会社で作るものには一切の資源を必要とせず、品が尽きることがない。すなわち資源問題は改善され、食料も尽きることはなくなる。」

人間はこれからはモンスターを倒すことを職業とし、それが落とした金で食物を買い生活できるようになる。誰も職を失い路頭にも迷うことはなくなる。飢饉で飢餓に苦しむこともなくなる。富める者

は出ても、貧しさのあまり生きれない者はいなくなる。それが私から与えるほんのささやかな救済だ」

どうして会社を作るという方法を取るのだろうか。もしかしたらそれは神の遊び心だったのかもしれない。

だがそんなことより重要なのは、資源や食料問題が解決し、職を失うことも、飢餓に苦しむことも、貧しさに苦しむこともない世界に変わるということだ。

救われない者などほとんどいない世界になる。それはどれだけ素晴らしいことだろうか。

神様を信仰していなかった者も、このときは神様をありがたくおもっただろう。

「モンスターは野に放つわけにもいかないからそれらが闊歩する世界を作っておく。

そこへの行き方は私の会社で整備しておこう」

ここまで来ると今から作る会社の宣伝のようでもあった。そんなこといちいちを気にする者はいなかったが。

「さて、ここまでは理解しただろうか。では最後にゲームになくはないものの、パラメーターについて伝えよう。これは知っての通り、優劣を数値化する」

バトルのあるコンピュータゲームには大抵あるパラメーター。HPや攻撃力、防御力など以外にも様々なものがあるが、どれも共通して数字で優劣を示す。

今まで人間はテストなどの枠組みでそれを計っていた。だがそれは明確なものではない。

対してパラメーターとは、全く項目同士なら、同じ条件でその差を比べることが出来る。

つまり自分が誰より劣っていて、誰より優れているのかを知ることが出来るようになる。

優劣とは、あって当然。むしろ必要なものだ。神は認めたのだ。神は人の上に人を作らずなどという言葉はこの瞬間に瓦解した。

「これから世界はレベル格差社会になるだろう。それはしかたがないことだ。人と人がいれば、そこに差は生じるのだからな。さて、パラメーターの確認方法だが、それも会社で用意しておこう。その他にもわからないことがあれば用意した人材に尋ねてくれ」

レベル格差社会。その言葉は、それがこれからの避けられない未来だと暗示している。

「それでは人間たち。よいプレイを期待している」

口元を歪めて、愉快そうに神は笑った。

「ゲームスタートだ」

その言葉と共に世界は変わった。

これが歴史の授業でも習う、30年前にあつた『神の舞い降りた日』の内容である。

Now loading...

あれから世界各国にNPC社という会社が出来た。社員がNPC。つまり神の使いという会社だ。その会社は神の宣言通り、資材なしに商品を作り、農作や牧畜もなしに食料を作っていた。

人件費も材料費もかからず、そのうえ需要と供給量の関係すら成り立たないNPC社に、他の会社は次々に競争に敗北して倒産したり、買収された。

競争に生き残ったのはNPC社がわざとなくさなかった会社か、エンターテイメント系の会社くらいになった。

ほとんど者が職を失い、NPC社の提供するモンスターの闊歩する世界——『フィールド』に出てモンスターを倒し金を稼ぐ生活になった。もつともそれでも働きたいというもののために、NPC社は後々人間の就職も認めるようになっていくが。

モンスターを倒しドロップする金は、最初はNPC社でしか使えないものだった。だがどんなものでも取り扱っているためそれで問題はない。しだいに国の発行する金よりも、NPC社の取り扱う通

貨の方が普及するようになっていく。その後、数年で国は通貨の発行を止めた。

しばらくすると就職といえば、公務員かNPC社か、プレイヤーと呼ばれるモンスターを狩る職業かのいずれかと言われるまでになった。

プレイヤーの由来は、パラメーターを見るのに必要なNPC社が無料配布しているカード型の機械、プレイヤーカードである。

従来の携帯のような通話やインターネット、アプリケーション機能などを備えていて、しかも無料。小型で丈夫。電気もいらぬ。保存量も無限。操作性抜群。すぐに携帯やPCの次世代機となった。だが、それはオマケ機能でしかない。重要なのはパラメーターの表示だった。

パラメーターは4つに分類されている。

レベルやHP、MP、攻撃力や防御力の事を指すのが『ステータス』。レベル以外は装備や他のパラメーターの結果値であり、総合能力的意味合いを持つ。

人間の基礎能力、つまり筋力や知力などの追加値を指すのが『アビリティ』。一人につき6種類までで、レベルアップごとに、上がる量が1から10とランダム、上がる項目もランダムなため運の要素が高い。レベルで補うことが出来るが、アビリティの伸び具合こそ才能であるという者もいる。

アクティブスキルやパッシブスキルを纏めて指すのが『スキル』。一人につき12種類までで、レベルアップや、条件を満たすことで入手したり、すでに所持しているもののランクが上がる。捨てたり入手したり出来るため、平等に思われがちだが、条件をクリアすることが限られた人間にしか不可能なものもあり、一概にはいえない。

アビリティーとスキルの成長方向を決めるのが『クラス』。これは生まれつき持っているものを条件を満たして変えることも出来る。つまり、才能を手に入れることが出来るといつても過言ではない。変更された場合、スキルの一部を失い、アビリティーが全体的に変更される。つまりレベル以外は変更可能なため、レベルこそが人間の優劣であるという理論の根底になっているパラメーターでもある。

これらの数値がプレイヤーの、人間の優劣だといわれている。

レベルの向上に伴い、アビリティーの上昇や強力なスキルを取得するため、大抵はレベルだけでその優劣を決められる。

レベルが高ければその分収入も多く、優れている。

レベルが低ければその分収入も少く、劣っている。

その認識が広まり、レベル格差が社会問題になるのはかなり早い段階からだった。

レベル格差問題で民族戦争のような戦争が起こることはない。しかし、政府は必死に国で高レベルプレイヤーを育成しようと励んだ。国家間でも、レベルの差が優劣の差だと認識され始めたのだ。

NPC社が発表するレベルのランキングに目を光らせ、それによって国すらも優劣が決まるようになった。

すでにレベル格差は解消どころか人類の共通認識にも成り代わったのだ。

Now loading...

高校の制服といった防御力のない装備に身を包んだ私は、草原の中でウルフのモンスターと向かい合っていた。

狼を姿を模したそれは、習性すらも模倣しており単体ではなく6匹の群れだ。

属性は変質個体でもないし、見たまま炎に弱いだろう。こんな低

レベルフィールドでは、そんなことをいちいち考える必要もないのだが癖としてそれを頭の片隅で分析していた。

「グルルルル」

威嚇していた私を2匹が挟むように跳んだ。スピードは充分速いが、所詮はレベル1の雑魚モンスター。私から見れば止まっているのと変わらないくらい遅く見えた。

右手に持つ両手大剣が、2本の線を描く。

剣のリーチに入った瞬間に、最大まであったはずのウルフのHPを示す横線は、無残に消え去った。

悲鳴を上げる暇もなく、さっきまで存在していた肉体は光の粒子となって霧散する。ウルフの姿は、この世界の何処からも消えてなくなった。微風が、腰まで伸ばしている銀色の髪を揺らす。

今のウルフは死んだのではない。消滅したのだ。

モンスターは生物でない。人間に狩られるだけのために神に作られた人形である。だから繁殖もしないし食事も取らない。ほっといても湧いて出る。

彼らが残すのは経験値と、たまに落とす金やアイテムだけ。

哀れな存在だとつくづく同情する。

残りは4匹になった。警戒して接近してこないため、距離を縮めて間合いに入れてクレイモアを振る。距離を縮めるための移動すら、ウルフには対応しきれるものではなかった。なにも行動を起こす前にクレイモアはウルフの体を引き裂き、HPを削り取る。

4つの体が次々と光の粒子になって消えた。

辺りに敵が残っていないか確認してからクレイモアを鞘に収める。こんな低レベルのモンスターなら不意打ちを受けても問題はないのだが、これも日頃の癖だった。

「なんで入学式の翌日にフィールドで授業なのだろうか……」

高校の授業には、フィールドの科目がある。週に1回程度の割合で、1日の授業の全てがそれになる。どんな授業かというと、簡単にいうなれば国が推奨しているレベル上げだ。

だが、それを1年生に、入学式の翌日に行うのはどこか間違っている気がする。

ある程度クラス内で仲の良いグループが出来てから、それらでパーティーを自発的に組ませて、より良い狩り方を学ばべきではないだろうか。

クラスの輪から少し離れた場所で、ソロプレイをしている私が言うことではないけれど。

そろそろ適当に誰かとパーティーを組もうかな。こんな雑魚を相手にしても経験値なんて無に等しいし、それならば気の合いそうな人を見つけて話してた方がよっぽど時間の有効だ。

胸ポケットに入れているプレイヤーカードを軽く叩くことで起動させて、半透明の画面を空中に表示させる。これは自分にしか見えない仕様の仮想画面だ。

はたして、胸ポケットに入れたままどういった原理で空中に、しかも所有者にしか見えないように表示しているのだろうか。それは未だに解明されていない。

そういう物だと納得しているので、あまり気にしたことはなかったが、考えてみると不思議なものだ。

とにかく画面に指を走らせて、アプリケーションソフトのマップを表示する。

マップは、自分で作るか買うかすることで見ることが出来るのだが、なかなか高価なので買う人は少ない。

表示されたマップは、単調になにもない草原が続くだけのもの。最奥だけ若干不自然ではあるが樹が何本か生えているだけで、それ以外は変わったところのない。初心者には丁度良い練習ステージだろう。

「たしかこっちから来たからこの辺か？」

マップで出入り口――ゲートの場所から同級生のいそうな位置を推測する。

もう一度プレイヤーカードを叩き、終了させてから、推測した場

所に向かって草原の中を歩き始めた。

ここは今まで来る機会のなかったフィールドだ。だが、似たような地形のフィールドなら今までに何百回も見ている。だからおおよその地形の特徴や出現するモンスターは把握していた。

だが、普段訪れるフィールドと違ってここは推奨レベルが1の最弱フィールドだ。警戒することといったら、同級生の前であり凄じ動きを見せないように気を配るくらいだろう。

それだけの實力——レベルが私にはあった。

高校生というのは、まだフィールドに来て間もない者が多い。

なぜなら、フィールドに入るためにはプレイヤーカードの発行が必要だからである。プレイヤーカードの発行には高校生以上の身分証明書か、保護者同伴でなければならない。

それは多少の危険がフィールドにはあるからだ。推奨レベルを守って、3、4人のパーティーを組んでいれば結構安全であるが、それでも親からすれば心配なのは無理もない。小中学生からすでにフィールドに出てレベルを上げている者もいるがそれは少数だ。

その少数に私自身も入っている。物心付いたときにはすでにフィールドでモンスターと戦っていたなんていうのは私くらいかもしれないが。

父が親馬鹿で、しかも實力などの地位もあつたからだろう。パーティーにだけ登録して、経験値の分け前をもらって最初はレベルを上げることが出来た。馬鹿みたいにクラスやスキルに恵まれていたのもあつてすぐにレベルは上がっていった。

小学生のときにはすでに大人でも驚くほどのレベルになっていた。中学生になってからは国内上位者の欄に名前——といっても偽名だが、それが載るようになっていた。NPC社の出すランキングには、事前申請しておけば載る名前を偽名に出来るのだ。その頃には政府の軍に所属して高レベルモンスターを日夜狩りまくっていた。

そして現在、おかげで口に出すのも躊躇うほどの、国内では上から3番目、全国では21番目の高レベルプレイヤーになり、特別な

部隊にも配属され、部下が何人もいる。

レベルが優劣だと言われる時代。個人的にはそう思っていないが、世間の言うとおりなら私は国内で3番目、人類で21番目に優れていることにされてしまうわけだ。

そんなの知られたいと思うわけがない。妬み嫉みが大変そうだから。

だから今日はわざわざ適当に弱い武器を持って、制服のまま来て無知を装い、普通ならステータスがマイナスに傾くほどの減少効果のあるアイテムやスキルを使っている。

これもこれで面倒だったが、隠し事とはなかなかスリリングで面白いとも感じられた。いつだか読んだ漫画の主人公がしていた二重生活みたいで。

ならば隠し事をするための相手も欲しいところだ。

同年代の友達なんて今までいなかったことだし、そういうのと遊ぶのも楽しそうだった。

胸弾ませてスキップなどをしていると、視線を感じた。

人ではなく、モンスターの視線だ。

スキルの補助的要因はないが、経験からある程度の距離までなら気配がわかる。

いちいち向かうのも面倒だったので無視して進む。

しばらくすると、さっきの気配が視界に入った。再びウルフ。今度は2匹だ。攻撃しようとしてきたのでクレイモアを抜刀してそのまま同時に切り倒した。

1話 入学式翌日（後書き）

おはようございます。こんにちは。こんばんは。初めまして。日島青汰です。

まず最初に、わざわざこんな駄作を読んできたことに感謝いたします。

意外と小説って書くのが難しいんですね……。

つついこのサイトの小説に感化されて書き始めてみるとあら不思議。全然上手いきません。

私自身、途中で執筆を投げ出して逃亡しなければいいのですが……。それでも誠心誠意努力させていただきますので、なにとぞ優しい目で見守ってもらえれば恐悦至極に存じます。

誤字脱字などがありましたら指摘してもらえると助かります。

2話 初心者二人

このフィールドに出現するモンスターはどうやらスライム、バード、ウルフの3種類だけだ。

ゲート付近には動きも遅く、攻撃力も低いスライムがいる。これは的同然の動きしかない。初心者にも安全な設計なモンスターだ。

少し進んだ中層には空中を徘徊しているバードがいる。こいつは飛んでいるので倒しにくい、攻撃を行うときに接近してくるので、カウンター狙いで戦えば問題ない。HPや防御力もかなり低い、レベル1でも5回も攻撃すれば倒せる。立ち回りを覚えるとでも言いたいのだろう。

さっきまで私のいた奥地には、このフィールドでは一番強力なウルフの群れがいる。数はおよそ2匹から10匹まで様々だが、外見にすぐわす攻撃力が低い。レベル1でもすぐ殺されるようなことはないだろう。まるで集団戦の練習をこれだというような能力値だ。

「誰かつ！ ちょつ！ 助けてー！！」

だが、初心者には少々難しい相手かもしれない。出入り口の方へ逃げれば、中層と奥地の境界線のようなところから先には追ってこなくなるのだが、パニックを起こして闇雲に走ると大量のモンスターをトレインすることになる。

そうやって集めた敵を一気に範囲攻撃で狩る方法もあるのだが、現在目の前で大量のウルフを引き連れて走っている少年2人は、どう見ても逃げているだけだろう。

着ている服は私と同じ高校の制服。この授業では制服の着用は義務付けられていないのだが、初心者なら防具を持っているはずもないか。武器だけはプレイヤーカード発行に伴い、NPC社がクラスに合った武器を配給してくれるため持っているようだ。片方は剣を、

片方は杖を手を持っているので剣士系統と魔術士系統のクラスだろう。剣士をタンクに、魔術士の遠距離攻撃で少しずつ削っていけばひとつの群れくらい倒せるだろうが、そんな知恵はどう見てもなさそうだ。

彼らはきつと初めてのフィールドとモンスターに浮かれた馬鹿だちだ。慌てふためくその表情は、馬鹿丸出しだった。しかしほつくわけにもいかない。放置すれば下手すれば死ぬかもしれないからだ。

かといって助けるといつてもこれらを全滅させるわけにもいかない。自分のレベルを隠しておくためにも。ならば一緒に逃げるのが得策か。

「ゲートの方向に逃げるぞ」

颯爽と彼らの横に並び、速度を合わせて走る。

中途半端に遅く走るのは、案外難しかった。

「え？ あ、ああ。わかった。あれ？ ゲートってどっちだっけ？」

「あっちだ」

ゲートのある方角を指差し、少年の両方が頷く。

そのまま3人はゲートの方角に走った。

Now loading...

「ありがとう。本当に助かりました。礼を言います」

中層エリアに辿り着き、やっとウルフが追いかけてこなくなると、杖を持っている方の少年が最初に礼を言ってきた。

「マジで危なかった。ありがとな」

続いて剣を持っている少年も礼を言う。

杖を持っている方の少年は、眼鏡をかけていかにも頭が良さそうな顔立ちである。落ち着いた物腰やわりと痩せている体系からは、剣を闇雲に振り回すよりは、後で悠然と杖を構えて魔法を放つていそうな印象があった。丁寧な言葉遣いから、良識のありそうな

人物であるのが窺える。

剣を持っている方の少年は、陽気な表情で笑っている。さっきまでの恐怖などすでに忘れたかのように。こちらはいかにも剣を振り回していそうな、活発な性格だろう。杖を持たせてもそれで敵を殴りそうな、そんな活気が体中から満ち溢れているかのようだ。

見た目で人を判断するのは良くないが、見た目もまた、その人物を映し出す鏡である。はたして、周りから私はどう見られているかは、いまひとつわからないが。

「あんまり奥に行くなと先生方も言ってたはずだが？
もう子供という年齢でもないのだから少しは考えて行動した方がいいぞ」

また同じ行動を取って今度こそ死んだら笑い話にもならない。杖の少年は反省しているようだったが、剣の少年は——どうだろうか。疑わしいものである。

「えつと少年。名前は？」

剣の少年に尋ねる。

「八神^{やがみ}洗^う哉^やだ。よろしくな」

「うん。よろしく。では、洗哉君。君は特に反省するように。もしもまたこんなことがあったら君、今度こそ死ぬ《・》ぞ」

死というのを強調して言った。これは脅してもなんでもなく、事実だ。

医療技術も随分と発展し、病気などで死ぬことは随分少ない。交通事故だって、HPがあるため事故は有っても死亡するケースは少ないのだ。

現在、死因の最たるものはフィールドでの事故だろう。

特に右も左もわからないような初心者が死ぬことは珍しくない。

「あ、うん。今度から注意する」

その意味を理解できたのか、それともさっきまで死と隣りあわせだったから実感を持てたのか、どちらかはわからないが確かに死とこの言葉に恐怖は感じてくれたようだ。

「そっちの少年、名前は？」

「御鶴来健介みづるぎ けんすけです。よろしく」

「月城羽衣つきしろ はなだ。よろしく。健介君もこれからはちゃんと注意するよ
うに」

どちらかといえば洸哉君から目を離さないように、という意味を
込めて言った。

「わかった。気をつけるよ。ところで月城さんはフィールド、初め
てじゃないみたいですね」

「月城さんという呼び方は嫌だな。普通に羽衣でいい。洸哉君、君
もそう呼んでくれ」

「ああ。なら俺のことも洸哉って呼んでくれ」

「僕の方も健介って呼んでもらえますか」

「うむ。改めてよろしく。洸哉に健介」

普段は年上を呼び捨てにしているだけあって、呼び捨てにするの
に無理はなかった。

でも、こう簡単に名前でもらうのを了承してくれるのは多
いことではない。それは上司と部下という関係や、レベルの差が大
きいのが理由だ。

だが、ここではそんな関係も差もない。同級生という立場同士で、
レベルもたいして違わない。やっぱり学校って良いものだった。
「それで羽衣は、今日が初めてじゃないんですよね？」

健介が再び尋ねた。早くも名前を呼び捨てにしてくれたことを、
心の中で喜ぶ。

「うっ、まあな。それほどレベルは高くないが……」

流石に初心者《レベル1》では通せない。

まあ最近は中学生でも普及しているし問題ないだろうけど。

「あの……。助けてもらったうえに図々しくてすまないんですが、
少しの間でいいからモンスターとの戦い方を指導をしてもらえない
ですか？ 見ての通り僕もこいつも今日が初めてで」

随分と謙虚な姿勢に断るのも悪い気がする。そもそも断るつもり

はないが。

「そのぐらいならいいだろう」

自分がここで断ったために、明日には彼らの席に花瓶が置かれていた、なんて事になられても気分が悪い。

手っ取り早く彼らを死にくくするなら、パーティーを組んで私が経験値を稼ぎまくればいいだけだが、長い目で見ればそれは良い方法ではない。それに彼らは戦い方を教えてくれと言ってきたのだ。ならばその通り、戦い方を指南した方が良さだろう。

まずはスライムの相手をして、慣れてきたらバードと戦えば済む話であり、そこに私は必要ないのだが、それだけ教えて何処かに行ってしまうのも無粋だ。

すっかりウルフと戦える程度には指南してやろうと決めた。

Now loading...

思った以上に教えることは多かった。忘れていたが、彼らは武器も持ったことのないほどの素人だ。

まずは武器の持ち方。それから振り方を教えないといけない。

物心付いたときから感覚で行っていたので、初歩的なところは案外教えるのは難しいことだった。

覚えることの多い、クラスが剣士の洸哉から教えに入る。

「西洋剣か。バスターソード片手でも両手でも使える便利なものだが、最初は両手で振ってみるといいぞ」

洸哉の持っているバスターソードは、長さは130センチくらい。低レベル用の物なので重量は2.5キロくらいだ。初期に配給される長剣ロングソードよりも30センチ以上も長く、1キロほど重い。

武器の長さは種類によって決定するが、重量や性能、外見は個々に違う。

高レベルのプレイヤーが使う物は、総じて重量が重く、外見は見るものを魅了するほど美しく、性能は言うまでもなく強力なものに

なる。装備条件があるタイプもあるが、基本的に低レベルでは振ることすら叶わないために、こういった軽く、弱い武器になるのだ。

「アビリティーに筋力あるか？」

「たしか6くらいあるけど」

レベル1で6あるなら良い方だ。これから先、重量の重い武器を使える素養がある。

でもまだ、両手で振らせた方が安定するだろう。

見本として自分のクレイモアを鞘から抜き、構えてみせる。

「こんな感じに右手を鐔の近くを握って、左手は柄の下ぎりぎりを握る。あ、右利きだよな？」

「おう」

返事をしながら同様にバスターソードを構える。手の位置に問題はないが、肩に力が入りすぎている。これではしなやかに剣を振ることは出来ない。

「もう少し肩から力抜いて」

「こ、こんな感じか？」

「まあそんな感じ、だろうな」

まだまだ不恰好ではあるが、今日のところはこれで良いだろう。健介も退屈そうに杖で素振りをしていることだし、これ以上待たせるのも悪い。

「あとは相手の体系に合わせて剣を振る。細かいことはそのうち慣れる」

視線を洸哉の後に移す。

「とにかく頑張ってみろ」

そこには緑のゼリー状のモンスター、スライムがいた。

「ええ！？」

慌ててそちらに剣を構える。だから肩に力が入り過ぎてるって。一度大きく息を吐くと、次の瞬間には目つきが別人のように変わっていた。

スキルの欄に『バトルセンス』でもあるかのようにだった。さっき

訊いたときにはないと言っていたから、それは純粹に彼の實力だということだ。

「たあっ！」

大きく上段に振り上げて、そこから真下に振り下ろす。単調で足捌きもないが、スライムに命中しHPの横線を削った。

今度は横切り。単発ではなく、何度か連続で振り回しHPがなくなるまで続けた。不恰好で、ただ剣を動かしているようだったが、まあ仕方がないだろう。

「よっしゃあ！」

「おめでと。でも今のは的同然だから喜び過ぎないように。それじゃあ次は健介の番だ」

健介はクラスが魔術士のためアクティブスキルの魔法を唱えていればなんとなる。こちらは体で覚えるより頭で覚えることが多いクラスだ。

「アクティブスキルの魔法はなにがある？」

「えっと——炎弾、他にはないです」

健介はプレイヤーカードを使って確認した。

「必要MPと、最大MP、残存MPの量は？」

「必要MPは5。最大MPは50。今は50ぴたりあります」

必要量が5なら、下級ではそれなりの威力だろう。だが10発しか打てないのは痛い。MPがなくなったら回復アイテムでもあげるとしようか。

「アクティブスキルの使い方って知ってるよな」

「まあ。使おうとしながらスキル名を言えはいんですよ？」

「半分正解。直接スキル名を言う必要はないんだよ。」

炎弾ならファイアーボールで発動する。これが面白いことに大炎弾もファイアーボールで発動する。今後はスキルを隠すためにも、使うときは直接言わないように心るといい」

「はい」

スキルがばれるというのは自分の手の内がばれるということだ。

高レベルになるにつれて、その重要性は大きい。

パーティーを組むときは情報交換をするが、「ファイアーボールを撃てる」と言えば、陣形を組むのには問題なく。それ以上追及するのもマナー違反なためはぐらかすことが出来る。

「じゃあこつちもスライム倒そうか」

指を指した方向にはスライムが1匹いる。

健介はそつちに杖を構えて、しっかり狙いを定めた。

「ファイアーボール」

言葉と同時に杖の先端から炎の玉が現れ、飛翔する。スライムの方向に真っ直ぐと飛んだそれは、見事に命中してHPを全て削り取った。

光の粒子となって拡散する速度を見ながら、今のはぎりぎりだっただろうと判断できる。

モンスターが消滅するとき、まず体が光の粒子に変わり、それが空気に溶けるように霧散していくのだが、オーバーダメージが大きいほどそれは早くなる。

今の威力ではバードを一撃で倒すことは出来ないだろう。その辺りは2人で協力すれば済む話か。

「なっ！ おまえの魔法強すぎねえ？」

そつとも知らずに洩哉が驚いていた。

「そうかな？ 10回しか撃てないんだからそこそこ威力がないと使い物にならないだろうし。いや、燃費を考えれば今でも充分きついな」

「まあそうなんだろうけどさ」

HPもMPも、10分で1パーセント回復する。彼の場合は1発分回復するのに1時間40分もかかる。はっきりいって今のレベルでは使いものにならない。

「魔術士はレベルが上がれば随分楽になるぞ。いちいち動き回って剣を振る必要もないからな」

「たしかにそうですね」

さてと。もう少しここで準備運動したら次はバードの相手でもさせようか。でも今日中にウルフの相手をさせるなら、もう1人くらい人手が欲しいな。

バードをちゃんと戦えるようになったらその間に誰か探してくるか。

頭の中でプランを建てながら、再び現れたスライムを洸哉が倒す姿を眺めた。

3話 マスコット

彼ら2人にプレイヤーカードを操作してパーティー登録をさせておいた。私とパーティーを組んだのではなく、彼ら2人だけだ。

私が入ればその分経験値が分散してしまう。その経験値も、私にとってはないようなものだ。そんな無駄事はせずに、彼らの間で経験値を平等化させたほうが良いだろう。

パーティー登録を済ませたら、中層エリアに足を運び、バードとの戦いを始めさせた。

フィールドという限られた空間にある、何処までも続くわけではない、青い空を羽ばたいていたのが鳥形モンスター、バードだ。

体は鷲のように大きいくせに、見掛け倒しと言わんばかりの弱さを誇る。

むしろその巨体は相手を威嚇するためではなく、攻撃を当てやすいように巨大になっているのだから、なんとも悲しいことだ。

「攻撃するときに一度下りてくるから、タイミングを合わせてカウンターでHPを削っていくように。コツは焦らないこと。それじゃ、頑張れ」

「でもHP少なくなったら下りてこなくなったりすんじゃないのか？」

洸哉は不思議そうに尋ねてきた。

「あのな、モンスターは生き物じゃないんだぞ。ゲームのデータと同じ。ただ攻撃してきて、やられて、経験値とたまにドロップする金やアイテムになるだけ。だから決められたとおりに攻撃してくる。わかったか？」

「なんかなつとくできないな……」

それもそうだろう。今まで15年間見てきた生物とまったく同じ姿をしているのに、それは生物ではないのだと言われているのだから。

だが、モンスターとはそういう物なのだ。
神様がそう作ったのだからその事実は覆らない。

「ほら、来たぞ」

急降下してくる体に一太刀決めようとするが、狙いを外してクチバシがHPを少々削る。

ダメージが少ないため、痛みはそれほど感じないが、死に近づいている感覚は不快でしかないだろう。

剣を教えたとおり中段に構えて、タイミングを計り始めた。バードは空中で旋回してから急降下する。

洸哉まであと5メートル。4メートル、3、2、1……。

剣を横に振る。だがタイミングが遅い。さっきよりは惜しかったが、今度も当らない——はずだったのだが、その体に剣は命中していた。

しかもHPは0。消滅を意味する光の粒子になり霧散していった。後方で待機していた健介が魔法を命中させたのだ。魔法の衝突で動きが鈍り続いて剣が命中。HPの少ないバードならこれで死ぬのも無理ないだろう。

「ナイスヒット。健介はそのタイミングで良い。洸哉は少し遅いな。焦らず、じっくり狙うように」

「ちくしょう。もう1回だ！」

次の目標を探して洸哉が歩き出す。やる気だけはあるようだ。

「そろそろ健介のMPもなくなってきたか？ あとどのくらい撃てる」

「えっと、あと2回しか撃てないですね」

「それじゃあはい、これ」

プレイヤーカードを開いて、アイテム欄からMP回復のポーションを3つ取り出した。何もない空間から、瓶が次々に現れ、それがゆっくり手の上に乗る。

瓶の中身はMPを50回復させる薬だ。健介ならMPが全快する。それを落とさないようにそつと渡す。

「MPポーション。MPがなくなったら使うといい」

「いいんですか？」

「気にしないでいいぞ。私はあまり使わないし」

当然嘘だった。MPは人一倍使う。例え魔術士でなくても、アクティブスキルにはMPが必要だからだ。

だが、これほど効果の薄いポーションは使わないという意味なら嘘にはならない。

持っていても無用の品。ならば新参者に譲渡した方が良くに決まっている。

「それじゃ、ありがたく頂きます」

プレイヤーカードを開いてそれをアイテム欄に収納していく。

現れたときは反対に瓶は虚空に消えていった。

「もう少ししたらさっきのウルフ倒しに行くんだけど、もう1人くらい人数が欲しいから探しに行ってくる。それまでバードくらい余裕で倒せるようになっていろよ」

「いやいや。そんな早くは上達しないって！」

「大丈夫だろ。健介だって見ての通り余裕で戦えているし」

「そもそも半日でウルフと普通戦えるようにするって、どんだけ頑張るんだよー！」

そういえばまだ、授業が始まってから3時間くらいしか経っていない。

たしか授業は午後3時まで。つまりあと4時間以上もあるということか。

1日あればこんなチュートリアルフィールドなど、初心者だって完全攻略できるだろうに。このフィールドが親切で、先生たちまでもが親切とは。――無駄に親切だ。

「それじゃ、また後で」

洸哉の言葉など耳に入れず、ゲートの方向へ戻っていく。できれば近接戦闘が出来る人が欲しいなと、考えながら。

Now loading...

昼食を歩きながら取り、ゲートの付近までやってきた。

ゲート付近には人が沢山いた。それもそうだろう。今日の授業では新入生が全員同じフィールドに集まっているのだから。

ざっと見ると、今日が初めてだという者が大半を占めているのがすぐにわかるだろう。

この中から、一緒に狩るメンバーを決めなければならないのだが、選り取り見取りすぎて誰を誘ったものか迷ってしまう。

近接系の武器を持っていて、人柄の良さそうな、出来れば女子がいい。

男子3人の中に、女子の私が1人がぼつんという状況はあまり望ましくない。

普段の仕事のときはそれでも構わないが、学校までそうである必要はないだろう。

ふと、膝を下ろして休んでいる少女が目に入る。

身長がとても小さく、小顔なのと相まって人形のような。ショートカットにしている金色の髪も気に入った。肩の辺りで揺れる髪は、金糸にも劣らないほど美しい。腰に下げているのは短め刀身から片^{ショート}手剣だと推測する。

外見だけではショートソードとロングソードは見分けが付きにくい。名前から短剣と長剣という意味に思われがちだが、これは用途の目的の違いで分類されている。

ショートソードは歩兵用。ロングソードは騎乗用。そのためショートソードは短いが多く、ロングソードは長いのが多いのには違いないのだが、比較的長いショートソードと、比較的短いロングソードを比べると、ロングソードの方が短い場合が起こる。

80センチくらいの刀身なためロングソードかもしれないが、どちらでも性能としてはあまり差はないから気にする必要もないか。

能力的にも、外見的にも欲しい人材だ。後者のほうが理由として

は大きい。

ああ。あの小さい体を今すぐ抱きしめてみたい。

私はそっちの気はないが、犬や猫などの小動物を見ると愛でるような感覚といえかわかってもらえるだろう。

「あ、あの……」

気付くとすでに抱きついていた。

「すまない。失礼した」

すぐに体から離れる。

無意識に体が動くなんて、この可愛らしさは反則じゃないだろう
か。

魅力^{チャーム}効果でもついているのかもしれない。いや、私に利くはずはないから違うのだろうけど。

「あまりに君が可愛らしくてついな……。名前を訊いてもいいか？」

^{さきみや ゆづみ}
「崎宮優美です」

「月城羽衣だ。崎宮、といったな。あの崎宮グループの御令嬢か。
気の毒に」

気の毒だと言われたのに少し驚いているようだった。だが、彼女自身も、私と同じで立場が不憫と思っていることだろう。

崎宮グループとは、現在残っている数少ない会社のひとつだ。

定価で一定の商品を取り扱うNPC社に対して、崎宮グループはプレイヤーからNPC社よりも高く買い取り、安く売っている。それだけでは大きな儲けにならないが、取り扱っていないようなレアアイテムなどを売買ったときには大きく儲けが出るらしい。

プレイヤーなら崎宮グループを知らないものはいないとまで言われる有名な会社だ。その御令嬢がこんな普通の高校にいるとは。意外だった。

「偶然そういう苗字だったかは思わないの？」

「思わないな。たしか家がこの辺にあつたし、会長が金髪だったからな」

「詳しいね」

会長に関しては、実際にパーティー——狩りをするグループではなく、偉そうな人たちが集まる方のパーティーだが、それで直接見たこともある。

「そうか？ それに、そんな綺麗な金色の髪だ。そう思うのも無理ないだろ」

「あ、ありがとう。えっと、羽衣さんも綺麗な銀髪ですね。染めるわけじゃないよね？」

髪についてようやくツツコミを入れられたか。あの2人には見事にスルーされてしまったからどうしようかと思っていたところだった。

髪を手で梳いて、一瞥する。自分でも不思議なくらい綺麗な銀色だと思う。しかも手入れをろくにしなくてもこれなのだからなおのこと凄い。

「ああ。クラス影響だよ。あと名前は呼び捨てでいい」

クラスには、身体的に影響を与えるタイプのものがある。上位のクラスになればなおのことだ。

例えば狼人間^{ワウルフ}。あれは獣耳と、尻尾が生える。優美がそうだったらさぞ可愛いだろう。

「それじゃあわたしの名前も呼び捨てでいいよ」

「わかった」

優美も私と同じような悩みを抱えているのだろうか？

いや、望んで手に入れたものでも、自力で掴み取ったものでもない分、私よりも辛いだろうな。

「あ、でも呼び捨てってなんだか苦手だから羽衣ちゃんでもいい？」

「うん。いいぞ」

とくに呼び捨てでなければいけないわけでもないし、距離感のない呼び方であれば問題ない。

「それで銀髪になるっていうと天使？」

「そうだ。誰でもそうなるわけではないけれどな」

天使系統のクラスを持つていたとしても必ず銀髪になるわけでは

ない。金髪になったりする場合もある。他にも肌が白くなったりするらしい。

天使と聞けば羽が生えてそんなものであるが、それはアクティブスキルなので常にあるわけではない。

「ところでこれから暇か？ 連れとこれからウルフ狩りをしようと思っているのだが、人手が足りなくてね。よかったら一緒にどうだ？」

「え、いいの？ わたし、初心者なんだけど」

そんなのは装備を見ればわかる。私のようにわざわざ弱い物を持つてきていなければの話だが。

「もちろんいいとも。スライムくらいは倒せるか？」

「ちよつと無理かな」

困った表情でそう言った。

どうやら弟子がまた1人増えることになるようだ。

まあいいか。先人は新参者に培ってきた知恵や技術を教えるものだ。

「クラスとスキルを教えてもらっていいか？」

「クラスは冒険者で、スキルは――」

プレイヤーカードをおぼつかない手で操作している。どうやら機会とかは苦手のようだ。

クラスは冒険者か。なるほど。だからショートソードか。

冒険者のクラスは、近距離戦闘が比較的得意だが、それよりもスキルの多様性が凄い。モンスター探知や、畏解除、フィールド把握など大きなフィールドに行くときは重宝される。

「バトルセンス弱がひとつだけ」

「おっ！ 良いがあるな。これなら平気そうだ」

バトルセンスを若干底上げしてくれるスキル。弱なのはまだレベル1だからだろうが、これは上級レベルでも所有者の多い、需要の高いスキルだ。

簡単に説明するなら、戦闘のことにに関して頭の回転が良くなるだ

けなのだが、これが凄い。

強にまで成長すると戦いの中で、相手の動きを先読みして、カウンターやフェイントなどを次々に行うようになり、技術だけでも相手を圧倒できるようになる。

モンスターとの戦闘でも有効だが対人戦になると恐ろしいことになる。持っている者とバトルセンス強を持っている者が戦うと、もっていない者は手も足も出ずに敗北することなんてざらだ。

それほどまでに強力なスキル——の卵であるがそれを持っているのはなかなか運が良い。残念なことに、バトルセンスはレア度の低いスキルであるから珍しいわけではないけれど。

「少し肩慣らししていくか？」

「で、できればそうしてもらえると嬉しいかな」

Now loading...

いくらバトルセンスを持っていたとしても初めての戦闘はやはり不安だろつ。

2人のもとに戻る途中で丁度良くスライムに遭遇したので優美に戦わせることにした。

「とにかく剣を思ったまま振ってみろ」

洸哉のときとは違いなにも教えないで一度戦わせて見る。

彼女は右手で剣を中段に構える。肩には余分な力があまり入っておらず、洸哉よりも優れていた。

彼女が知っていたかはわからないが、中段に構えるのは相手の動きに対応しやすいからだ。そこから様々な形に移すことが出来るため、これが多く使われる。

「やつ！」

短く息を吐くと共に、剣が直線の軌跡を描きながら横に振られる。足もしっかりと捌けていて、剣にしっかりと力が浸透している。

動きとしては申し分ない。

そこから2撃目。3撃目と攻撃を繰り返し、スライムはあっさりと光の粒子になって霧散した。

「アビリティー、なにがあるか訊いてなかったな」

「剣技が8と筋力が2だよ」

合計値が10か……。

アビリティーはレベルアップごとに1から10上昇する。レベル1も同様に合計が1から10であるが、彼女は最大の10だったわけだ。

しかも剣技は剣を扱う能力を上げる。攻撃力はあまり大きく上がらないが、これもバトルセンス同様に優れたものだ。レアではないけれど。

しかし、こうなると冒険者より剣士の方が似合うパラメーターだ。洗哉が可哀想だな。

「これなら本格的に大丈夫だな……」

「で、でも！ 最初がたまたま上手くいただけだよ」

「ならバードとも戦ってみるか？」

コクリと頷いたので、もう少し歩いて中層エリアに行き、さっそくバードを発見する。

すぐに攻撃を仕掛けてきたバードだったが、優美の懷に飛び込んだ瞬間、2連撃を受けてHPを大きく減らす。これを洗哉が見たら絶望しそうだな。

再び攻撃を仕掛けてくると、次はタイミングを掴んだのか3連撃を与えてあっさりと倒してしまう。

これはアビリティーやスキル以外にも充分才能があるんじゃないだろうか。

「余裕がありすぎて逆に笑えないな」

ボソッと、聞こえない程度に呟いた。

「なにか言った？」

「いいや。ただその剣がショートソードか、ロングソードか気になっただけだ」

「ショートソードだよ」

「やっぱりか」

2人に合流するまでに、バードがあと3匹犠牲になったが気にするところではない。

4話 ウルフ狩り

「バードくらいは楽に倒せるようになったか？」

戻ってきてみると、洸哉は疲労困憊で地面にだらしく寝そべっていた。

「ちゃんと攻撃は当たるようになったぞ」

ゆっくりと気だるそうに体を起き上がらせる。

どうやらそのくらいには上達したようだ。これならウルフも楽に倒せるだろう。傍らでは健介が、炎弾を飛んでいるバードに命中させて落としている。こちらにも上出来だ。

こちらに気がついて、健介はバードをしとめてから近づいてきた。「それじゃ、今からさっそくウルフ狩りに行こうか」

「えっ！？ マジで？」

「マジだ。あつ、この子は優美。洸哉と一緒に近接戦闘で戦ってもらうから。よろしく頼んだぞ」

「崎宮優美です。よろしくお願いします」

ぺこりと丁寧に御辞儀をした。ふわりと金色の髪がたなびく。

一般的なマナーとしては間違っていないのだが、もう少し簡単というか適当でもいいのだけだな。初心者同士。同級生同士なんだから。ちなみにパーティーを組むときの自己紹介はレベルやクラス、得意なポジションなどを教え合うのだが、初心者だし、わからなくても仕方ないか。

教え合うといっても全てを言えばいいわけでもない。プレイヤーにとってパラメーターは生命線。情報が流れるのも避けたもの。不都合がないくらいになら嘘だって平然と教える。

例えば、クラス。レアクラスの剣聖だった場合、それを剣士だと言いつつ張ったところではたいした問題はない。逆にここで剣聖だと言ってしまうばそれを理由にアイテムの分配を減らされたり、さらにはPKといったプレイヤー狩りを行うものに簡単に対策を練られてや

られてしまっ。

レベルだつて少し少なめに言つたり、多めにいうことだつてある。この辺がプレイヤーとしての実力が問われるところだといえよう。

まあ、それすら無視するほど理不尽な力を持つていれば問題は無いのだけ。

「俺は八神洸哉。よろしく」

「僕は美鶴来健介です。よろしく」

どうやら崎宮という苗字には不審感を抱かなかつたようだ。

崎宮グループを知らない——わけではないよな。いくらなんでも苗字が崎宮だつたというだけで疑つてかかることないか。

「健介は後方から支援攻撃。私は補助魔法でサポートする」

「へえ。羽衣つてサポート系なのか」

「まあな」

当然私はサポート系ではない。サポートも出来るというだけだ。

ポジションは大きく分ければ2つある。

近接攻撃をする前衛と、後方支援をする後衛。

前衛は近距離で敵を押さえる壁になったり、戦いの要であるアタッカーになったりする。

後衛は遠距離から敵を攻撃したり、補助魔法などで味方を回復や強化する。

大抵は前衛の方が多くなる。前衛がいないと後衛の懐に入られて手痛いダメージを与えられるからだ。

そして私は前衛と後衛、どちらかと訊かれれば、どちらにも属すると答えるのが妥当だろう。

能力が自己完結しているのだ。ソロでも充分に戦えるように。

サポート系も、普段は自分用だが、味方にも使えるのでサポートも出来る。遠距離魔法や範囲魔法もあるので後方火力支援も出来る。さらには近距離能力も高いので近接戦闘だつて出来る。

万能型といえは聞こえはいいのだが、レベルが低ければどれも均等すぎて凄く弱いだけだ。レベルで誤魔化しているというのが正し

いだろう。

「ところで今すぐ行くのか？」

「なにを言ってる？ あたりまえだろ。時間は有限なんだ。ならば効率よく使うべきじゃないか」

「いや、俺もうへとへとなんだけど。少し休んでからにしない？」

「そういえば今まで洗哉はずっと戦いつばなしたたのか。慣れていないことをしたから体力的にも相当負担がきていることだろう。

このままでウルフとの戦闘にも耐え切れないかな。

「ヒール」

アクティブスキルの回復魔法の一種を洗哉に使用する。

白い光が体を包み、わずかに減っていたHPが全快した。

「あれ？ なんか体が楽になったような……」

「オーバーリカバリー。余剰回復とも言うが、回復量の余りが疲れも癒す効果のことだ」

この効果を発見した当初は、システムバグのようなものに思われていたが、NPCに問い合わせると仕様であることがわかったそう

だ。それからはオーバーリカバリーの利用は長時間の狩りでは基本中の基本になっている。不眠不休でもこれさえあればやっていけるだろう。そうしたいとは思えないけれど。

だがこれを知らないとは。予備知識程度に知っていてもいいだろうに。

「ありがとな」

「いいからさっさと行くぞ」

プレイヤーカードを開いて、パーティー登録をしながら歩いた。途中で健介にはもう1個MPポーションを渡すのも忘れていない。ついでに自分のHPとMPを非表示に設定する。

HPとMPはプレイヤーカードのオープン表示によって他人にも見えるようになっていいる。これは大抵の者はソロでない限りオープン表示にしている。他人に生命線を預けるのはリスクであっても、

危ない時は回復なり防御なりをしてもらえるからだ。

だが、私の場合は攻撃を受けたときや、アクティブスキルを使つたときの、残量のパーセンテージの減りが異常なことになってしまう。それこそ、なにも起きていないような量しか変化しないだろう。それでは今は困るのだ。多少不審に思われても非表示にしなければならぬ。

さて、準備は上々。レベル1は1日でどこまで育つか。

Now loading...

すでにエリアの境界線を越えて、奥地に分類されるところまで踏み込んでいる。

朝に洸哉と健介に会った場所だ。

数時間しか経っていないのに2人は随分と初歩を覚えた。もうトレインして身を危険に晒すなんて馬鹿なことはいらないだろう。

そういう人の成長を見るのは楽しい。最近ではあんまり簡単にはレベルが上がらなくなってきたツケが回ったのだろうか？ それでも他の上位ランキング者と比べれば随分上がりやすい方であるのだけど。

「ん？ 来たか……」

気配を感じた。気配といっても、直感という曖昧なもので計っているのではなく、経験に裏づけされた確かな理由で計っているつもりだ。

例えば、足音。これなら誰でも聞こえればわかることだろう。では風向きはどうだろうか。地形としてはそこに障害物を置かないとそのような吹かないような風向きの微妙な違い。それで完璧に測っているのではないけれど、なんとなく違うのはわかる。だが、最たるのはHPの認識範囲だろう。モンスターの上に表示されているHPの横線は、プレイヤーカードによって視覚化されている。つまり、プレイヤーカードが情報を受理し、処理しているのだ。その若干の

動作を見抜くことで索敵が行える、と考えている。

「グルルルル」

すぐに視認出来る位置までウルフたちはやってきた。数は自分が最初に相手したのと同じ6匹。直接攻撃するのは前衛の2人と、後衛の健介だ。単純計算では1人3匹だが、健介が大きく削りつつ残ったHPを前衛が消し切る感じになるだろうな。

近接戦闘に剣士と冒険者。後方支援に魔術士。案外良いクラスがそろったのかもしれない。戦闘についてもバランスは取れている。フィールドの攻略だって冒険者がいるから問題ない。

パーティーを組むときは、このようにバランスが整うように人数を集めるのだが、偶然が重なってこうもあっさりバランスの良いパーティーになるとは。天は彼らの味方をしているのかな。

それぞれ得物を抜刀し、中段に構える。これも両手剣の重いが威力のあるタイプと、片手剣の軽いが威力の弱いタイプがそろっているからバランスが良い。

このパーティーなら様々な状況に対応できるだろう。

「気を抜くなよ」

「わかつてる」

「当然です」

「はいっ！」

私の言葉に3人は頷き返答する。失敗しても私の回復魔法があれば死ぬことはないから安心しろ。と言うわけにもいかなかったので、気休め程度の言葉のつもりだったのだが……。随分やる気はあるようだあるようだ。

ウルフが動く。初手は変わらず2匹の特攻。洸哉と優美がそれぞれを抑える。

重たい体躯を剣で受け止める。アビリティ的に優美はなかなかきついものがあるだろう。だから完全に受け止めるのではなく、斜めに力を加えて受け流していた。受け流した敵を後に行かせない為にも追撃の一手を加えに向かう。

見た目によらず随分攻勢的なんだなと苦笑した。

「健介、サポート！」

「ファイアーボール」

一方、洸哉の方は健介にサポートをさせながら戦っている。洸哉の叫びと共に健介が魔法の炎弾を撃ち出す。直撃を受けたウルフの体勢が崩れて、そこから洸哉が剣で残り少ないHPを削りきる。バードと最初に戦った時と同様の戦法だ。

HPは見る見る減って、最後には光の粒子になって消え去った。

まだ初心者として大目に見てもいいが、この戦法に頼り過ぎるのは得策じゃない。健介の炎弾が外れたとき、洸哉は生まれるべき隙を失い、手痛い反撃を被るだろう。初心者だから仕方がないともいえるが、悪い癖がついてもいけない。そのうち教えておくか。

優美はまだ、攻撃を受け流しつつ小さい攻撃で徐々にHPを削っている。安定しているが、数あってこそその戦法だろう。

よくよく考えると、戦闘中にすることがなくて退屈だな。もしも攻撃力の高い敵だったら防御系の魔法で補助する機会もあっただろうに。

「ファイアーボール」

次の目標は優美の戦っているウルフだった。いくらかHPの減っているところ強力な一撃が加えられ、あっさりと消滅していく。

残るは4匹。その全てが同時に動いた。1対1の状況を作るべく個々に分かれて向かってくる。これはやっかいかもしれない。

健介は特に懐に入られれば弱い。魔術士なのだから当たり前だ。

ひとまず自分ところに向かってきたウルフだけはクレイモアを抜刀して倒すか。

だが、あまり力を入れ過ぎてはいけない。殺さないつもりで、表面を剣先がそつと撫でる程度の力で丁度良いくらいだろう。動きも出来るだけ単調にする。その場で上段に構えて、下ろすだけ。

それでも圧倒的パラメーターの前では、安物の剣でも伝説の聖剣の如き威力を発揮する。その刀身は触れるだけでウルフの体をバタ

ーのようにあっさりと切断した。この分だとデコピンでも一撃で倒せるかもしれない。なのに殺さないように、なんて出来るはずもないか。

これだと逆に不自然になってしまった。次回から改善する方法を考えないといけないか。

そういえば、健介の方は大丈夫だろうか。心配になって視線を動かす。

ウルフの前足が丁度、健介のHPに傷をつけようとしているところだった。焦る様子もなく、手に握った杖を顔面に打ち付けて、ウルフの突撃を止めた。

「ファイアーボール」

零距离からの一撃を受けて、ウルフの体が後に大きく弾き飛ばされる。本物の生物であれば、今の一撃で頭が爆ぜていただろう。

「ファイアーボール」

杖の先端で狙いを定め、弾き飛ばされている体に追加攻撃を与える。炎弾を2発も受けて、平気であるはずもなく、HPと共にその体は消え去る。

案外、彼が一番接近戦が強いのもかもしれない。

もういつそのこと魔法剣士にでもクラスチェンジすると良いんじゃないだろうか。

大変なのはむしろ前衛の2人の方かもしれない。

だが案外、彼らも充分戦えている。

ウルフが突進してくると、優美がそれをショートソードで逸らす。受け止めると背後からぐっさりやられかねないので、なかなかに難しい作業だ。

洸哉は、優美が作った隙を有効利用して重たい一撃をバスターソードから繰り出している。それなりに大きくHPを削ぎ落としているく。

なかなか良いコンビネーションだ。2人だけでもウルフと互角以上に戦えるだろう。

「私、もう用済みだよな……」

呟いた側から洸哉の振るった剣が片方に止めを刺した。

残るは1匹。このまま2人にやらせても問題ない。

「そんなことないですよ」

私の独り言だったのだが、律儀に健介が言葉を返してきた。彼もこのまま2人にやらせても問題ないだろうと踏んで、手を休めている。

「僕たちだけじゃこれくらい強くなるのもっと時間がかかりました。でも羽衣のおかげですでにこうした場所に立てるようになってる。でもあなたから見たらまだまだなんですよ？」

「そうだな」

「でしたらこれから、たまに手を貸していただけませんか？ 友人として」

こちらに近づいてきて右手を差し出してきた。

「もちろんだ」

それを握って微笑んだ。同年代の友人が出来るのはとても喜ばしいことだったから。

視線を戦いに移すと、数の上でさっきまで互角だったのに、形勢逆転され一気にウルフは押されていた。

優美の細かい斬劇が動きを抑制させ、洸哉の強力な一撃がその合間合間に入り込む。あっという間にHPは残り少なくなった。

最後は2人の同時攻撃で幕を引く。光の粒子が勝利を称えているかのようにだった。

5話 行方不明者

何度目かのウルフとの戦闘中、暇になったのでプレイヤーカードをいじっていた。

時刻はもうすぐ、集合時刻の3時になる。

「そろそろ引き揚げるぞ」

「わかった！」

洸哉がウルフに剣を振りながら答えた。それほど余裕を持って戦えている。意外や意外。ここまで上達が早いとは思わなかった。剣を振るう動作も幾分かマシになっている。

2匹が同時に彼に襲い掛かるものの、片方を回避して、もう片方にはカウンターを喰らわせた。攻撃を受けた方は、残り僅かだったHPが完全になくなり、消滅する。

動きが軽やかになっているのはレベルアップしてアビリティーに剣技が追加されたからなのだろうか。それとも彼自身がもともと剣の才能を持っていたからなのだろうか。どちらにしても充分に凄いことだ。

途中からは健介の出番はなくなっていた。洸哉と優美が強くなってきた、支援攻撃する必要がなくなってきたからだ。

「これで終わりだ！」

言葉と同時にウルフのHPは消えて、さっきのウルフの後を追うように消滅した。

大きく息を吐き、バスターソードを腰の鞘に戻していく。

「お疲れさまです」

すでにウルフを倒していた優美が、洸哉のもとに駆け寄った。

何時間も続けて戦っていたのに汗も掻いていないのは、オーバリーカバリーの効果もあるが、彼女自身の精神力の高さもあるだろう。

強くて、お金持ちで、そして可愛い三拍子がそろった存在。

最強なんじゃないだろうか？ 主に可愛さが。

もう一度、あれをぎゅっと抱きしめてみたい。さつきつつかり抱きしめてしまったときに気が付いたのだが、抱きしめ心地が最高に気持ち良いのだ。例えるなら子猫。あの愛くるしさと、毛並みのふかふかさ。さらには肌の柔らかさに暖かさ。それを人間の粹に押し込めて再現したかのような。けれど完璧に子猫なわけでもない。その違いがより一層心地よさを高めている。

なんだろう。頭がくらくらしてきた。それに熱っぽい。風邪でも引いているのかな。——というのは冗談だが、理性と本能が戦っているのは間違いない。

現在互いの力は拮抗していて、錨迫り合いの真つ最中だ。最初に「急に抱きつくのは駄目だろう」と理性が打って出るが、それを本能は「なら断ってから抱きつけばいいじゃないか」と返してくる。

「嫌がるに決まってるだろ！」と理性は必死に抵抗するものの、「さつきはそんなに嫌がってないじゃないか」と叩き伏せる。「だけど常識的に駄目だろ」と悪足掻きを続けるが、「常識？ そんなの誰が決めた」と本能は屁理屈まで持ち出して攻撃の手を緩めない。このままだと理性が一方的に負けそうだ。すでに理性はHPは9割削り取られ、対して本能はというと全くの無傷だ。勝つ見込みはない。天秤は本能に傾いた。

「あのー……。羽衣ちゃん？」

気付くとすでに、腕の中には優美がいた。

そうか。私の理性は負けたのか。

「すまない。失礼した」

名残惜しいが、そつと腕から開放した。

「ど、どうしたの羽衣ちゃん。急にその、抱きついてきたりして」「すまない。可愛いものには目がなくてな。犬とか猫とかを見るとついつい抱きしめたくなるだろ？ それと同じように体が勝手に動いてしまったんだ」

嘘偽りなくありのままの事情を説明する。

たまに聞く「つかつかとなつてやってしまったんだ！」という犯

人の気持ち、今の私ならよくわかる。かつとなってしまったんだ。仕方がないじゃないか。

「わたしは犬か猫ですか!？」

「それ以上だな!」

即答だった。

「というわけでもう少し」

放した腕が再び優美を捕らえる。

もうなんだっていいや。とにかく今はこうしていたい。それでいいじゃないか。

両腕で包むように抱きしめて、優美の頭の上に自分の頭を乗せる。髪からかすかに良い匂いもするし、身長差的にもこの位置は丁度良い。

「というわけってどういうわけ?!」

「あまり深く考えるな。それとも——嫌か？」

本当に嫌がつているのなら残念だが諦めるしかないか。

いくら可愛いからって犬や猫が嫌がつているなら、それでも無理に抱きしめようとはしないからな。

「え? いやそうじゃなくて」

「そうか。ならもう少しこのまま……」

嫌がつていないなら何も問題はない。

ああ。極上の幸せだ。レベルアップよりも何倍も楽しい。願わくば今日1日、ずっとこうしていたい。んー。すりすり。髪に頬を擦り付けてみた。

「早く行かないと集合時刻に遅れるんじゃないのか?」

「そうだった!」

洸哉の言葉でようやく我に返る。

プレイヤーカードの時計機能で確認すると、まだ急げば間に合うくらいの猶予は残っている。逆に考えれば急がないと間に合わないくらいの時間しか残っていないのだ。

「続きはまた後にしよう。急ぐぞ!」

「後があるの!？」

それからゲートのところまで私たちは走った。途中でモンスターに遭遇したが、全力で無視した。モンスターの群れを背後に走り続けるのは、いささかスリルがあり過ぎた。

当然私にとってのスリルではなく、他の3人にとってのスリルだ
が。

Now loading...

時間にはなんとか間にあった。けれども遅刻者が多くてまだ解散
になっていない。

ゲート付近には優美を見つけたときのように同級生が沢山いる。
これだけの人数がいる中で、誰がいて誰がいないのかは、プレイヤ
ーカードのアプリケーションを使えば簡単にわかる。もっとも許可
証明書がないと持っていないはいけないアプリケーションなので、教
師は持っているが、一般の生徒は持っていない。ちなみに私は持つ
ている。

「羽衣ちゃん。いつまでそうしてるの？」

「せめて解散するまではこうしてたいかな」

私の頭は現在、優美の上に乗っかっている。有限実行というやつ
だ。周りの生徒の視線が集まっているが、それほど気にすること
もないだろう。

優美は林檎のように頬を朱色に染めている。ああ、可愛い。

「なかなか遅れてるやつらがいるみたいだな。まったく、時間くら
い厳守してほしいものだ……。ん？　だが、おかげでこうして至福
の時間を延長するのに貢献してくれているのか。そうなるとこの状
況はなかなか喜ばしいことかもしれないな」

「あははははは……。はあ……」

なにやら優美が諦めた表情になっているがまあいいか。

さて、あの2人はなにをしているだろうか。少し視線を動かすと

すぐにその姿を見つけることが出来た。どうやら何人かの生徒に囲まれて今日のことについて話をしているようだ。

「今日洸哉たちはどうだった？」

「俺たちか？俺たちは午前中スライムとかバードと戦って剣の使い方とか練習して、午後からはウルフを狩ってレベル上げてたな」
その前にウルフに追いかけてたことを抜かしている。まあわざわざ言うことでもないか。

「マジかよ！」

「よくあんなのと戦えるよな」

「今度パーティー組んで一緒に狩ろうぜ！」

彼らを中心に驚きや、称賛の聲が上がっていた。ちょっとした英雄扱いだな。けれどウルフ相手にそんなに驚くことだろうか。

いくら初心者でも1日与えられればそのくらいには上達しても良いだろうに。

「どのくらいレベル上がった？」

「3つ上がった。今はレベル4です。皆さんはどうでしたか？」

「うわっ！高けえ。俺なんてスライムとしか戦わなかったからまだ2だぜ」

「俺は鳥とも少し戦ったからなんとか3になった」

「俺も3かな」

いくらなんでも意気地がなさ過ぎる。それでも男かよ。

それに比べて女子達は……。その辺で話している女子達の会話に意識を傾ける。

「ねえねえ。レベル今いくつ？」

「私？4になったよ。バードとかウルフと積極的に戦ってたし」

「ふーん。パーティー組んでたからそんなものなのかあ。私は5になっただけ」

「ええ！？凄いじゃん」

「そう？ソロでやってればこんなもんだよ」

皆さん随分とたくましいことで……。

それに予習もすっかりしてあるようだ。男子の方では鳥と呼んではたが、プレイヤーの間ではバードと呼ぶ。まあ外国に行くともた違ったりするのでかまわないのだが、日本ではそうなっているのだからそっちで呼ぶのが正しいだろう。

レベルが5になったと言う彼女の腰には細剣^{レイピア}が収められていた。刺突と得意とする武器だ。あれで向かってきたウルフを正面から刺したのだろうか。度胸が凄いな。きっとあれは強くなる。卒業する頃には、世間で充分通用するレベルになっているかもしれない。そのときは推薦状のひとつでも書いてやりたいな。

Now loading...

30分ほど経ったが、未だに帰ってこない者がいるようだ。

これはいくらなんでもおかしい。なにかあったんじゃないかと教師たちも動き出している。

「いくらなんでも遅すぎるな。死者が出ていなければいいのだが…」

…」

「えっ？ そんな!？」

優美の顔が青ざめた。

ちよつと軽率な発言だったかもしれない。

「ただの憶測だ。流石にこんな簡単なフィールドで死者は出ないと思う」

朝は洸哉と健介が危険な目にあっていたが、あれでも逃げ切ることは出来るのだ。死ぬことはそうそうないはずである。

「そ、そうだよね!」

「でもそれだと帰ってこない者たちは何処に行ったんだということになる」

「それじゃあ死んじやつたの!？」

「そうじゃない」

どうしたものか。このままここで捜査隊が来るのを待つのが正し

い一般的対応だろう。けれどそれだと手遅れになるかもしれない。最悪もう手遅れなのかもしれないが、それは言うまい。

教師たちだってそれなりのレベルはあるし、何人かが探しに出ているはずだ。それでも見つからない。本当に死んでしまったのか？その可能性を否定するなら他になにがある。

プレイヤーカードを開いてマップを確認する。

なにかあるはずだ。見つからない理由が。

「あいつら遅いよね」

「私ら待たせて何処で遊んでんだよ」

女子達の方からまだ帰ってきていない人たちの友人らしき会話が聞こえた。帰ってきていないのは複数人らしいな。まだ優美を抱きしめていたかったがしかたがない。ちよつと話を訊いてくるか。

「ごめん優美。少し歩いてくる」

「どうかしたの？」

「ちよつとね」

それだけ言って話していた女子の方に移動する。

「友達まだ帰ってきてないんだって？　少し話し聞かせてもらってもいいか？」

「なにあんた？　なんでそんなこと教えないといけないの？」

「こんなに人を待たせてるやつらがいったい何処でなにをしてるんだろうなって思ってたね」

「はあ？」

プレイヤーカードを操作して、今日入手した分け前と同じくらいの金額を取り出す。情報量としては少ないが、子供の小遣いとしてなら悪くない金額だろう。

一歩近づいてそれを強引に手に握らせた。

「ちよつと訳ありなんだ。話してくれないか？　彼らはいったい何処で行動してた？」

「えっ！？　あの、その……。奥の方でパーティー組んでウルフと……」

「最後に会ったのは何時？　そのときなんか言ってた？」

「えっと、えっと、最後に会ったのは昼食を取ってからだから2時くらいです。あ！　そういえばなんかもつと奥の方に行ってみるって」

「ありがと。これはささやかなお礼だよ」

その場からさっさと立ち去った。

奥の方？　なにかあったか？　もう一度マップを確認する。奥の方にはなにもないはずだ。ただフィールドの端であることを示す壁と、ほかには樹が数本だけ、なにもない草原に申し訳なさそうに置かれている。それ以外になにかあるのか？　――樹？

「おいおいまさかつ！」

マップとは別窓で他のアプリケーションを開く。政府の情報簿だ。一般的に公開されている物ではなく、情報部の人たちが独自に捜査して得た情報や寄せられてきた情報をひたすら書き連ねている物である。

上部の限られた人間しか閲覧することが出来ないのだが、生憎私はその上部の人間だ。職権乱用？　なんだそれは。使える物なら、使わずにどうしろと？

このフィールドの調査結果を表示させる。モンスターの出現率からドロップ率まで事細かに書かれているなかで、目的の一文を見つける。

『隠しゲート有り。条件は東の樹から順に一番近い樹を辿ること。』

移動先は――』

フィールドにはいくつかゲートがある場合がある。ゲートはNPC社への出入り口以外にも、別のフィールドと繋ぐ物もある。ここには一定の条件を満たすことでそれが出現するスポットがあるということだ。

そこに誤って入ってしまったのだろう。

先生たちに知らせるか？　だが一刻も早く向かうべきだろう。
「どうかしたの？」

優美がこちらに駆け寄って心配そうに見つめてくる。

「いや。ちよつと退屈になつてな。抜け出そうと考えてたのだよ」

「駄目だよ。そんなことしちゃ！」

「はははは……。ごめん！」

ダッシュでその場から逃げ出す。

「こらー！」

その場で怒っているだけで追いかけては来なかった。

よかった。追われたらなにかしらのアイテムで足止めしなければならぬところだった。

「それじゃあちよこつと確認してくるか」

誰も見えなくなると、脚の動きを速めた。異常な速さで草原を駆け抜けて奥地にたどり着く。あつという間だった。

東の樹から順にそれを追っていくと、情報通りゲートが現れる。

ゲートとは魔法陣のようなものが地面に描かれていて、そこから円柱のように上に向かって青い光が上がっているものだ。

光の中に足を踏み込み、行方不明者のいる可能性があるフィールドにとんだ。

6話 救出

たどり着いた先は、灼熱の炎が揺らぐ焼け野原だった。——いや、この場合は焼け続ける野原といってもいいだろう。

燃烧させる物がなくなつてなお、消えることを知らない炎。吸い込むとむせ返りそうになる熱気。

空は茜色に揺らぎ続けて、灰色の煙を昇らせている。

「危険なところだな」

振り返ると今来たゲートはなくなっている。

一方通行。出口は別。帰ってこれない理由はこれか。

教師たちもこんなトラップがあると知ったら生徒たちをこのフィールドに連れてこなかったろうに。下調べくらいもう少し念入りにしてもらいたいものだな。

マップを表示する。なかなか広いフィールドだ。地形も炎を避けて通るとなれば複雑になる。出現モンスターのレベルもそこそこある。最悪だな。

続いてアイテム欄を表示する。拡張されたアイテム欄には、大量のアイテムが入っている。レアアイテムから今日のために用意したレア度の低いアイテムまで色々と。

その中から銀板に魔法陣の描かれた探査用のアイテムを選んで実体化させる。

「アクティブ。^{サーチャー}探知」

使用を宣言したことで、発動を知らせるほのかな光を発して消滅する。これは付近に人間がいるかどうか調べられるアイテムだ。範囲は500メートル。なかなか高価なアイテムだったが、気にしている暇なんてない。

反応はなし。この辺にはいないようだ。

障害物となつている炎によるダメージを無視して、直線に1キロを3秒足らずで走り抜ける。

普通ならこのようなショートカットをすれば熱さにのた打ち回る結果になるのだが、HPと防御力があまりに高いので痛みなどないに等しい。確認してみると、わからない程度の量しかHPは減っていなかった。

もう一度、アイテムを使用して確認をする。

「いたっ！」

5人ほどの人数が集まって行動している反応が出た。

これかもしれない。急いでそこまで走ろうとしたとき、ふと気がついた。

助けに来たのが生徒って、明らかに不自然だよな。もしかしたら、私のレベルがばれることになるんじゃないだろうか？ それは嫌だな。

ともかく、人命がかかっているんだ。見つからないように接近だけしてみるか。

「最悪の展開だ……」

反応を示したのは、たしかに帰ってきていなかった生徒たちだった。証拠として、うちの高校の制服を着ているから間違いはないだろう。

問題は彼女らが対峙しているモンスター。ディノザウラという恐竜のような姿をしたモンスターだ。

体長5メートルにもおよぶ巨大な体躯に、それを支えるには十分な屈強な足。手は小さいが、鋭い爪があり、後で揺れる尻尾は地面から水平な高さに保たれている。口が若干開かれ、おぞましい歯が見え隠れした。

蜥蜴を巨大化させたようなその姿は、絶滅したはずのティラノサウルスそのものだ。だが、吐息から漏れる炎はまさしくモンスターの証である。

スピードはそこまではないが、高い攻撃力とHPを持つ強力な種類だ。もっとも、こいつはレベルはそこまで高くはないようだけれど。

彼女らの周りには炎の壁。退路はすでにディノザウラによって塞がれている。HPもいづらか減少していて、一発喰らえば即死するだろう。

絶対的強者は、ゆっくりと歩み寄り今にも攻撃を繰り出そうとしている。一步。また一步と近づき、その体がいきなり走り出し、ついに彼女らを死に追いやるうとする。

「エスカッション」

その体は、突如現れた白い結晶の壁に激突する。壁は彼女らを包むように球体形に展開されている。それは私の使った防御用の魔法だ。いくら足掻いてもあれを突破することは出来ない。

この間に、どうにか変装を試みるか。

アイテム欄から髪の色を一時的に誤認させるアイテムと、顔を隠すためのグラサン。服装を誤魔化すための適当な防具を取り出した。使用して装着して、これで完璧だ。

何処からどう見ても私は黒髪のグラサンをした通りすがりの人に見えるだろう。

炎の先に身を飛び出し、ディノザウラの真正面に立ち塞がる。

「大丈夫かい、君たち」

「えっ……？」

気が動転して、混乱しているといった顔だった。

まあいいか。このままこいつを倒して、集合場所に送り届ければそれでいいのだから。

「さっさと終わらせるか」

腰に下げたあるクレイモアを構える。ディノザウラは、こちらの実力を恐れたのか一歩後に退こうとした。だがそんな些細な行動すらさせる義理はない。

大きく体が前に飛び出し、横に振られたクレイモアがモンスターの腹を抉りとった。HPを無慈悲にも奪いつくされ、引き裂かれた部分は光の粒子となって砂塵のように風になびき、空気に溶けていく。速すぎる一撃は音の追従すら許さず、後ろのいる彼女らの目に

はなにが起こったのかもわからないだろう。

ゆつくりとクレイモアを鞘に収めて、彼女らの方を振り向く。

「誰も死んでいないか？」

「は、はい」

「そうか。それは良かったな。今後、このようなことがないよう、注意するんだぞ」

「はい！」

「それじゃ。これで一度戻ってから、再度集合場所にゲートを通って帰るように」

手に持っていたアイテムをそつと手渡す。ゲートと同じ魔法陣の描かれた銀板。それはフィールド脱出用のアイテムだ。高価で、子供が持つていて良い代物ではない。売れば大金になるだろう。けれど、ここからゲートのところまで護衛をしてやるのも面倒だしこれでいい。

「さあ。早くそれで帰るといい」

「あ、ありがとうございます！」

アイテムを使うと、地面に脱出用のゲートが出来上がる。

その中に飛び込み、彼女らは次々にフィールドから出て行った。

「さてと。私も戻るか」

まずは装備を外して制服に戻る。髪の色も無効化にするアイテムで元に戻して、グラスンもアイテム欄に戻し、元の姿になった。

マップを表示して、草原と繋がっているゲートを探す。そこまで距離はなかなかなかったが、ステータスが高いためすぐに辿り付ける。青い光に飛び込んで、着いた場所に入ったときと同じ最奥の樹の場所。

全力で走って、彼女らが戻る前に集合場所に到着した。

Now loading...

「羽衣ちゃん。もうさっきはビックリしたよ」

「あはははは。退屈しのぎにちよつと散歩に行ってきただけだ」
抜け出してからまだ5分も経っていない。

教師たちの苦勞を嘲笑うかのような早さで解決してしまったな……。
このような能力の差がレベル格差社会の原因になっているのか
もしれない。

「ところで全員集まったか？」

「あ、うん。今は先生たちに怒られてるみたいだけど」

「それが終われば帰れそうだな」

「解散時刻、3時半に変更になったよ」

「そうか」

どうやら、時間を多めに見積もって搜索するつもりだったらしい。
それが意外に早く見つかったので説教タイムになったのか。迷惑な
話だ。

まあいいか。解散までは至福の一時を満喫しよう。

出る前と同じように優美を抱きしめ、頭の上に頭を乗せる。

「うん。やはりここが一番だ」

「いやいや。そんな満足そうに言われても……」

あーもふもふ。最高。

剣と剣がぶつかる音がしたのでそちらの方向に目を向けてみる。

男子たちが模擬戦をしているようだった。そこには洸哉と健介の
姿もある。

「おりゃ！」

「うわあ!？」

洸哉の攻撃が入り、あっけなく相手をしていた人のHPを削られ
る。ダメージはあまり多くないが、いくらか繰り返すうちに残り7
割ほどになった。

「勝負あり」

審判をやっていた男子が勝負の終わりを知らせる。

HPの3割を減らされた方が負けのルールようだ。

互いに剣を鞘に戻して、杖を持った男子の方に向かっていく。

杖の外見から健介と違って攻撃魔法系ではないようだ。たぶん補助系。2人を回復させるのだろう。

「回復小」

アクティブスキルをそのまま読み上げて1人ずつ回復をさせた。

これだけで素人だとまるわかりだな……。HP回復系はヒールと言えは発動する。あれではわざわざ自分のスキルを教えて回るようなものだ。

「次、俺と戦おうぜ」

「おう。いいぜ！」

洸哉に模擬戦を申し込んできた男子は、洸哉と同じバスターソードを装備している。同じ武器同士。最も実力が試されることになるだろうな。

健介は斜めに下段に構えてノーガードを装っているが、相手は両手で持っているはずなのに明らかに右手に力が入っていて斜めに構えられている。肩にも力が入っていて、あからさまに不恰好だった。じっと出方を見守る健介。実力と釣り合わないほどの、桁外れの集中力だった。あの眼はほんの些細な動きすら見逃さないだろう。

相手が最初に打って出た。横から一閃剣が動く。それを洸哉は返して下から剣を突き上げ、そのまま相手の攻撃も弾く。外野から見れば圧倒的差があるかのように見えただろう。だがこれは洸哉が強すぎるのではなく、他が弱すぎるのだ。

なにも考えず攻撃を仕掛けるなんてまさしく愚の骨頂だ。あんなわかるように打って出たら返すなり、受け止められるなりされるのが当たり前だろう。それでもなにも考えず突っ込んでいくなんて、あの頭は飾りか？

生まれた隙から次々に攻撃を入れてあっという間にHPの3割を削った。くだらない試合だった。

Now loading...

あれから数十分。やっと解散の時刻になり、全員がある程度整頓して並んでいる。

「——というわけで皆さん。くれぐれも怪我のないように。注目。礼」

長々しい教師の話は御偉いさん方の話に似て、あまり聞いていて実のあるものではなかった。どうしてあんなに無意味なことをするのか理解できないな。

それからやつと開放されて、どつと会話が漏れた。

これからまたモンスターを狩りに行く者や、どこかに遊びに行くうとする者。ここで今日のことを語り合う者など、取る行動は様々だった。

私はどうしているかというと、相変わらず優美を抱きしめっぱなしだった。教師がなにか無駄な話を言っている間もずっとだ。これはやはり抱き心地が良い。一家にひとつ。いや、それだと取り合いになってしまいうから1人にひとつは欲しいものだ。

「よう羽衣」

気軽に話しかけてきたのは洩哉だった。彼の後には健介もいる。

「言っておくが優美はやらないぞ」

「違えよ！」

「それもそうか。おまえが手を出したら猥褻罪で捕まるものな」

もし捕まらなければ、天から無限にも思える量の炎の矢が降り注ぎ、街もろとも貴様の体を塩の柱にしてくれるがな。それとも黙示録の獣にでも餌として喰わせてやろうか。あれは強かったぞ。3年前、最高峰のレベルの持ち主たちが束になってようやく勝てたくらいだからな。

「おまえは良いのかよ……」

「私は女だ。ならば問題ないだろう？」

「そうなのか？ 健介」

「僕に訊かないでほしいですね」

「それで。いったい私になんのようだ？」

「今から俺たちまたウルフを狩りに行くんだけど一緒に来ないか？」
「なんだ。また行くのか。すまんが私はこれから用事があるので行けそうにないな」

こっちは学生が本職ではないから色々忙しいのだ。今日ももう少ししたら仕事に行かなければならないし。出来ることなら一緒に行つて優美を抱きしめながら観戦していたいのだがな。

「優美は？」

「わたしもちよつと用事が……」

たぶん家の用事だろうな。御令嬢だしそうそう暇ではないだろう。そっか。まあしかたないよな。それじゃあまた今度一緒に行こうぜ」

「暇なときにならないぞ。あと、朝みたいにあまり無茶はするなよ。むしろ無茶をさせないように健介、おまえが見張っている」

「そうですね。わかりました。それじゃあまた」

「ああ。またな」

2人の背中を見送つてから、やっと優美から体を離す。

そろそろゲートも空いてきたし、帰るとしようか。

「それじゃあ私は帰るが、優美も駅まで一緒に行くか？」

駅とは、フィールド移動用ゲートとか、駅と駅を繋ぐゲートのあるNPC社の建物のことだ。昔は地下鉄とかいうのがあったらしいが、長距離移動やら、プレイヤーの人が出勤ような場所になっている。

すぐそのゲートから出れば入ってきた駅に帰ることが出来る。

教師の話が終わつてすぐはだいぶ混雑していたが、今はある程度人数も減っていた。

「うん」

再び捕獲。

「うわっ！ ちょっと羽衣ちゃん?!」

アビリティーの筋力にものをいわせて、抱きかかえつつゲートに歩き出した。外見通り、凄く軽かった。このまま持ち帰りたい。い

や、流石に駄目だろうけどさ。

ゆらゆらと、地面から離れた優美の足は揺れる。この振り子加減が絶妙に面白かった。

「このまま帰るぞー」

「さ、流石に下ろして……」

「しかたがないな」

抱き上げてた優美をそつと地面に置く。

「お姫様抱っこならいいか？」

「駄目だよ！」

「ちえっ」

そのまま普通にゲートまで歩いた。

ゲートをくぐると、コンクリートに囲まれたわりと大きい白い部屋に出る。床にはゲートと同じ魔法陣。一般用だと改札になっていて、そこでプレイヤーカードを操作して行き先を決め、転送される必要金額が自動的に引き落とされるようになってる。

だが、この大きな目は少し違う。これは団体用のものだ。最初に定員分の金額を払っておき、そこに入ればそれぞれお金を払わずにすむ。学校などがよく使うものだった。

「私はこの辺で失礼させてもらおうか。じゃあな優美」

「うん。さようなら」

大きな扉をくぐって、部屋から出る。駅にはまだ生徒が少し残っていた。

それを横目で眺めつつフィールド用のゲートではなく、移動用の改札ゲートへ向かった。

行きなれた改札口に着き、プレイヤーカードで目的地を指定する。そこは県外で、少々値段は高いが経費が下りるから心配することはない。

ゲートが青白い光を放ち、そこにゆっくりと入っていった。

6話 救出（後書き）

これで授業は終了です

案外長くなってしまいました

次話は羽衣の所属している部隊についての話です

7話 1日の終わりに

駅を抜けると、すぐ近くに駐屯地がある。その中に私の所属する部隊も駐屯している。

Special high-level team。通称SHT。その第3隊だから第3SHTとなる。面倒なので隊員はそのままSHTと呼ぶけれど。

他の隊からは皮肉を込めて独占部隊とも呼ばれたりする。原因は主要任務が高レベルフィールドの調査や、全体のレベル向上による軍事力強化のために、フィールドを独占してしまうからだろう。他にも、クエストというNPC社の出すイベントを積極的に攻略するため、1度クリアされると再び出てこないようなクエストを独占してしまう。そのような理由もあって独占部隊と呼ばれたりするのだが、なにを言われようとSHTは、国内最高峰のエリート部隊だ。彼らも尊敬や、憧れは抱いていることだろう。

門のところで、警備員にプレイヤーカードを見せて中に通してもらう。

内部に足を踏み入れただけで、高難易度のフィールドに迷い込んだかのような重い空気を感じさせる。一般人が入っても、この異様な空気の中であられて倒れてしまうことだろう。

数ある建物のひとつ、SHT隊舎にさつさと足を進めて入っていく。

隊舎は清潔感に溢れて、とても隊舎に見えないような高潔感で溢れている。冷暖房も常時使用されていて快適温度に整えられている。シャワールームや娯楽室。仮眠室などもあり、初めて来た者なら高級ホテルではないかと勘違いをするほどである。

レベル格差社会において、国内で最も優れている者たちのための場所だ。こうなってしまうのも、必然的といえば必然的だ。

「姉御。御勤めご苦労様です！」

「「ご苦労様です」」

そんな彼らが全員、黒服にネクタイ着用。グラサンをかけて金ピカのネックレスまで着用して、ヤクザな格好をしていた。訂正しよう。エセヤクザな格好をしている。ところどころ、無理がきている箇所あるのだ。どことなく、声に凄みがなかったり、格好が似合っていない者がいて。

だがそれでも全員玄関に2列に並んで同時に頭を深く下げられれば、それはそれでヤクザかなにかに見えなくもない。

「いったいなんの真似だ？」

呆れながらも訊いてやる。もしもスルーなんかしたら、明日からこれがずっと続く羽目になるだろう。国のエリートがそんなんだったら幻滅どころの騒ぎではない。

「見てわかりませんか？ 姉御」

手前にいる男性が答えた。

「わからなくもないな。それより私は、どうしてこんなことをしているのかと訊いているんだ」

「姉御がグラサン買ってるのを見かけて思いついたんで実行してみたんです。気に入りましたか？」

あれを買っているのを見られたのか。

別に知られて困ることではないが、どうしてそこからこの発想に至るのだろうか？ こいつらの考えていることはなかなか理解しがたいものがある。

「とにかくその呼び方を止めろ」

「気に入りませんでしたか？」

「そうだな。女の子としては言われて喜ぶやつは少ないだろうな」

「そうですか……」

残念そうにその男性は視線を落とした。そんなに気に入ってたのか？ この呼び方。

「そうか！ なら女の子が喜びそうなシチュエーションを用意すれば良いんですね！？」

「どうしてそうなる……」

さっきまでの落ち込みようは何処へやら。意気揚々とした表情でいったいなにを思いついたというのか。若干気になりはするが、ここで止めさせておくべきか、否か。

「ちよつと3分時間を下さい。それまで外に」

「えっ？ や、おまえ……」

「さあさあ」

半ば追い出されるように隊舎を出される。

あれ？ 私ここで一番偉いよな？ 隊長だよな？

首を傾げて3分間。あいつにいったいどういった罰則を与えようか思考を巡らせた。——そうだな。トイレ掃除にシャワー室掃除、それに洗濯もさせるか。

丁度決まったところで、扉の中から「どうぞお入りください」という声がかかった。

再び扉を開けると、中央には赤い絨毯が敷かれ、その両端に、執事服に着替えた隊員たちが並んでいる。よく見ると全員が執事服ではなく、女性隊員はメイド服を着ている。さてはて、ここはいったい何処のお屋敷だったろうか？

「お帰りなさいませ。お嬢さま」

「「お帰りなさいませ。お嬢さま」」

さっきとは打って変わって、物静かなやわらかい声色でそろえられている。

「どうしてあんな短時間にこれだけのものを用意できたのか、理由を言ってみろ」

「いつかやろうと思っていたのですが、ついつい私も一同、忘れてしまっておりました。先程の無礼。真に申し訳ありませんでした。お嬢さま」

丁寧な物言いだが、話の内容は穏やかなものではなかった。そもそも何故そんな企画に全員が賛同するのだろうか。例えそれが副隊長の提案であっても、良心を持って断るべきだろう。

そう。先頭でこの企画を仕切っているこの男性は、まぎれもない副隊長である。普段は私の補佐なんかをしつかりとこなしているのだが、時折アホな部分が露見する。

立案したのがアホならば、賛同するこいつらもアホだった。

ここはそういったアホな連中の溜まり場ではなく、国のトップを担うエリート部隊じゃないのか？

たとえこいつが副隊長であつても、罰則は必要だよな。

「おまえ、今月トイレとシャワー室掃除な。あと洗濯も」

「な、なにがいけなかったのでしょうか。お嬢さま」

動揺しても執事キアラを忘れないあたり、ある意味では凄いのかもしれない。もともとレベル的にも凄い奴なのは間違いないのだが、こうもアホだと忘れてしまうな。

「駄目だな。統一感がない」

「でしたらどのようにすればよろしいのですか？」

「全員メイド服だったなら、罰則はなしでも良かったんだがな…」

…」

ここで無理難題を押し付ける私も、随分ひねくれていると実感はしている。

「わかりました。少々お時間を頂きます。扉の外でお待ちください」

「えっ!？」

再び追い出されて3分間。本当にやるのか？ という驚きと、その地獄絵図的光景に戦々恐々して待たされることとなった。

地獄扉の中から「どうぞお入りください」と声がかかり、決死の覚悟でその戸を開けた。

「どうでしょうお嬢さま。申し付けられたとおり、全員がメイド服に着替えました」

「想像絶するグロテスクだな。目が焼け落ちそうだ……」

目に激痛が走った。この威力、メデューサと睨みあいをしたときに匹敵するかもしれない。普通なら石化の状態異常になるはずのメデューサの瞳だが、状態異常無効化のスキルを持っているため、あ

のときはダメージしか受けなかった。この光景も、見た者を石化か
なにかの状態異常にする効果を持つてそうだ。

むさ苦しい男性陣が皆メイド服を着用している。しかも頭にはレ
ース付きのカチューシャまで装備された気の入れよう。どうしてこ
の光景に、他の女性陣は平気なのだろうか。

「お褒めに預かり光栄です」

「全員さっさと戦闘用の防具に着替えて来い」

「はい」

その言葉を合図に、それぞれ装備を整えに解散する。

「それと、さっきの罰則。取りやめにしないからな」

「ええっ!？」

悲痛な叫びを笑い飛ばしながら、隊舎に設けられた私室へ足を運
んだ。

私のプレイヤーカードなしには開かないようセキュリティが厳
重に組まれた扉のロックを解除する。今のところ、プレイヤーカー
ドを使ったセキュリティは無敵を誇る。そもそも原理すら解明さ
れていないのだ。そんなものをどうやってハッキングなりなんなり
するのだろうか。ちなみに、他人にはプレイヤーカードは操作でき
ないようロックがかけられているため、盗難の心配もない。

嚴重な部屋の中は、デスク机と壁に並べられているレアアイテム
や武器防具が置かれた、いかにも高レベルプレイヤーとして相応し
い内装になっている。ついでに高校の教科書一式も置いてあるが、
これは家にわざわざ帰る手間を省くために置いてあるのであって、
自宅はことは別にちゃんとある。

隊長として、変なところはないはずだ。ただ一点、それらに混じ
ってぬいぐるみがいくつも置かれていることを除けば。私物の持込
は許可されているが、それでもこの部屋と相反するぬいぐるみが、
異様な存在感を醸し出しているのは間違いない。

ぬいぐるみに囲まれながら、プレイヤーカードを開いてこれから
のスケジュールを確認する。

「ふむ。なるほど……」

デスク机の椅子に腰掛けて、大きな目のクマのぬいぐるみを抱きかかえながら事細かな内容に目を透視していく。ぬいぐるみの抱き心地は悪くないが、優美の方が何倍も上であったのは言うまでもない。スケジュールはいつもどおりレベル上げ。最低でもノルマとして1日1レベルは上げなければならない。

今日は荒地型の、フィールド名『雄々しき竜の地』という場所で午後4時から早朝6時まで狩りを行うらしい。これだけ長時間の狩りはオーバーリカバリーあってこそその方法だ。

マップは荒れ果てた大地が広がってるだけで障害物などはほとんどない。ただし大きい。端から端まで20キロはある。簡単な構造だからこそ、その広大さがよくわかる。

主要モンスターは『リンドブルム』。体長15メートルほどの翼を持つ竜だ。竜種は能力値がとても高いが、その中でもリンドブルムは飛行速度が非常に高い。それでも戦う理由は当然、経験値が相応に高いからである。

トラップの類はないようだが、空からの奇襲には注意が必要だ。表示されている内容を他にも流し目で追っていく。その中に興味深い内容があった。

出現量だ。その数がなかなか多い。今までどうしてここが狩り場になっていなかったか不思議なくらいだ。

いくつかの分隊に分けてサーチアンドデストロイで戦えば広大なフィールドを存分に活用できるだろう。

特に問題視する点はないため、愛用の防具に身を包む。

白いコートに、金系で装飾が施された美しい防具である。見た目とは裏腹に、並々ならぬ防御力と魔防力を秘めている。アビリティの欄に神性があり、なおかつそれが一定以上の数値でないと装備しても効果の得られない、装備条件の厳しいものだ。隊の中でも装備できるのは私くらいなものだろう。

腰に下げている剣は、クレイモアから『グラム』に変えられてい

る。攻撃力もさることながら、竜種に対して追加ダメージの効果がある。なので今回はこれを使うことにする。

両方が貴重な武器防具で、ステータスの上昇値がとても大きい物だった。

最後にアイテム欄を調整して、プレイヤーカードを閉じた。

Now loading...

「全員そろってるな？」

「はい」

午後4時丁度。NPC社の団体用ゲートに、SHTの隊員30人が集合している。前衛16人。後衛7人。補助系4人。その他3人の安定したパーティーだ。これをさらに5人の6つの分隊に分けている。

それぞれ自慢の武器防具に身を包み、出発を待っていた。

「全員無理のないように。作戦は伝えたとおりだ。では行くぞ」

「はい」

プレイヤーカードを操作してフィールドに移動する。

30人全員がその場から消えうせ、次の瞬間には荒れ果てた大地の続くフィールドに立っていた。地面は旱魃していて、草木も枯れ果てている。生物が暮らせるような環境とは、とても言いがたい。

各分隊は一斉に決められた場所に向かう。モンスターを搜索する場所が一点に集中してしまうと効率が悪いので予めおおよその担当場所を連絡しておいたのだ。

私の率いる分隊のメンバーにアイコンタクトを送り、担当場所に走り出す。

メンバーは、前衛に2人。後衛が1人。補助1人。その他1人。その他に含まれているのは私である。

今回の戦い方は、基本的には前衛に加わって、距離を取ってこられたら遠距離から攻撃する形になるだろう。

そうこうしているうちに一体のリンドブルムが空中を旋回しているのを発見した。まだ気付かれていない。先制攻撃のチャンスだ。
「スパーク」

後衛が遠距離狙撃用の雷魔法を使用する。雷が落ちたときと同じ轟音が響き、同時に杖からは雷槍が生み出される。雷槍は真っ直ぐ竜の体とHPを貫いた。

体を一度震わせて、すぐにリンドブルムはこちらに向かって降下を開始する。その速さは凄まじいもので、私でも逃げ切るのは難しいかもしれない。

「スパーク」

同様の言葉でも、後衛が放った魔法は別のものだった。さっきとは違い数十の雷が散弾銃のように撃たれ、その全てを的確に竜の体を襲った。

「ホーリーフレイム」

私も魔法で支援する。聖属性と炎属性の両方を持った、聖炎の蛇を放つ魔法『織天使^{セラフィム}』だ。単発の威力は少ないが、消費MPの少なさが魅力的な魔法だ。もっとも、これは連射して使うものであつて、そうすると消費MPは他のと対して変わらなくなる。それでもこれは魅力的な魔法だった。連射性能が高いのだ。毎分600発。機関銃にも匹敵するその連射性能は、MPを大きく消費する。

連鎖の際には何度も唱える必要はないので、今の一言を引き金に聖炎の蛇が火炎放射器のようにリンドブルムを焼き始める。だが、炎といっても聖炎だ。純白燃える幻想的な炎は噴水のように美しかった。

HPを減らしつつ地面まで迫ってきたリンドブルムは、続いて前衛2人の、剣と斧を使ったスキルに阻まれてこちらまでたどり着けない。私も前衛に参加するべく能力上昇のスキルを使用する。

「エンチャント」

武器強化魔法『織天使の剣』。グラムが聖炎を纏い、刀身に『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな……』と文字が浮かび上がる。

「天使化」

続いて基礎能力強化魔法。こっちは隠せるような魔法ではないのでそのままスキルを読み上げる。名の通り天使になる魔法だ。クラスが天使系統なら大抵は覚えることが可能で、ステータス上昇の他に飛行も出来るようになるものなのだが……。

私の背中からは左右に6枚、つまり合計して12枚もの羽が生えた。実際に皮膚を突き破り服を突き抜けて生えているのではなく、背中から少し離れた虚空に根元がある。この枚数は私のクラスを象徴するものだった。

天使系統のクラスは下は第9階級の『天使』^{エンジェル}。上は第1階級の『織天使』^{セラフィム}、名前を持つ天使といった順に分かれている。

名前を持った天使の中でも頂点に君臨するのが私のクラス『天使長ルシフェル』。神の最も近き存在といわれ、後に反逆を起こし失墜したとされる最強の天使だ。証拠に、他の天使では6枚までしか許されなかった羽を、倍の12枚も所持している。高位の天使ほど羽が多くなる。つまりルシフェルとは他とは比べ物にならないほど高位の天使ということだ。

失墜したのになぜ天使のクラスなのかというと、これは失墜する以前の情報を基にしたからだそうだ。

このような上位クラスは全く同じものを持つ者がいないように設定されている。だからこの羽の数からどんなクラスかも、私が誰なのかも易々と知ることが出来る。

隠しても無駄なのだ。だからわざわざスキル名を隠して唱える必要がないのである。

「2人とも下がって回復」

前衛のHPが半分を切りそうだったため一度後退させて回復をさせる。

その間、私は単身でリンドブルムに剣を向けた。

鰐ワニのような鋭い牙を剥き出しに、こちらを睨みつけてくる。直後、鷲のような腕——前足がHPを引き裂かんと迫り来る。

地面と前足の間には僅かな隙間があった。そこに飛び込み攻撃を回避すると、無防備な腹が眼前にある。強化されたグラムが、その体に傷を付ける。私のスキルには近接攻撃用のものがない。だから今繰り出しているのは紛れもない私だけの力だ。莫大なステータスのせいで、大地を抉るような暴風を巻き起こしながら剣は次々に竜のHPを破壊していく。

「グオオオオオオ！！」

ただ攻撃を受け続けてくれるような軟な相手ではないため、すぐに次の攻撃が来た。同じように腕を振り払い、今度は私を弾き飛ばそうとする。同じ失敗はしないようにと地面すれすれを狙ってきたため、今度は跳躍してその回避を試みた。

皮膚が若干の熱気を感じる。

「エスカッション」

私が防御用の魔法を使用すると同時に、リンドブルムは炎を吐息に乗せてきた。

夕日のようにめらめらと炎が、展開された青白い結晶の盾を被う。盾はどちらかといえば結界のようなもので、私を中心に球体状に出現している。中心を他の者に変えることも出来るためサポート用にもなる優秀な魔法だ。

吐息を諦め、口から流れ出す炎の嵐は止む。それを確認しつつ魔法を解除した。——その瞬間に先端が三角形に尖った尻尾が私に狙いを定めて突きを繰り出す。魔法は間に合わない。手に握り締められているグラムの平部分でそれをガードするが、ダメージを殺しきれずにHPが若干減少する。そのまま剣のように尻尾は連続攻撃を繰り出す。

それを飛行して回避やガードをする。現在私の背中には天使の象徴たる純白の羽があるのだ。飛ぶのは当たり前である。

「スパーク」

初撃の遠距離攻撃が後方から放たれ、顔面を打ち抜く。下には回復を終えた前衛2人が、左右から攻撃し始めていた。リンドブルム

のHPは6割を切った。なかなか良いペースだ。

尻尾を避け続けてもいずれこちらが勝つ。だが、ただ勝つのが目的ではないのだ。より早く。より多く。戦闘訓練ではなく、レベル上げなのだから。

大振りの一撃を回避したやところで距離を縮めて、スピードを殺さずに炎を吐き出してくれた口に剣を突き立てる。牙がと牙の間に隙間があったので、すんなりと刀身は薄暗い喉に切っ先を向けている。

「ホーリーフレイム」

剣の先端から魔法が放たれた。当然そこはリンドブルムの体内だ。こいつは炎属性に耐性があるが、光属性には案外弱いのだ。秒間10発もの魔法が内部からHPを駆逐する。必死に振りほどこうと顎にしがみついて私は離れない。炎を吐き出そうと魔法と相殺されて効果を得られない。尻尾を使おうとしたが、補助役が盾を展開して攻撃が届かない。八方塞のままりンドブルムは消滅した。

死骸は塩の柱となって崩れ落ちる。聖属性で倒すと、光の粒子にならずにこうなって消滅するのだ。

「アイテムのドロップはないか。まあいい。次を探すぞ」

「隊長容赦ねえ」

「これじゃあどっちがリンドブルムかわからねえな」

リンドブルムとはヨーロッパで紋章として使われており、『敵対する容赦のなさ』という意味だった。なるほど確かにそのとおりだな。

後日、リンドブルムの紋章には『雄々しさ』という意味があることを知った私は、リンドブルム呼ばわりした隊員を絞めていた。

7話 1日の終わりに（後書き）

今回は羽衣の日常とパラメーターについてです
羽衣ちゃんはいつもこんな感じに生活しています

最初のもつと殺伐とした雰囲気になる予定だったのですが
いつの間にならエリートが馬鹿になってました

ちよつと羽衣ちゃんの情報公開

月城羽衣

クラス：天使長ルシフェル

スキル

- ・織天使（Holyflame）：聖炎の蛇を撃つ。連射性能有り
- ・織天使の剣（Enchanto）：武器の能力値向上
- ・天使化：能力値向上。12枚の羽が生えて飛行可能になる
- ・守護天使の盾（Escutcheon）：対象を中心に球体状に結界を張る
- ・祝福（Heal）：HPを回復。回復量は魔功力に依存する

8話 洸哉の1日

広大な草原が何処までも続いているようだ。

初めてのフィールド。プレイヤーカードを発行してもらっている最中から、ずっと胸の高鳴りが止まず心臓が破裂してしまいそうだった。

ゲームの中に夢見ていた世界が目の前に広がっている。

興奮に汗ばむ手に、ぐっと握り締められているのはシンプルな外見に包まれた初心者用の剣。分類はバスターソード。さっきプレイヤーカードで確認したから間違いない。ずっしりした重量が、これを現実だと再認識させてくれた。

まだ、ここはゲートの近くだから他の生徒もぞろぞろいる。

パーティーを組んで狩りを試みる者。はたまたソロで狩りをしようとする者。待機して様子を見る者。色々いるが、俺もパーティーを組んで狩りをしてみようと考えていた。

群衆の中に、その影をやっと見つけて急いで駆け寄る。

「おい、健介。パーティー組まないか？」

呼ばれたことでこちらの存在を認識して振り返るそいつは、俺の幼馴染である美鶴来健介。

背は高く、スラリとした体格。ネクタイをピシッと締めて、眼鏡をかけて、いかにも優等生に見えるコスチューム。どっかのエリートキャラとして出てきそうな人間を思い浮かべればいたいこういう姿になる——といった容姿だ。確かに健介は成績が良い方だった。でも真ん中より上。トップに名を連ねるような猛者ではない。運動神経もこれといって平均的。ゲームもするし冗談も言い合う。いたって普通のやつだ。

「いいですね。洸哉はクラス、なんでしたか？ 僕は見ての通り魔術士でしたよ」

手に持っている樹の杖を見せながら言った。

こいつが丁寧な口調を使うのは誰に対してもだった。特に理由はないらしい。

制服を着たままファンタジーな物を持っていると結構違和感がある。つまり、俺も充分違和感の塊になっているのか。鏡があら自分の姿に笑い出しそうだ。

「俺も見たまんま剣士だよ」

「いいですね、剣士。僕も剣士がよかったな」

「でも魔術士も楽しそうだよ」

「魔法が使えるという点では良いかもしれませんが、僕は実際に剣を振ってみたかったですね」

「そっか。でもクラスって変えられるんだろ？　いつか変えればいいじゃないか」

「まあ、そうですね」

立ち話を少々してから、他の友達に声をかけてみたがいくらかメンバーが集まっていてパーティーは断られてしまった。

しかたがないので2人で狩りをすることになる。

生徒の集まっている場所から少し離れるとすぐにモンスターは見つかった。

緑色のゼリー状のなにかが集まっているそれはゲームでは定番のスライムだろう。しかし実物を見るとなんと不気味で、グロテスクなものだった。

腰に下げている剣を抜き、それを思い切り液体に突き刺した。なんともないえな感覚が伝わり、鳥肌が立つ。剣は、貫くつもりで力を入れたのに胴体で止まっている。かわりにスライムの上に表示されているHPが減っていた。HPをなくさないで怪我を負わない。それは人間もモンスターも共通することだ。

剣を何度か打ち付けてHPを全てなくす。さっきまであった液体状の体は光の粒になって空気に溶けるかのように消えた。知識ではそうなると知っていたが、目にしてみると、実に幻想的な光景だった。

プレイヤーカードを開いてみると、経験値と金が若干増えていた。その後に、どっと意識を揺さぶられる。金が手に入る。それだけが意識を支配し、埋め尽くし、脳内を飽和水溶液のようにした。「ちよつと奥まで行ってみないか？」

だからこんな馬鹿げた提案をしてしまったのだ。

Now loading...

逃げていた。背後から死が近づいてくる。

奥には狼のようなモンスター、ウルフがいた。1匹ならなんとかと考えていた。だけどそれはあさはなか考えたったのだ。

ウルフは群れで行動する。偶然最初に遭遇したのは2匹の群れだった。調子に乗って剣で攻撃してみた。だが、当然ない。何度振っても当たらない。

恐くなった。必死に振ってやつと一発。だが、HPはスライムほどあっさり減りはしなかった。

危ない。逃げないと。とにかくその場から離れようと2人で走った。

結果は最悪だ。次々に他の群れを引つ掛けて、巨大な集団を形成してしまった。立ち止まれば死ぬのは明白だった。

酸素が回らなくなつて、意識がぼやけ出す。手足もほとんど自由が利かなくなってきた。駄目だ。ここで止まったら死ぬ。恐怖がかってに体を動かしていた。

「誰かつ！ ちよつ！ 助けてー！！」

必死に叫んだ。そこに救いの手が差し伸べられる。

「ゲートの方向に逃げるぞ」

突如として、隣に誰かが並んで走り出した。

混乱中の意識ではどんな人物が確認することは出来ない。でも声色からして女子であると判断できる。かっこ悪いなんていつてられない。声に従おうとして、ゲートの方向がわからないことに気がつ

いた。

「え？ あ、ああ。わかった。あれ？ ゲートってどっちだっけ？」
「あっちだ」

指差した方向を確認して、一度頷いた。

その方向に、何処までも何処までも走った。同じ場所をループしてんじやないかと思うくらい長い道のりだった。実際には5分も走っていなかったけれども。

ウルフは追いかけてこなくなり、当面の脅威はなくなった。

無様に地面に横になり、切らした息を整える。

「ありがとうございます。本当に助かりました。礼を言います」

「マジで危なかった。ありがとな」

健介に倣い、礼の言葉を述べる。

もし彼女が助けに来てくれなかったいったいどうなっていたか。

考えるだけでも背筋が凍りそうだ。

「あんまり奥に行くなと先生方も言ってたはずだが？
もう子供という年齢でもないのだから少しは考えて行動した方がいいぞ」

まったくの正論だ。自分の愚かさに顔も上げられない。

「えつと少年。名前は？」

「八神洸哉だ。よろしくな」

名前くらいは流石に顔を見ながら言った方が良さだろうとしぶしぶ視線を命の恩人に向ける。

そこで俺は言葉を失った。

モンスターに追い回されていたときよりも鼓動が大きく高鳴る。意識が再び暗転しそうになるが、ぐつとその場で堪える。

手足が震えるのを我慢するが、焦点はぶれまくって視界を安定させない。

助けてくれた女性は、天使のように綺麗な姿だった。

ここに来て色々幻想的な光景を見た。でもこれ以上幻想的な光景はないだろうと、確信を持って言える。それだけ現実離れた美し

さだった。

銀色の腰辺りまで伸びた髪が風邪に揺れる。息が詰まりそうになった。

「うん。よろしく。では、洸哉君。君は特に反省するように。もしもまたこんなことがあったら君、今度こそ死ぬ《・》ぞ」

強みのかかった声で、男勝りな口調だが、それもそれでありなんじゃないかと思えてきた。

むしろ彼女ならなんでも最高である。いつのまにやら洗脳されかかっていた。でも後悔はしない。といかできない。

「あ、うん。今度から注意する」

なんとか言葉に出来たのはその程度だった。

「そっちの少年、名前は？」

「御鶴来健介です。よろしく」

「月城羽衣だ。よろしく。健介君もこれからちゃんと注意するよ
うに」

「わかった。気をつけるよ。ところで月城さんはフィールド、初めてじゃないみたいですね」

「月城さんという呼び方は嫌だな。普通に羽衣でいい。洸哉君、君もそう呼んでくれ」

「ああ。なら俺のことも洸哉って呼んでくれ」

反射的に言葉が出てしまった。

やばい。緊張した。

「僕の方も健介って呼んでもらえますか」

「うむ。改めてよろしく。洸哉に健介」

微笑みながら名前を呼ばれて、ドキリとした。

Now loading...

あのあと、彼女から戦闘指南をしてもらって随分まともに戦えるようになった。

剣の持ち方を手取り足取り教えてくれたときには心臓が止まるんじゃないかと思った。

近づいたときに嗅覚を刺激した匂いは、幸せな香りがした。麻薬ってきつとこういう感じの匂いがするんだろうな。

それから、昼にのなるとウルフ狩りをすると言って女子を連れてきた。

背の小さい小柄な子で、名前は崎宮優美というらしい。金髪で可愛い子だったが、羽衣の前では見惚れるほどではない。単体で見れば、十分に可愛いのだけどなあ。

ウルフ狩りは順調に進んで、レベルが4に到達した辺りで時間も頃合いとなり退散することになる。

集合場所に帰ろうとしたとき、何故か羽衣が優美に抱きついていった。

今度こそ死ぬかと思った。

これはやばい。小動物を抱えてるみたいで可愛い。むしろ優美の可愛さがそのまま羽衣に追加されているような、ファッションの一部のようになってる。

「ちょ、助けてくれ。健介……」

「気持ちわかりますよ。でも僕にどうしろと？」

「画像に、保存して、く……れ……」

「そういえばプレイヤーカードにカメラ機能がありましたね」

プレイヤーカードの画面は可視モードにしなければ他人からは見えない。そのことに感謝しつつ、その画像を壁紙にしようと心に決めた。

凄じ嬉しそうな顔をしていて、羽衣の魅力は増量中だった。

「頼んだぞ……」

「自分のですれば良いんじゃないですか？」

「無理。直視すると三途の川を渡りそう」

嫌そうな顔をしていたが、「しょうがないですね」と言いながら撮ってくれていたところを見ると、やっぱり良いやつだなと、感心

する。

ゲートに戻ってからは、男子の輪に入ってどのくらいレベルが上がったとか、どんな風に狩りをしたとか、話をしてたらだんだん盛り上がって最終的には模擬戦を開始した。

たまに羽衣の視線を感じてやる気を出していたのだけど、途中から見向きもされなくなったのはどうしてだろうか。

解散は予定時刻より30分ほど遅くなった。

教師がなにやら言っているのを聞き流していると、いつの間にか終わっていた。

急いで羽衣の元に行つて、これから一緒に狩りをしに行かないかと誘ってみるものの、あっさり断られた。どうやらこれから用事があるらしく、それなら仕方がないと引き下がった。

結局狩りは健介と2人することになる。

なるべく少ないウルフの群れを倒して経験値と金を稼ぐ。

羽衣が要らないと言ってくれた回復アイテムもあつたので、案外2人でもどうにかかった。朝とは段違いに強くなっていることに、内心でははしゃいでいた。

ウルフは稀にHPポーションを落とすので慣れてくるとアイテムの減りは少なくなってきた。

「そろそろ7時だし、僕は帰りますけど洸哉はどうしますか？」

健介の言葉で、もうそんな時間になっていたのだとやっと気付く。フィールド内では時間の変化がわかりにくいから体内時計が狂っていたのかもしれない。

「先帰っていいぞ。俺はもう少し頑張ってみるからさ」

「そうですか……。無理はしないように」

「わかつてる。わかつてるさ……」

自分に言い聞かせるように繰り返し言った。

健介はそれからすぐに帰ったが、俺は9時まで戦い続けた。

何度目になるかわからない戦闘をしていた。最初は4匹だった群れは、すでに1匹まで数を減らしている。

飛び掛ってきたところを、横に避けつつ胴体に刃を入れる。

ウルフのHPは尽きて消滅した。

レベルアップを告げるファンファーレが鳴ったが、喜ぶほど気力は残っていなかった。HPポーションで喉を潤し、ダメージと疲労を紛らわす。

ポーションはいくら飲んでも腹に溜まらなかった。不思議だったが、いくらでも飲めるから便利だな程度にしか考えない。

体力もHPポーションもそろそろ限界に近かったので、そろそろ家に帰ろう。重たい体を引きずって、ゲートまで戻った。

Now loading...

「ただいま」

ボロアパートの扉を開ける。

外装がボロいだけあって、中身も充分廃れている。

今日フィールドで稼いだ分の金をいくらか大家に払ってきて、今月はまだここで暮らせそうだった。

「お帰り、心配したのよ！ 怪我はない！？」

「ああ。平気だよ母さん」

血相を変えて居間から飛び出して迎えてくれたこの人は、俺の母親だった。

栄養不足のためか頬はやつれて、顔色も悪い。

「良かった。良かった……」

過剰な反応だが、当然だった。

この家に父親はいない。俺が中学に上がる前に事故で死んだ。父さんはプレイヤーをやっていて、その頃はいくらか家も裕福だった。一戸建ての家もそろそろ買予定だったが、それは起きてしまった。

フィールドでのモンスターとの戦闘による事故死。

それが、母さんを変えてしまった。

最初は母さんも父さんが死んだことで俺を養うために働こうとしていた。だが、職場でパニック障害を起こしてクビになった。

なんとか今まで貯金や借金で暮らしてきたが、そろそろ限界だった。

でももう平気だ。俺みたにな子供でもプレイヤーとしてなら稼いでいける。母さんを養っていける。そのことが今日はっきりした。

「ほら、ご飯買ってきたから。一緒に食べよ」

「いつもごめんね。洩哉……」

「気にすんなよ。母さんが元気ない方がよっぽど辛いからさ」

古臭いテーブルを2人で囲んで食事をした。

今日はどんな人と会ったとか、楽しかったとか、俺が一方的に話すだけだったけど母さんは嬉しそうに相槌を打ってくれた。

「じゃあ、俺はもう寝るから。おやすみ」

そう言って私室に去った。

罪悪感が胸を締め付ける。

母さんは俺がフィールドに行くことにだけは反対だった。でも授業ならば仕方がない。そういうわけで今日は行かせてもらえた。

とにかく今の俺には——いや、家族には金がある。借金も返さないといけないし、溜まってる家賃も払わなければならない。そのうえ高校の授業料や、生活費もある。

本来ならば高校なんて通わずに働かないといけなかった。でもプレイヤー以外の道で短期間に大量の金を稼ぐ方法は少ない。

母さんを騙していることに、罪悪感で胸が締め付けられそうだった。でも、するしかないんだ。

窓を開けて、下を見る。ここは2階。靴も用意してあるし飛び降りたって平気な高さだ。

電気を消して、扉には鍵をかけたのを確認する。大丈夫、問題ない。

「母さん、ごめん」

飛び降りて地面に着地する。

向かうのは駅だ。今からまた狩りを再開する。

そのまえに回復アイテムを買い足さないといけないか。

時間が惜しい。疲れた体に入れて夜道を駆け抜けた。

8話 洸哉の1日（後書き）

今回は洸哉視点で1日を振り返ってみました

ぶっちゃけ羽衣の描写を書きたかっただけだったりします

それと、次話は「健介の1日」なんてことにはなりませんのでご安心を

9話 サンドイッチ

「ふああああ」

早朝までフィールドに籠もって、隊舎でシャワーを軽く浴びてそのまま学校に向かったため、昨日は家には帰えるどころか一睡もしていない。けれどもいくら今朝まで狩りをしていたからといって、オーバーリカバリーによって身体的疲れは取れているはずなのだ。だからこの欠伸の原因はきつと春の陽気にでも当てられたからだろう。

駅からのんびり歩いて約5分。マンションだったら売り文句に出来るほど近場に高校がある。

神立第18高校。通称18高校。それが私の通っている高校の名前だ。神立という響きから推測できる通り、これはNPC社の、神の作った高校だ。現在では神立第42高校まであったはずである。

友人からの推薦もありここに通うことになったのだが、偏差値もやや高い程度で特筆すべき内容はない。ただ、設備は充実している。教職員の給料も高い。NPC社ならではのイベントもあり、そういった利点を狙ったプレイヤー志望の人たちからの人気も高い。かといって別の職業についても手厚くサポートしており、上の下か、上の中くらいの学校だといえよう。

「どうして最初に日にクラス発表しておかないのだろうか」

今日は3日目にしてようやくのクラス発表。

初日の入学式では、体育館に集まって話を聞いただけで解散となった。

その翌日、つまり昨日はフィールドに集まってクラスも決めずに授業だけがあった。

なので教室に集まるのは今日が初めてになる。

目の前にある巨大電子掲示板には大量の名前が各クラスに分別されていた。1年生から3年生まであるのでその数は凄いものだ。

まだ朝礼の時間までだいぶあるが、そこには人込みが形成されている。うじゃうじゃとひしめき合う彼らを遠くから観測すれば、アリの観察でもしている気持ちになれそうだ。近くで見ればアリの大群に吞まれる状況を体感できるかもしれない。

あれに突撃するのは億劫だと悩む。悩んだところで名案が浮かぶでもないし、周囲の情報からヒントを拝借。

「おっ！NPC発見」

少し離れた位置にNPCが立っているのを発見したため彼女に聞くことにしよう。

NPCは全て解説役兼NPC社の社員であり、当然この管理も任されている。教職員の役割はないそうだが、臨時の場合はその限りではないだろう。彼女らは昔、神の使いだったことから天使とも呼ばれていた頃があった。だが、クラスに天使系統が追加されてからは分別のためNPCと呼ばれ、現在に至る。

容姿は国ごとに統一されており、日本の場合は黒髪を肩あたりまで伸ばした日本人形みたいな美しい女性の容姿である。外見からおよそ二十歳前後の年齢に思えるが、NPCは歳を取らない。顔は整っているのだが、どこか現実離れたような違和感を受ける。知り合いはそんなことはないと言うので、その印象は私だけが受けているものなのだろうけど。

「新入生、月城羽衣のクラスを教えてください」

「1組です。教室までの経路の説明は必要でしょうか？」

「よろしく願います」

人間のような声色で返答する。この通り反応も人間染みており、単純に答えるだけでなく気遣いも出来る。

つまり、人間も彼女らと同じようなものなのだ。そういう風に作られている。

彼女のわかり易い説明を頭に収めて教室へ向かおうとしたとき、ふと気になったので他にも質問をすることにした。

「崎宮優美という者のクラスも教えてほしい」

「1組です」

心の内側でガッツポーズをしたことは言うまでもない。

「ついでに八神洸哉と美鶴来健介のクラスも教えてくれ」

「彼らも1組です」

偶然にしては出来すぎていると感じながらも、悪くはないと感じる自分もいる。

知っている人物がいるのは良いことだ。もう優美が来ているかもしれないし、軽くNPCに礼を述べてから教室に足を運んだ。

教えられたとおり廊下を進むと『1-1』という表札が見えてくる。扉をくぐるとすでにいくらかの生徒が集まっていて、適当に雑談をしていた。

思い出してみると、昨日の授業で集まって行動していた連中だった気がする。優美たちと同じクラスになったのが偶然ではなく、昨日の結果を見て教師たちが即急に仲の良い人間通しが集まるようにクラス分けをしたのだろうかといぶかしんだ。事実であつたなら、その手際の良さは感嘆にあたいる。ありえないとは思っけど。

教室の中に知っている人がいないかと探してみると、優美がいた。抱きついた。

「おはよう。優美」

「……おはよう。羽衣ちゃん。今日もこれは続行なの？」

「むしろ年中無休でありたいな」

席は決まっていなくて、自由に座ってよさそうだ。ならば優美ちゃんの後の席を取る以外に選択の余地はないだろう。

なにやら他生徒の視線を集めてやまないが、きっと羨ましいのだろう。

抱きついたらついでに、ほっぺたを触ってみる。

「……………」

「ど、どうしたの羽衣ちゃん。鬼気迫った顔になってるよ!？」

「やばい……………」

「えっ?」

「肌の弾力と柔らかさ、さらにはすべすべ感がマッチして大変なことになってる。どうやら私は優美を侮っていたようだな。いったいどんな手段を用いればここまでの結果を弾き出せるのだろうか。いや、これは努力などで辿り付けるようなものではないな。天性の才能。そう言わずしてなんと言う。よもや神もこれほどのものを創造しうるとは……。流石は神といったところか」

「は、羽衣ちゃん?!」

神に畏怖敬遠の意を表しているところで、やっと我に返る。

あれ? 今なにを考えていたっけか?

「ああ、何故だろう。私は今、宇宙の真理に辿り着くところだった気がする」

「わたしのほっぺから宇宙の真理に辿り着くのは羽衣ちゃんくらいだよ」

教師が教室に来るまで残り数十分。その間、私がなにをしていたのかは語るまでもないだろう。

だがあえて言おう。優美に抱きついてふかふかさを堪能してたぜイエーイ! 私が男だったら絶対捕まってるよな。そして私が警察だったら犯人を私刑にしてから捕まえる。もし裁判官だったら当然死刑だな。

Now loading...

1時間目はさくつと自己紹介大会が行われた。

いや、普通の自己紹介だけどその方が語路が良いと私が思ったただけけど。

右端の先頭君から順々に立ち上がり、自分を紹介していく。自己紹介って直訳するとそういうことだよな? 自分を自分で紹介するなんて、おまえは何様だ! と感じるのは私だけだろうか。ならば他の人に紹介してもらえばいいというわけでもないので、口にすることはしないけど。

大会で優勝をゲットする自信はあったけど、そうすると面倒なことになってしまうので自粛する。紹介なのに嘘を吐くのも気が引けるので、出身中学とか好きな食べ物を言っただけで平々凡々を演じてみた。見事全員、私を平凡なやつだと認識してくれたことだろう。優美も充分過ぎる優勝候補だったのだが、戦意喪失で私と同じ道を辿ることを選んでいた。

嘘は言っていないのだが、中学校にはほとんど通っていない。小学校も同様である。あの頃は私も忙しかったのだ。下っ端では自分の都合で暇をもらうのは難しいのである。では今は？ と訊かれると、随分偉くなったから自分の都合に部下がスケジュールを合わせるようになったので問題はクリアされたと言っただけ言っておこう。副隊長に「上司に振り回される部下の身にもなってくださいよ」と言われそうだが、誰もが通る道である。そのときは諦めるとしか私は言わないだろう。

自己紹介は続き、中には長々と自慢話をする人や、端的に一言だけ語る人もいた。皆さんなかなか個性があつてよろしいんじゃないだろうか。

それから残りの日程は、各教科担当の教師と自己紹介大会が続行されて、今日1日の授業内容が自己紹介だけで済まされそうな悲惨な結果になった。流石に完全に自己紹介だけで終わるわけもなく、これからの授業の進め方なんかを話されたが、それを聞いていったいどうしろというのだろうか。

そのままデジャブを感じられる授業が続きながらも4時間目の終了を告げるチャイムが鳴り響く。

今日は5時間目まであるので、昼食は学校で食べることになる。

「優美は弁当派なのか？」

学校に来る途中に買ったサンドイッチと、カフェオレをアイテム欄から取り出して優美の机に並べた。アイテム欄に入れておくと保存が利くから便利だ。今出したばかりのカフェオレは、買ったときと変わらずしっかりと冷えている。

「うん。そうだよ。コックの人が毎朝作ってくれるの」

そう言ってアイテム欄から弁当を取り出す。作られたときと変わらない暖かさを保ち、食器に乘せられた料理が机に並べられた。

豪華さを除けば、これが現代の弁当形式だ。冷めないようにアイテム欄に保存しておき、食べるときは出来立てと変わらない美味しさを堪能できる。

「ねえ……。それってサンドイッチ？」

「なにを言ってる？ 何処からどう見てもサンドイッチじゃないか」「具は？」

「こつちが焼き鳥のナンコツ。こつちはチョココロネだが」

今朝買ってきたサンドイッチを再び見るがおかしい点など見受けられない。

「それサンドイッチにする意味ないよね！？ そもそもチョココロネって、パンにパン挟んでるよ！？ どうしてそんなにサンドイッチが食べたいの?!」

「いや、たまたま買ったただけだぞ。それにこれはこれで美味しいのだが……」

むしろむしろと焼き鳥の方から食べ始める。串は危険なので先に抜いておいた。

パンとナンコツの独特の歯ごたえと、そこに介入してくる炭火焼にされた鶏肉の味が融合して芸術のようになってる。

「よっ。一緒のクラスになったな」

「どうも。僕たちも一緒にさせてもらってよろしいでしょうか？」

洸哉と健介が教室内の人数が減ったのを見計らってやってきた。減った数に含まれる人たちはきっと食堂に行ったのだろう。私も今度行ってみようかな。

2人は持ち主の去った椅子と机を優美の机にくっつけて昼食を取り出し始める。洸哉がコンビ二弁当。健介が普通の手作り弁当だ。

「2人からもなにか言ってあげてよ。羽衣ちゃんのサンドイッチおかしいよね!？」

必死な様子に2人はサンドイッチを凝視するが、特に変わったころはないはずだ。

「それはサンドイッチなのか……？」

「理解できる範疇を超えたいて、僕の口からはなんとも言えませんか……」

「失敬な。これはこれで美味しいのだぞ。ほら」

途中まで食べていた焼き鳥ナンコツサンドを洸哉に差し出す。

食べればわかってもらえるはずだ、このサンドイッチの美味しさを。人は外見によらないのと同じで、こいつも外見だけだ判断しちやいけないんだ。

「いや。いいって！」

「いいから喰え」

たじろぐ口に突きの如く焼き鳥ナンコツサンドが全て押し込まれる。

洸哉は目を白黒させながらも、しかたなく口に侵入したサンドイッチを食べてくれた。

「どうだ？ 美味かったろ？」

「あ、ああ……」

「どうだ。これでこのサンドイッチの美味しさは証明されたことになるぞ」

「羽衣ちゃん。わざとやってる？」

「なにがだ？」

「うつん。なんでもないよ」

洸哉がどこか遠くを見ているような瞳になっていた。だけど優美まで遠い目をするのは何故だろう。わからないので考えることを諦めた。

手に付いている焼き鳥ナンコツサンドのカスを、舌を少し出して舐め取った。

洸哉を揺さぶって「帰って来るんだ。洸哉？ 洸哉！！」と健介が叫んでいるのはいったいどんな状況なのだろうか。

続いてチヨココロネサンドを食べ始める。

「そうだ。今度の土曜は暇でしょうか？」

健介は洸哉を揺するのを止めて、弁当を広げ始めた。

「わたしは……暇だけど？」

「それなら私も暇だ」

本当は休日のノルマは厳しいのだが、なんとかしてみよう。なに。ドラゴンをソロ狩りでもすれば空けられなくもない。

「じゃあ街に行きませんか？ そのあとちよっフィールドでクエストとかもしようかと思ってたんですけど」

「うん。いいよ」

「わかった」

「よかった。僕たちまだクエストとかはあんまり知らなくて」

「友人として手を貸す。そう言っただろ？」

ウルフと戦ってたときに交わした言葉だ。

「そう、でしたね」

「そうだ。美味しいカフェがあるんだ。そこにも寄らないか？」

「え？！ そういうサンドイッチが出てくるの？」

たじろぐ優美。そこまで変なのか、このサンドイッチは。

味は良いんだけどな。パンの二重構造とか、なかなか美味しいんだけど。

「違う違う。ほら、駅の近くに大きなビルがあるだろ？ あそこの最上階の……、名前はなんて言っただかな？ なかなか有名なところで、デザートが美味しいと評判の、えーっと」

「あそこかあ。私も結構好きだよ、あのお店。名前は忘れちゃったけど」

「2人がオススメするお店なら行くしかありませんね。洸哉もそれでいいですか？」

「うえっ？！ あ、いいいぜ」

「今、いが多くなかったか？」

「気にしないであげてください」

「そうか。まあいいか」

それから昼休みが終わるまで、週末の予定の話題で少々盛り上がった。

ついでに武器とか防具も買うことになり、そのときは優美ちゃんのとこの崎宮グループの方で買うことになった。もちろん2人には崎宮のご令嬢だというの伏せながら話した。

優美ちゃんは小柄な体系の通り、少食だったため私が食べ終わって少し経ったくらいに食べ終わり、それからはずっと私の手の内にあった。こう表現するとまるで私が優美ちゃんを策にでもはめたかのように聞こえるから不思議である。文字通り、手の、腕に包まれていただけなのけどね。

昼休みが終わる前に土曜のスケジュールを空けると、副隊長の方にメッセージを送っておいた。

彼の辛勞に歪む表情が眼に浮かぶようだった。

9話 サンドイッチ（後書き）

ちよつと推敲してたら投稿が遅くなりました

今回の内容、どうしてこうなったのか不思議でしょうがありません
きっと作者が寝不足のため思考能力が低下していたせいでしょう

10話 ショッピング

土曜日。それまでにレベルのノルマは間に合った。

だが前日になってなにを着ていくか決まっていなかったのを思い出した。普段着、全部ステータス重視だったからファッション性皆無なんだよね、私……。

あれやこれやとタンスのアイテム欄から、服を取り出しては仕舞ってを繰り返すものの、一向に決まる気配すらなかった。うん。だって良さそうなのがないんだもの。

結局はTシャツに黒いパーカー羽織って、下はジーンズになった。まあ、悪くはないだろう。良くもないけど。世間ではそれは普通という。でも髪の色が異色なため、没個性にはなれそうもない。むしろエイリアンが一般的服装をしているくらい目立つんじゃないだろうか。もしくは宇宙で人間が宇宙服着てないくらいに。どっちにする悪い意味でしか目立ちそうもない。

「おはよ。羽衣ちゃん」

約束の午前10時から10分前。駅のベンチに腰かけていると後から優美がやってきた。

水色のワンピースがとても似合っていて、可愛らしかった。彼女ならなにを着せても可愛く見えるだろうから今度着せ替え人形みたいに遊んでみたいと切実に願った。

がしつと、掴んでいつもの位置に優美を動かす。もうこれが日課となっていた。

「おはよう。今日は晴れてて日差しが気持ち良いな」

「そうだね」

すでにツツコミを入れるのも面倒になったのか、抱きしめることに關しては何も言ってこなくなっている。

「こうしていると妹が出来たみたいで楽しいな。いや、嬉しいという言葉が適切か」

「随分過保護なお姉ちゃんだね」

「あはははは。妹の癖に生意気な口を言うやつめ。ういっい」
ほっぺたを触ってみた。今日も最高の肌触りだ。

「ところで羽衣ちゃんって一人っ子なの？」

「ああ、そうだ。優美もか？」

母がもう他界しているからなんだけど、それは言わないでおいた。優美については大体家のことを知っているので訊かなくてもわかるのだけど、社交辞令というやつだ。

「そだよ。一人っ子だと色々大変なんだよ。ほら、家のこととか」
直接は言葉にしなかったが、家とは崎宮グループのことだろう。

確かに最近は売れ行きも右肩下がりになり始めたらしいし、大変なんだろうな。

少し辛そうな顔をしてたのでぎゅっと抱きしめてみる。

「困ったときは助けに行く。どんなときでも、絶対に」

このまえ読んだ漫画に影響されたのかもしれない。臭い台詞を言ってしまった。でも嘘はないから別にいいか。実際問題、きっと国が相手でも私は喧嘩を売るだろう。そしてその喧嘩に真っ向から勝って見せるだろう。それだけのコネクションも実力も持ち合わせているつもりだった。本気を出せば崎宮グループの会長にだって劣らない自信がある。――無駄な自身だよな。

ころっと、優美は笑顔に戻った。強いなと感じた。

「お姉さんを信じてみる」

「うん。ありがと、羽衣ちゃん」

お礼を言われる覚えはないのだが、妙に照れくさくて、金色の髪がいつにもなく、くすぐったかった。離さないように、そっと、でもしっかりと抱きしめた。

洸哉と健介が来たのはそれから5分後だ。簡単な服装だったが、制服よりは防御力は高そうだった。武器は流石に持ち歩いておらず、プレイヤーカードのアイテム欄に納められていることだろう。

「悪い。待たせたか？」

「すみません。お待たせしてしまつて」

「今来たところ、という台詞は本来なら男子が言つべきものではないのか？」

「そ、そうだな……」

「まあいいか。それで、まずは武器防具を買いに行くか？」

「おう！」

やっぱり男の子は元気が良いかと、軽快な返事に優美と2人で少々笑つた。

洸哉はいつたいなんで笑われているのかわからないといった困惑の表情を浮べていたが、気にするところではないだろう。

Now loading...

「装備品とか売つてる店つていくらあるけどどう違うんだ？」

洸哉が初心者なら誰もが気にするようなまともな質問をしてきた。きっと健介が尋ねてくるだろうなと踏んでいたのだが、これは予想外だった。

答えはすでに用意しておいたのだけど、咄嗟には言葉に出来なかった。

だけど数秒すれば驚きも去り、言葉をもう一度考える。

「武器防具を取り扱っている店は大きく分ければなん種類あるかわかるか？」

「えつと、NPC社とあとは……」

「崎宮グループの『崎宮装備品店』と『ヘーパイストス鍛冶錬金店』

。あとは個人営業のかな？」

「正解」

言葉を詰まらせたところに優美が雄弁に名前を挙げていった。

流石は崎宮の御令嬢。私ではなく優美に説明させた方がいいかもしれないと考えた。だけど浅く教えるなら私でも事足りるだろうし説明を続ける。

「NPC社の装備品ショップは一定の価格、一定の商品、一定の品質の品物を取り扱っている。他と比べれば少々売値は高め、買値は低めだが、これは他の店がNPC社に負けないようにその値段をとっているからにすぎない。あまりオススメはしないな」

「そうだったのか。知らなかったぜ」

あまりここは需要がない。需要を上げようとする努力をしていないのが原因なんだろうけど、供給量が無限で利益を必要としないからそれでも良いのかもしれない。

「崎宮装備品店はドロップアイテムを専門に取り扱う店だ。品質に差が大きいが、値段も安いし定番だろうな」

「これから行くのがそこですよね？」

「そうだ」

優美の父が会長を務める崎宮グループのショップ。正式名称は『崎宮装備品店』。プレイヤーを雇って、モンスターからのドロップアイテムの売買をしている。稀にレアな物も流通するため、高レベルプレイヤーも出入りする。あまりにメジャーなため、武器屋とか防具屋と言えば最初に思いつくのはここだろう。

「で、ヘーパーなんかは？」

「ヘーパーストス鍛冶錬金店な。社長が『ヘーパーストス』っていう高位の鍛冶師系のクラスを持つてるからその名前なのだよ。品質は最高だが値段が高い。なかなか行く機会に恵まれないだろうから気にしないでいいぞ」

鍛冶師や錬金術師のクラスを集めた『ヘーパーストス鍛冶錬金店』。オーダーメイドの作品を仕上げてくれるのが最大の魅力で、高レベルのプレイヤーならば大抵はここを愛用する。

でも高い。高校生で行く者などあまりいるはずもないくらいにだ。「残りは全部個人営業。ほとんどが趣味の延長線上でやっているよ。うな店であてにならないけど、ごく一部凄い店もあるそうだ。これも気にしないでいいぞ」

私行きつけの店はごく一部に分類される個人営業の店だ。個人営

業なのになぜか化物染みた物品を取り扱っている。路地裏にひっそり建っていて、店主が異様な高レベル鍛冶師。魔剣や聖剣を日々世に送り出しているのに何故か有名ではない、謎の店。あれは今でも不思議でしようがない。

「ほら、さっさと行くぞ」

さて、今日行くの当然ながら崎宮装備品店だ。優美もいることだし他の店に行つては失礼だろう。それにこの2人も予算がそこまで多いはずもない。どっちにしろそこ以外に選択しはなかった。

Now loading...

街の商店街の一角には装備品類を売る店がいがみ合うかのように一堂に会している場所がある。そこにある崎宮装備品店の店内に入つていった。街中ということで、店はデパート並に大きい。自動ドアが開き、入店音が響く。カウンターに立つ女性から「いらつしやいませ」と声をかけられた。

棚に並ぶアイテムの数々。これでもすべてではない。アイテム化して収納している在庫もあるだろう。全部に目を通していたら、時間は日が暮れてもまだ足りないくらいかかる。

「うわっ！ 凄いやだな」

「そうですね。まさかこんなに多いとは……。ひとつひとつ見ていたら限がないですね」

「どっちから見て周る？ 洸哉の剣か？ 健介の杖か？」

「じゃあ、僕は後で良いですよ」

そんなわけで洸哉の使う剣から決めることにした。エスカレーターで2階の武器売り場に移動する。1階はアイテム売り場。3階は防具売り場。4階は装飾品売り場。5階はレアアイテム売り場となっている。

ずらりと飾られている武器たちの中で、剣が並ぶ場所に案内する。春なので買い替えや、初心者用のセールなんかもしていた。

それでも若干値が高い。最近なにか価格を変動させる出来事でもあっただろうか。そういえばこの前大規模なフィールド探索に向かわせて大赤字になったとかいう内容をニュースで見たかもしれないほど。どうりで高いわけだ。

「バスターソード類でいいか？ 別にまだ癖も付いてないだろうか
ら他のに変えてもいいぞ」

「じゃあ凄く長い剣が欲しいな」

「ほう。理由は？」

「カッコ良さそうだから」

「おまえにはバスターソードで充分だな」

「ええ！？」

こいつに訊いた私が馬鹿だった。それにバスターソードは充分長い剣だ。変える必要もないだろう。アビリティーやレベルを考えてなるべく扱いやすいものを選んで渡す。

攻撃力は若干低めだが、重量からすれば妥当なものだろう。それにドロップアイテムは品質が悪い。若干性能が悪い程度が普通だ。

「なかなか良いけど攻撃力低くないか？」

「だいたいどれもそんなものだよ。それに最初のうちは性能より扱いやすさを重視するべきだぞ。扱いきれない得物など、鈍刀と変わなまくらがたなりはないからな」

「へえ……」

何度か試しに振ってみて、なかなか手に馴染んだようだ。値段も手頃だしこれに決まりか。

「優美のも選ぶか？」

「あ、大丈夫。手頃なのがあるから」

まあそうだろうとは思っていた。金に糸目をつけずに手に入る立場があるしな。

アイテム欄を可視モードにして、自分の武器と防具を見せてくれた。装備条件がなく、だが性能は高い装備が揃っている。優美の方はこれで良いだろう。

「じゃあ次は健介のか」

杖のコーナーに移動する。洸哉は剣を手に持ったままだ。

店に置いてあるのは、買うまでアイテム欄に入れられないように防犯ロックがかかっている。沢山買うようなら、店員を呼んで運んでもらうのが妥当だが、今日は自分のだけしか買わないので問題ない。

「杖は比較的に選びやすい武器だしすぐ終わるか。とにかく性能重視で見ている問題は無いぞ。補助効果も照らし合わせて考えると少々悩むが、レベルが小さいうちは装備条件を満たせないから性能だけしか考える要素がないしな」

「そうなんですか。なるほど、勉強になります」

さっそく該当するものがあつたので渡してみる。

「これとかはどうだ？」

「はい。少々重いですけど直接これで叩くわけでもないですしね」

「それもそうだ」

それを持って続いて3階へ。

防具はどうしようか。重装備にすると動きにくいし、軽装備にすれば防御力が落ちる。レベルも低いし動きを制限されるような物は極力控えるべきだろう。ならば軽装備となる。

3階は防具売り場というよりも、衣類売り場に近い。

「もつと金属板みたいな防具が置いてあるのを想像してたんだけどな」

「最近は攻撃を受けるのではなく、避けるのが定石だからだろう」

「ということは昔は違っていたんですか？」

「確か数年前は違っていたな」

「へえ。詳しいんですね」

ここで少し失敗したと感じた。

なんで私が数年前の戦い方の定石を知っているんだと、不自然に思われたかもしれない。たしかにそうだ。中学生からフィールドに行っていたとしても、つじつまが合わない。

「なにかの本で偶然そういう話を見かけたんだ」

弁解のようだったが、仕方がない。その通りなのだから。

「そうですか」

「ともかく軽装備の防御力重視。装備条件はレベルに左右されやすいから特に悩むところはないだろう。あまり口出しすることもないし好きなのを自由に選んで良いぞ。あ、でもなるべく動きやすいのにしろよ」

「わかってるって」

「わかりました」

さっそく防具を探しに衣類の山に突撃していった。

なんだか不安も残ったが放っておくこと数十分で、無難な物を持つてきた。

それも持つて4階、装飾品売り場に向かう。

装飾品。アクセサリとも言うが、これが一番悩む。物によって上昇するステータスが異なるし、装備できるのが1つまでだからだ。洗戔なら攻撃力が防御力、敏捷力を上げる物であれば良いが、どれにするか迷う。

健介は魔功力にするのもいいが、低レベル向けのMP回復量上昇とかもあつた気がする。

優美はすでにあるから良いとして、どうしたものだろうか。本人の意見を尊重してやりたくもあるが、それが正しいとは一概に言えない。これは身を守るための重要な物だからだ。

色々と見て周るが、一向に「これだ!」という物が見つからない。もうこうなつたらオーソドックスに威力重視にするべきか。

「今日のところはこれにしておこうか」

両方ともブレスレッド型。洗戔に渡したのは紅い宝石のような物が埋まっている攻撃力強化用。健介に渡したのは紫の宝石のような物が埋まった魔功力強化用。

それを手に持った荷物の上に乗せて、レジに持っていく。

金額はそれほどではなかったが、彼らにしてみれば大きな出費だ

ったようだ。

「ありがとうございました。またのご来店をお待ちしております」
と言う声を背中に受けながら店を出る。手を塞いでいた物品はすでにアイテム化してプレイヤーカードに収まっていた。

「なんか俺もプレイヤーらしくなってきたよな」

「調子に乗つてるとまた追いかけてこする羽目になるぞ」

「うえっ。それはもう勘弁してほしいな」

ウルフに追われたのがトラウマになっていているらしい。この分ならもうあんなことにはならないだろうと安心した。

「随分時間がかっちゃったね。そろそろお昼にする？」

「そうだな」

時計もそろそろ正午になる。

この後はフィールドに行くから、その前に食事を取ることになる。
いつもの店に行こうとして、値段について思い出した。

「なあ優美。あの店、結構高かったんじゃないか？」

「……………あ」

それもそうだ。ただですら立地条件が良く、しかもNPCの店ではない。優美も行きつけだというのに、それがただの安い店のはずがなかった。

私も優美も、財布の中身は無尽蔵に近い量がある。でも、この2人は？

今買った装備品よりは高いだろうなあ。うん、無茶だ。

「駅まで戻るのも面倒だ。その辺で食べないか？」

「別に良いですけど、行きたいお店があつたんじゃないですか？」

痛いところを突いてくるな。

「いや。そこまで行きたいというわけでもない。気にしないでくれていい」

「そうですか。それなら僕は構いませんが、優美はいいのですか？」

「うん。早くフィールドにも行きたいし」

「わかりました」

健介が折れてくれて、本当に良かった……。
その辺にNPC社のファミレスがあったのでそこに足を運んだ。

11話 ファミレス

禁煙席に案内してもらって、奥の席に腰かける4人組。

傍から見たら、いったいどんな集団に見えるんだろう、私たち。

同じ部活に所属している集団には見えないだろう。実際はただの友達集団なんだけどね。

全員注文する物が決まったのでボタンを押して定員を呼び出す。呼び出すって言うとなんか召喚魔法を最初に思い出す辺り、職業病な気もする。

やってきた定員に、メニュー表を開いてたまたま目に止まったカルボナーラと、食後のデザートにハイパーチョコレートパフェも注文した。なにがハイパーなのか気になったというのもあったが、純粹にパフェが好きだから頼んだ。

優美はパンケーキ、苺パフェを注文。子供っぽいメニューで優美らしかった。洸哉はハンバーグ定食。健介は鍋焼きうどんを注文。こっちもらしいといえはらしかった。

それから全員ドリンクバーを頼んで、店員が復唱する。

それぞれドリンクバーで飲み物を揃えて、やっと落ち着く。

「それじゃあ今のうちにクエストを決めようか」

プレイヤーカードの画面を可視化して、テーブルの上に広げる。手早く操作してNPC社のサイト、そのクエストのページを開いた。ずらりとクエストが箇条書きに並んでいる。凝視すると目がちかちかしそうだ。

「随分ありますね」

「この中で受けられそうなのを検索していく」

呟きながら操作して、推奨レベルの低いクエストを並べた。

「まだ多いですね」

「こっというのは報酬で絞っていくんだ。なにがいい？」

「なについて言われても、俺らどんなのがあるのかしらないんだけど」

「ああ、そうだったな。すまん。すっかり忘れてた」

画面を候補検索のページに変える。

キーワードのようなものがいくつか並び、幾分か見やすくなった。
「武器、防具、装飾品、クラス、アイテム、経験値、金……。まあ大体わかったけど、どれが良いんだ？」

「オススメはクラスか経験値だな」

クラスとは、クエストクリア後に自分のクラスを変更出来るという特典だ。クエストを受けてクラスを変更するのが普通で、私のもそれで手に入れた。最初は簡単なものから順を追って強力なものにしていく。クエストの受注条件もあり、そうしないといけないのだ。ただしこれは全員がクラスチェンジ出来るのではない。条件を満たした1名だけが変更可能なのだ。だから仲間割れとかが起こりやすいので受けるときは1人でやるようなが多い。

「クラスでいいんじゃないか？」

「だが、報酬を受けられるのは1人だけだぞ」

「えっ？ そうなの。じゃあ駄目だな。——皆、経験値でいいよな？」

「はい」

「いいですよ」

満員一致。それなら簡単かつ高報酬のを見つけてあげるか。

検索内容を次々に入力して、候補を絞る。ちょうど同じフィールドに被っているものがあるので、そういうのがいいだろう。

3つほどリストアップして画面に移した。

「この3つでいいか？」

「あれ？ 重複してクエストを受けることも出来るのか？」

「出来るが、それがどうした？」

「だったら同じクエストを4つ受ければクラスでも公平だなんて思っ
つてさ」

「その通りだ。だがボス級モンスター4体と同時に戦うことになる
がいいのか？」

クラスチェンジのクエストはボス級モンスターの撃破が条件になっていることが多い。そのボス級モンスターに止めを刺した者が報酬を受け取れる。クエストを受けて、特定の場所に行けば出現するのだが、そのとき同時に4体と戦うのは難しいだろう。私の分を抜いて3体でも、彼らが苦戦することに变りはない。

「だったら経験値クエストと併用して受ければいいんじゃないですか？ そうすればなにも得られない人は出ませんですし」

「わたしは構わないが、いいのか？」

「俺は……、少し不公平だと思うけどな」

意外と洩哉は公平さを大切にするようだ。なかなか良いリーダーに成れる資質はあるが、上に登りつめるには欲が足りない。

それに比べて健介は充分上に登りつめる資質がある。欲がある。悪く聞こえるようだが、これはかなり大切な要素だ。それがなければ伸し上るのは無理だろう。

そういう私も欲はあるほうだ。そうでなければこんなレベルまで上がるうとはしない。

「わたしは羽衣ちゃんに任せるよ」

ちよつと人任せすぎじゃないだろうか。

信頼されているのかもしれないが、この場面で期待されるのは酷じゃないか？

「ボス級モンスターとの戦い方を学ぶ良いチャンスだし、いいんじゃないか」

「羽衣がそう言うなら従うしかないよな」

何故か私が全て決めたようになっていただけ。まあいいか。グラスの中のオレンジジュースをストローで吸い上げて喉を潤した。優美の注文したパンケーキが運ばれて来た。テーブルに置かれた食器は画面をぶちぬいているが気にしない。画面といっても擬似的にそこに映し出しているホログラム映像のようなもので、本体は私のポケットの中にあるプレイヤーカードなわけだし。

「いただきます」と手を合わせて礼儀正しく食事の挨拶をする。最

近ずる人少ないから関心関心。私もしないときが多い部類だしね。
ナイフで切って、切れ端にフォークを指して口に運ぶ。美味しかったように頬が自然と緩んでいた。

でもそれ、天然のものが一切入ってないんだよね。

世界の職業自給率、何パーセントまで落ちたっけかな。今やNPC社が売る食材が大部分を占めてて、人はそれに依存する形になっている。味も値段も良いからね。

天然でも人口でもない食材に不快感を感じる人っているのかな。どうなんだろ。私は普通に食べてるからわかんないけど。

「報酬のクラスはなにがいい？」

「個人的には剣士系の今より上のクラスがいいんだけど、それだと俺だけ得することになっちまうよな」

「わたしは別に剣士系でもいいですよ。どっちかっていうと剣士に近い冒険者ですし」

優美はクラスが冒険者なのにやたらと戦闘メインのスキルばかり覚えていたな。これだと剣士系にクラスチェンジしてもたいして変わらないだろう。

「僕もいいですよ。特に問題ありません」

「ええ！？ いや、悪いって。それは」

「まあいいんじゃないか。優美は損するわけでもないし。私もクラスチェンジする気もないし。残る健介はこう言ってくれてることだしな」

「そ、そうか？ ならそれで頼む」

要望どおり、剣士系のクラスを報酬とする簡単なクエストを探し始めた。とはいえ簡単なクエストにクラス報酬があるものは少ない。いくつか見えているうちに、手頃なのを発見できた。

「剣術士っていうのがあるな。これでいいか？」

「それって剣士とどう違うの？」

「平たくいえば剣士より技術面に優れているだけだ。スキルも覚えやすくなるはずだ」

「それでいいかな。洸哉も剣術師でいい？」

「おう。それでいいぜ」

クエストを受注して、画面を閉じた。

さっきまでずっと占領していたものが急になくなったことで、少しテーブルが広く感じた。

そこにタイミングよく他の食事が運ばれてくる。

フォークを使ってクルクル麺を巻きつけた。巻きすぎてフォークの先端が大きな塊のようになっていて。失敗したかもしれない。けどそのまま大きく口を開けて頬張った。頬がリスみたいになっている。気にせずもう一度まきまき。今度も巻きすぎた。おかしいな。なかなか上手くいかない。

「ん？ どうした」

洸哉がこつちを見ていたので頬になにか付いているのかな。

「いや。なんでもない！」

視線を逸らされた。やっぱりなにか付いているのかもしれない。念のため紙ナプキンで拭き取ろうとしてみたが、本当になにも付いていなかった。

じゃあどうしたのだろう？ まあいいか。

カルボナーラがちょっとこつてりしてたので、口内をオレンジジュースで中和する。失敗して酸性のなにかになった。これはこれで美味。

「そっぴや羽衣ってゲームとかすんの？」

「あんまりしないかな」

コンピュータゲームをする人は高校生になると一気に減る。現実がゲームな感じだしね。私はそういう世界が日常にミックスされてるというか、そっちがメインになってるからゲームをする機会は少ない。むしろやったことがない。

「優美は？」

「わたしもしない方かな」

「ふうん。女子ってあんまりゲームとかしないのか」

そういうわけでもないと思う。一概には言えないけど。

優美はする暇があんまりなかったんだろうな。お嬢さまなわけだし。

「洸哉と健介は結構やる方なの？」

「まあ、健介のところでたまにな。でも最近はあるまりしてない。わざわざゲームでする意味がないもんな」

「そうですね。僕も最近はしなくなりました」

「指先のボタンひとつで剣を振る世界より、実際に本物の剣を握って振ってた方が楽しいもんな。それにお金も手に入るし。それにレベル上がると羨ましがられるじゃん」

「そっぴや、女子でレベル10になった子いたよね」

ウルフをソロで狩っていた子だ。昨日ちらつとそういう話を耳にした。あの日の授業では5だった。あの後もレベルを上げて、水曜日、木曜日モレベル上げに勤しんでいたらしい。努力の甲斐あつて金曜日の朝には2桁に到達していた。

最初のうちはレベルが上がりやすいとはいえ、結構早いペースだ。あんまり無茶して怪我を負わないだろうかと少々心配である。

「はははは。僕はまだ7です」

健介はレベルが4だったから3日で1づつ上げて7か。まあ安定している。それでも高校生なら早いほうかもしれない。

「わたしは全然やってないから4だよ」

優美は忙しいだろうしな。でも装備からしたらレベル15くらいのステータスがある。技術的にもなかなか良かったし充分強いだろう。

「洸哉は？」

「21だけど」

「はあ?!」

見栄を張って言ってるんじゃないかといぶかしんで、マナー違反だがスキルを使ってパラメーターを覗いてみた。本当に21ある。

馬鹿なんじゃないか? まともなやり方だったら短期間でここま

で上がらない。高レベルの人とパーティーを組んで、経験値のおこぼれを貰っていけば短期間でここまで上げるのは難しくない。もしそうじゃなければ、自分のレベルを超える危険な、それこそ下手すれば死ぬようなフィールドで狩りをするしかない。

「アイテム使ってオーバーリカバリーやってればそんなに驚くほどでもないだろ。ソロなら経験値の効率もいいしな」

「ソロだと？ おまえは馬鹿か！ 下手すれば死ぬかもしれないんだぞ！！」

「まあ落ち着けて。そんなに危ないところでは狩ってないからさ」
「嘘を吐くな！ 安全な場所で狩ってもそこまで上がるはずがないだろ」

馬鹿だ馬鹿だと思っただけはいたが、ここまでの馬鹿だったとは。まともな神経の持ち主だったらそこまで無茶してレベルを上げようとは思えないぞ。

洸哉がやったのはそれほどの無茶だったのだ。むしろ生きているのが幸運だといえるほどに。

「まあ、落ち着いてください。洸哉も洸哉なりの事情があったんですよ」

「まったく……。こんな無茶は今後一切するんじゃないぞ」
「わかってるって」

食べるスピードを早めて、カルボナーラを胃袋に収納する。

「そんなにレベルがあるならもう少しクエストも難易度を上げていいな」

空中で指を動かして画面を次々に切り替えていく。

1分くらいでクエストの受け直しを済ませた。クラス報酬はそのまま。フィールドの推奨レベルが若干上昇した。健介は辛いだろが、後方で魔法を撃つだけだから危険はないだろう。

「武器とかも買い直さないといけないじゃないか」

「いいってそんな」

「駄目だ。すまないが少しここで待っていてくれ。すぐに戻る」

「でも羽衣ちゃんパフェ頼んでなかった？」

「……………そうだった」

不覚だ。パフェを忘れてた。

あのチョコレートソースとアイスの奏でる絶妙のハーモニーを諦めて洩哉の装備品を買いに行くなんて私には到底出来ない。どうすればいい。私に残されている手段なんてほんの僅かしかない。

くそつ。パフェの前ではわたしは無力なのか？

いや、方法ならある！

「通販を使おう」

「あ、その手があつたな」

崎宮グループのサイトに移動して適当に装備を見繕った。

通販の場合、若干質が落ちるのが難点だが、今はそんなことを考えている余裕などなかった。

少し重めの武器でも、アビリティーの筋力の数値が随分増えていたから楽に使いこなせるだろう。攻撃力も高めだ。防具はあまり必要ないから今日のところはこれでいいか。

決定ボタンを押すと、自動で金が振り込まれてアイテム欄に注文した商品が届く。

「ありがたく受け取るといい」

「あ、じゃあ金…………」

「気にするな、餞別だ。これから無茶しないのなら受け取れ」

「それじゃ、ありがたく貰つとく」

アイテム欄内で買い寄せた剣を受け渡していると、「デザートお持ちしました」と店員が言いながらパフェをテーブルに並べた。

「でかつ！」

私以外、全員が驚いた。

現れたのは50センチほどの巨大なパフェの塔。アイスやフレーク、クッキー、ケーキなど様々なトッピングがなされ、禍々しいまでの存在感を放っている。

どうりで他より値段が高いはずだ。

「これを食べるのか?!」

「なに当たり前のことを言っている?」

「1人で食べ……ないよな?」

「食べるぞ。それともなにか? 少し欲しいのか?」

「遠慮します」

急に背筋を正して丁寧な言葉を使い始めた。なにがしたかったのだろうか。

まずはアイスから。スプーンでぱくつき、甘味を堪能した。

10分後、ハイパーチョコレートパフェは残さずに私の胃袋に納まった。

11話 ファミレス（後書き）

そろそろ更新が辛くなってきました

次話はフィールドでクエストに取り組む予定なのですが、
どうにもネタに行き詰まっています

すみませんが次の投稿が遅くなると思います

12話 クエスト

受注したクエストは3つ。

クエスト名は面倒なので省くが、内容を要約すると『骨を10個入手』と、『レベル10以上のスケルトン30体討伐』と、『コカロの森に出現するボス級モンスター、スカルナイトの撃破』。

全てコカロの森で出現するので必然的にそこに行くことになる。

駅の改札を抜ける前に、全員フィールド用の装備に身を包みパーティー登録を済ませた。

「なんかわくわくするよね」

「そうだな。でもはしゃぎ過ぎるなよ。今日のはちよつと難易度高めだからな」

「はい」

子供のように純粹に返事をする。

その声を脳内でリピート再生しながら改札でフィールド名を選択して先に進んだ。

足を進めて、ゲートを通ると世界が一瞬にして変化する。

さっきまでいたコンクリートの人工的な建築物内とは打って変わって、今立っている場所は天然ものの木々が立ち上る森林の中だった。

背の高い樹木たちが風景を覆いつくし、遙か頭上に生い茂る葉は森が太陽を拒むかのように日の光を地面に届けさせようとはしない。そのため夕闇に支配されたかのように森の中は薄暗かった。所々に太い根が顔を覗かせて落差のある道を作っていることも相まって、進むだけでもかなり体力を消耗するのは目に見えていた。

空気が妙に湿気を帯びていて、吸い込むだけで息苦しさを感じさせる。

「なんか嫌な雰囲気のところだな」

顔をしかめて辺りを観察しだす。

洸屋は気配を探りつつ、剣の柄に手を添えて、不意打ちに備えていた。

「そりや骸骨のモンスターが出てくるのに明るい雰囲気場所だと違和感あるだろ」

「ええっ！？ 骸骨のモンスターが出てくるの！？」

「言ってなかったか？ クエスト目標は全部スケルトン系のモンスターが関係してるから嫌でも戦うことになるぞ。それにここはスケルトン系以外出てこないしな」

マップを確認しつつ、先導して険しい道を歩き出した。

上下落差のために、よじ登ったり飛び降りたりすることも多々あった。優美が苦戦するかと思いきや、装備品の補助効果ですいすいと進む。洸哉もレベルが高いのでなんなく進む。一番苦労していたのは健介だった。

それでも「大丈夫です」の一点張り。予想よりは速いペースで森を進んでいった。

少し進むとだいぶ道が開けてくる。険しいのは最初の方だけだった。

「来るぞ」

モンスターの気配がしたので伝えようか迷ってたが、教えないことにした。だが、ある程度接近すると洸哉がそれに気がつき、臨戦態勢をとる。

尋常じゃないほどの成長っぷりだった。

木々を合間を縫って現れたのは人骨が直立た姿のモンスター。手にはサーベルを握っている。筋肉もないのにどうやって動いているのだとか、脳もないのにどうやって思考しているのだとか、そういった考えは無駄だ。あれはそういった風に作られた存在であって、実物の人骨が意志を持って動いているのではないのだから。

木の陰から次から次へと溢れ出し、数が2桁あたりになってようやく現れるのは途絶えた。

「多過ぎませんか！？」

「平気だろ。スケルトン系はHPが少ないし。でも攻撃力は高かったな。まあ経験値稼ぎにももってこいの種族だ。ダメージは危険ではあるが、ちゃんと回復してやるから安心しておくといい」

HPを無尽蔵に回復できる私がいればどうとでもなる相手だった。洸哉が先陣を切って飛び込んだ。

「アサルト」

アクティブスキルを発動させて5メートルの距離を一気に詰める。これは直線状に一定距離を一定時間で移動するスキルで、レベルが上がるにつれて使わなくなるが、現段階の洸哉には優秀なスキルとなっている。

先頭に立つ骸骨に刃を叩きつけて、そこから何度か攻撃を繰り返してHPを大幅に減らした。

「ファイヤーボール」

続く健介の魔法。集団に乱射して徐々にHPを減らしていく。

優美もタイミングを見計らって突撃していく。

例の如く取り残される私。ちょっと寂しかった。

私と同じように集団から取り残されているスケルトンがいた。ぽつんと集団の端で戦況を見守る姿は、仲間に入れてもらえない、いじめられっ子みたいだった。

注視する私に気がついて、テクテクと歩きこっちにやってくる。

その姿は哀愁漂う——どころかムカついた。まるで私を同類呼ばわりしている気がしたのだ。だからそれを一瞥した後、足蹴りしてやった。

放物線など描かずに、ほぼ直線状に飛んでいく。別の個体に衝突し、互いのHPを消滅させて無残に光の粒子に還元されていく。

やり過ぎた。でも後悔はしていない。

「チャージスラッシュ」

洸哉の剣が僅かに輝き、多めにHPを引き裂く。

剣による単発、威力上昇攻撃のアクティブスキルだ。私は、一定パターンのため先が読まれやすいと考えてる。だからアクティブス

キルには入れていないのだが、剣士系ならば持つべきものだろう。

「セカンドリー」

剣技には使用後に硬直時間が生まれる。だが、今使ったスキルはその間に追加発動してさらなる一撃を放つものだった。

スケルトンはHPを丁度失い、霧散していく。

その場で休むことなく、洸哉は次の目標に狙いを定めて剣を振り続ける。だが、3匹に囲まれてHPをどんどん削られていく。

「馬鹿！ 先行し過ぎだ。落ち着いて戦え」

走り、1匹と対峙する。再度振り下ろされたサーベルをクレイモアで受け止めた。

無闇に剣を振り回してくるものの、私にとってそれは遅すぎて全て受けるのは他愛もない。

「わ、悪い……」

「ヒール。あんまり無茶はするな。なにもおまえ1人で戦ってるんじゃないんだぞ」

魔法でHPを全快させた。

「そうだな。ごめん」

「羽衣ちゃん。こつちも回復お願い」

「わかった。ヒール」

離れていても使用可能なので、その場で優美のHPを回復させた。防具の性能があまりに良く、優美は洸哉ほど大きくダメージを受けない。武器も攻撃力が高いため、レベルに見合わないほど大きくダメージを与えている。

数も徐々に減り始める。洸哉のバスターソードが引き裂く。優美のショートソードが貫く。健介の魔法が焼きつくす。私の魔法が回復させた。

Now loading...

スケルトン10匹を全滅させてから、休むことなく先に進む。

オーバーリカバリーを利用して、まったく休憩を入れずに狩りをするのが一般的だ。だから特におかしなことをやっているわけでもない。

「なんか不思議な感じですね。こうずっと歩いているのに疲れないなんて」

けど慣れない者にとっては不思議な体験なのだ。まあ数十キロ走り続けても息を切らさなかったら気味が悪くなるのと同じか。

「慣れれば便利だぞ。テスト前とか徹夜しても疲れないし」

「それは名案ですね」

洸哉の発想に乗る健介。健介は馬鹿ではないと信じていたのに、裏切られた気分だった。

ちなみに私は徹夜で勉強などしない。無論、授業を聞いていれば点数をい取れるような天才でもない。つまり諦めている部類に入る。これでよく高校に入れたなと驚くくらいだ。コネがなかったら今頃隊でレベル上げをしてただろうな……。今日も本当はレベル上げをしないとイケなかったのだけど。

「あんまり金のドロップ率高くないな」

ふと、プレイヤーカードで先程の戦闘で手に入った戦利品を確認しながら洸哉が呟いた。

「だが経験値の効率は高い方だぞ」

「そうだけど、なんか……」

どうも経験値より金が欲しかったようだ。なんか意外だな。こいつならもつと強さとかに憧れそうなものなのだとばかり思っていた。「どうしてそんなに金が欲しいんだ？」

「えっ！？ いやそういうわけじゃ……。ちょっと欲しい武器があっただけ、だ」

「なんだ、そういうことか。それで、その武器の値段っていくらなんだ？」

「あー、えーっと……」

視線をあちこちに逸らしていた。思い出せないってことは流石に

ないだろう。じゃあどうしてなのかと訊かれても私にはわからない。知り合ってから日もそんなに経っていないが、こんなやつだっけか？　どこか違和感を感じなくもない。

「値段のことはこのへんで置いて、何処か稼ぎ所ってないですか？」

「なんだ？　健介も金が欲しいのか？」

「いえ、そういうことではないんですけど」

「2人してなんか変だ。思い過ごしだろうか？　なんか隠し事をしているような行動だ。でも人のことは言えないか。私もレベルとか隠しているし。」

「まあいいか。でも稼ぎ安いフィールドか……。心当たりがないな」
ほとんど経験値しか配慮しないでフィールドを選んでるしな。そもそも金銭的には高レベルのフィールドなら困ることはないわけだし。なので私はわからない。

心当たりならいくつかある。例えばベーオウルフのドラゴンとかクエストモンスターで、宝石を大量にドロップする。売ればかなりの金額になるはずだ。でも今の洸哉のレベルじゃ無理だ。そもそもソロでやるような相手ではない。こいつなら無謀にソロでやりそうだからこの話は当分伏せておこうか。

「書店で本でも買って見たらどうだ？」

「でも金稼ぐために金使っちゃってなんか気が引けるんだよな」

「必要な出費だと思え。武器や防具以上に情報は大切なものなんだけど。情報がなければ無駄に時間を浪費することにもなるし、下手すれば身を危険に晒したりして悲惨な目に遭う。もし助かってもそのときは大きな赤字にしかなりえない。だとすればいかに情報が大切か、馬鹿でも理解できるだろ」

「なるほど。説得力があるな。だけどよ、どんなの買えば良いのかさっぱりわかんねえんだけど。本屋あんまり行かねえしさ」

確かに最近は書店に並ぶ本の種類が多い。数年前まではプレイヤ―関連で纏められていたのに、今ではマップ、モンスター、武器防

具にクラスやスキル、アビリティの辞典。それに戦術指南書。有名パーティーの狩りの雑誌とか、色々あるもんな。

私が買うのはせいぜい……せいぜい……。なにも買ってないな。そもそも情報部の方が勝手に集めてくれるから自分で調べる必要ないものな。

「初心者用のはあんまり情報隠されてないだろうけど、3桁くらいからだんだん信用しきれなくなってくるかな。

4桁からガセが入り始めるから気をつけた方がいい。まだ注意するところはないから初心者用のガイドブックみたいなのを買うのが無難だろうな」

「ガセとかあんのかよ！」

「あるぞ。上に行くほど増えてくる。誰だって他よりも上に立ちたいんだろうな。そのためには情報がいる。同じ条件じゃなにやっても違いは生まれないからな」

高レベルになればギルドとかに入らないと情報がほとんど得られなくなる。だから組織が作られて、仲間通しで他と競い合う。その規模を大きくさせていくと国際規模にまで膨らむ。どの国が優秀か、競い合う。具体的には全国レベル順位や、軍内平均レベルで。そのために軍隊がある。その歯車に私も含まれているのだけど、どうもこのシステムは好きじゃない。それだけで優劣を決めるのは、だっておかしいじゃないか。

日本はなかなか上位に食い込んでいる。だから私はここで辞める権利を持っていない。国を捨てればどうにかなるけど、そうしたいとも思わない。

面倒だよねと、心の中で愚痴をこぼした。

「レベル格差。しかたがないとはいえ僕は好きになれませんね。『人と人がいればそこに差は生じる』、でしたっけ。その通りですけど、下の人から見れば楽しいものではありませんね」

「健介くん、それ神の舞い降りた日の話だよね」

「そうですね。丁度今年で30年目です」

一般常識なので勉強の出来ない私でもそれくらいは知っていた。

「俺も好きじゃないな。レベル格差」

「わたしもです」

「私もだよ。この場にいる全員が満場一致か。気が合うな、私たちは」

不満はあっても解決は出来ないんだけどね。力があってもそれで解決しようとすればレベル格差を肯定することになるし。

それに、和らいでくれればいいな程度にしか考えていないだろう。ここにいる皆は。努力した人に差はあっても、結果を差し出される。それは悪い話ではないのだから。

「やっぱり差別されるってのは良くないよな」

「感情的に言えばその通りだ。けれど仕方がないのかもしれないな」

「どっちなんだよ」

「均等に過ぎても墮落する。まさに神の言う通りと言うわけですか」

「そういうことだ。全てが悪いわけじゃない」

「よくわかんねえな」

「やっぱりこいつは馬鹿だ。今更でもあるけど。」

「さてと。そろそろエンカウントする頃合いだから気を引き締めろよ」

「えっ！俺のスキルまだ反応してないんだけど。あ、反応した」

「ほらほら。さっさと抜刀しろ」

数はまた10くらいか。スカルナイトまでこれの他に10匹くらい狩っておきたいな。そうすれば優美も健介もレベルが上がるだろうから。

でも私は後から回復魔法で補助するだけなんだよね。まったくもって焦れつたいな。

13話 ボス戦

森の奥深くに進むと、目的のボス級モンスター、『スカルナイト』が出現する洞窟にたどり着く。

入り口はまるで、怪物が大口を空けて待ち構えているかのようなだ。侵入者を内に誘い、喰らおうとしているかのような不気味さが漂う。風邪が吹き抜けて反響する音は、呻き声にすら近い。

「ワクワクするな」

洸哉は拳を握り締めて爛々と瞳を輝かせていた。

ついさつき3度目のスケルトンの群れを倒したので、レベルが健介は8、優美は5に上がっていた。洸哉はそんなに早く上がるはずもないので21のままである。わたしも上がるはずなくそのまま。

随分レベルの偏りが大きいパーティーだった。

「そうですか？ 僕は緊張しますね」

「わたしも……」

初めてのボス戦なんてこんなものだろう。場慣れしてくると洸哉みたいに戦いへの不安よりも、結果への期待のほうが高まるものだ。『ほら。行くぞ』

暗い洞窟の中へ足を踏み入れる。

中は光の届かないため、丁寧にも松明がいくつか設置されて道を照らしていた。低レベル用のフィールドならこういう親切なものがあるけれど、難易度が上がるにつれて照明などは持参しなければならなくなる。他にもロープが必要だったり、はしごが必要だったり。初見では攻略困難なことが多々ある。

「狭いな。こんなところで戦うのか？」

「推奨レベルが高ければそうなるが、今回は違うな。入り口のように最初だけ入り組んでいて、開けた場所で戦えるようになっていて。あと200メートルも進めばボスのいる場所に着くぞ」

「近いんだね」

「ボスが出現するためだけの場所だからな」

200メートルなんてすぐに歩ききつて、予定通り大きな空洞に出た。そこに先頭を歩いていた洸哉が入ると、壁の松明が入り口から連鎖的に火を点す演出をして内部を照らす。

そこは洞窟の中というよりも、ひとつの部屋と呼べる場所だった。地面は洞窟のどこぼこした地形ではなく、平らに床石が敷き詰められていて、大きな石の椅子が奥に置かれている。

そこに座っているのは当然、ボスのスカルナイト。巨大な体躯にあわせて作られたプレートメイルを着込み、左の腰には2メートルはある長大な剣を帯刀している。盾はないから両手であれを持って戦うのだろう。

「^{サーチャー}アクティブ。知覚」

能力を調べるアイテムを使用する。調べるものならどれでもサーチャーで発動するので、面倒だから使用するときはそれで通していた。

探知よりも、このアイテムは随分安価である。しかし、欠点といえば自分よりもレベルの低いモンスターにしか使用できないということだ。自分より高いレベルのモンスターに有効なのは高価なものになるし、人に使用可能な物はもつと高価になる。

私のスキルに能力を調べるものがあるが、それだと3人に能力を伝えることが出来ないでこれを使った。

「それで能力を確認しておけ」

3人の周りに、プレイヤーカードと同じように空中に画面が表示され、そこにスカルナイトのパラメーターが表示される。

「便利だな。それどのくらいの値段だった？」

「無駄口叩いてる暇はないぞ」

ゆつくりとスケルトンナイトが立ち上がり、腰の剣を抜刀する。座っていても座高が高いと感じていたが、立ち上がるとなおのこと大きく感じる。人の骨格のような外見なのに、3メートルくらいの長身って、なにかおかしくないだろうか？

「大きいですね」

「そうだな。攻撃力も大きいから気を抜くなよ」

洸哉と優美は前衛、私と健介は後衛。ウルフと戦ったときと同じ陣形を取る。

「ファイアーボール」

「アサルト」

健介が康応から攻撃を続け、洸哉はスキルで一気に距離を縮めて戦闘に入る。

洸哉は攻撃用のスキルを使わずに剣を振る。スキルを使うとその動作が終わるまで無防備になるため、良い判断だと言える。

初撃がヒットした瞬間に、スカルナイトの巨大な剣が洸哉を狙って横薙ぎに振るわれた。

「危なっ！　いくらなんでもでか過ぎだろ！」

間一髪で回避を試みたものの、僅かに剣がかすってHPに傷をつけていた。

剣速はなかなか速かった。だから、それに対応できたのはレベルの恩恵だけではないだろう。洸哉には、数値では見えない才能があるのかもしれない。

「洸哉と優美で前後から攻撃。健介は魔法をMPなくなるまで撃ち続ける」

全員無言で頷き、指示の通りに動く。

レベルの高い洸哉は前方で変わらず攻防を繰り返す間に優美は後ろに回りこむ。

「何度も同じ手は利かねえいぜ」

スカルナイトの攻撃を読んで、攻撃の予備動作を見せると同時に間合いから退く。振りかざしたときにはすでに健介の姿はそこになく、剣は虚しく空を斬るばかりだ。

「なかなか上手いじゃないか」

「へ？　そ、そうか」

「だがもう一発きてるぞ」

「うおっ!？」

褒めたのは間違いだっただか。よそ見している間に追撃が振られ、寸前に剣で防御をするもののHPを大きく削られる。そのまま吹っ飛ばが、そこはなんとか受身を取ってすぐに体勢を整えた。

上達したいっても、やはり短期間でそこまでの成長は見込めないか。

「ヒール。油断大敵だぞ」

「わかってる」

剣を構えて攻撃を待つ。カウンター狙いか？ 悪くはない。

後に回りこんだ優美がやっと攻撃を開始する。スカルナイトは狙いを優美に移そうと頭を動かすが、その隙に洸哉が飛び込み剣を突き立てる。

数の勝利か。後衛の健介や私の方に向かう余裕がないから徐々にHPを削られつつの2対1ではあるものの、それでも前後に挟まれた敵のほうが不利。楽な戦いになりそうだ。

「カルムストライク」

「きゃっ!」

筋肉もないのに何処から声を出しているのかわからないが、スカルナイトは低い声でアクティブスキルの使用を宣言した。

そういえば攻撃用のスキルを持っていたっけか。思い出したときにはすでにそれが使用されていて、優美に長大な剣の三連撃が繰り出されていた。

なんとか初撃を回避するものの、流れるように続く2撃目、3撃目は回避しきれずにHPが減るのを防ぎきれない。装備のおかげでダメージはいくらか減少させられてはいるが、大ダメージであることに変わりはない。

「ヒール。まだスキルあるから注意するんだぞ」

「は、はい!」

隣で健介がMPポーションを飲んでいた。どうやら一度MPを使い切ったようだ。だがスカルナイトのHPは半分も減っていない。

魔法防御力が高いな……。

ないよりはマシだから健介にはこのまま打ち続けさせるとして、問題は前衛の2人。

私が回復させていれば問題ないけど、様子を見て危ないようなら防御魔法も使うとしようか。

「チャージスラッシュ」

上段から振り下ろされる強攻撃が、スカルナイトのHPを削ろうと叩き付けられる。だが、HPが大きいため簡単には倒すことが出来ない。

「いいかげんこっちを狙え！」

がむしゃらに剣を振り回して注意を引こうとすると、その甲斐あって狙いが再び洩れに向けられる。巨体の癖に素早い動きで後に振り向く。

「カルムストライク」

「よっしゃ！」

まっていたと言わんばかりに歓喜の声を上げ、さっきと同様の連続攻撃を間合いから抜けずに避けて見せた。

「やっぱり剣技って動作が同じだから避けやすいな」

確かにそうだ。今のは横薙ぎから始まる三連撃で続く動作も完全に同様。対象によって高さや向きに修正が加わるが、動作の種類のには同じだ。

「ありがとうございます」

「き、気にすんな。当然のことをしただけだつて」

戦闘中まで律儀に御礼なんて言わなくてもいいんだけどな。それに今のは、攻撃を回避してみたただけであつて、別に優美を助けよとしたわけでもないようにも思える。それでも優美が嬉しかったのであれば事実なんて些細なことか。

簡単に言葉を交わしてすぐに、スキル後の僅かな硬直時間を逃さず、前に出て攻撃を仕掛ける。やっとHPは半分を切った。

「ファースブレイド」

2つ目のスキルをスカルナイトが発動させると、刀身が白く発光した。光は剣を包むように幅があり、光に攻撃判定があるのならイチが少し増えることになる。

それを横に振るが、さっきよりも動作が速い。タイミングを誤って洸哉はダメージを受けてしまった。HPのゲージはみるみる減って、6割を一気に失う。

「いくらなんでも威力が高過ぎる！ ヒール」

驚愕するが、判断は誤らず、すぐに回復させる。剣が纏っていた光が失われてもとに戻っていく。このスキルが能力付加ではなく剣技攻撃だからだ。

それでも単発のため、モーションを一定にする必要がなく、動きが読みにくい。危ないと判断して防御魔法を使うとしようか。

「サンキュー。危なかったぜ」

軽い口調で言うものの、前衛にいるからには死と隣り合わせである。神経が太いのか、能天気なのか、出来れば前者であって欲しいな。

「洸哉！ 私が攻撃を防ぐからその隙に畳み掛けろ」

「まかせとけ」

返事をする、迷わずにスカルナイトの懷に飛び込んだ。そこまでは言うてないが、結果オーライか。走ってくる洸哉にスカルナイトが剣を振る瞬間、防御魔法を使用する。

「エスカッション」

洸哉を中心に青白い結晶の盾が現れ、剣が鋼鉄の壁に阻まれてもしたかのように弾かれる。この魔法を使用したままだと、こちらの攻撃も相手に届かないので、一度使用を終えて次の攻撃のタイミングを狙う。

懷に潜り込めた洸哉は剣を振り、HPを削っていく。優美はすでに後から攻撃を仕掛けていたので、防御を行う今となってはさっきの攻撃も脅威ではなくなり、あとはHPを削る作業をするだけか。このままのペースなら5分くらいで終わるだろう。でも油断は出来

ないな。失敗すれば大惨事になりかねないのだから。

「こんなに強力なモンスターではなかったはずなんだが……。個体差があってもここまで大きな差が生まれるものなのか？ まあ今考えのはよそう」

呟きつつも違和感を拭えないまま戦闘を続行する。

度重なる攻撃をスキルであるうとなかろうと魔法で応戦していく。この程度の威力では破壊されることはないが、代わりにMPの消費もなかなかあるため残量がじわじわと減っていく。ポーションを使う可能性も考慮していたけれど、スカルナイトのHPは残り1割だったので大丈夫そうだ。

「チャージスラッシュ、セカンドリー」

MPの残量を気にせず次々にスキルを発動させて残り少ないHPを追いつめていく。

「ファースブレイド」

「エスカッション」

最後の悪あがきに優美の方に強力な一撃を放つ。当然魔法で防御するが結晶の盾を無視してそのまま反対方向に回転切りを浴びせる。狙いは洩哉の方だったか。しかしもう間に合わない。一撃では死なないからここは洩哉にダメージを受けてもらう他ないだろう。

「残念だったな」

リーチが増えているにもかかわらずそれを地面に滑り込んで回避して、止めの一撃を突き刺した。やったことはないが、ゲームのよきな動きに相当した。

巨大な骨格はHPを失って光の粒子に還元されていく。細い骨がさらに細くなり、やがて消えていく。残ったのは長大な剣のみだ。

まるで勇者にしか抜けない聖剣のように地面に垂直に突き刺さり、不動を貫く。どうやらドロップアイテムらしい。普通ならアイテム欄にドロップアイテムはランダムで送られるのだが、こういったボスモンスターなどではこういった演出が加わることもある。

「お疲れ様」

「お疲れ様です」

一番近くにいて、一番疲れていない健介が返事をした。前衛の2人も戦闘中に私の回復魔法でオーバリカバリーをしているから対して疲れてないだろうけど。

「クラスチェンジしたのは洸哉か？」

「おう！」

プレイヤーカードを早速いじってパラメーターを眺めている。

クラスが変わると、レベル以外は大抵変わる。スキルは残るものが多いが、アビリティの種類や配分なんかが変わり、ステータスもそれに伴い変動する。

剣士より上のクラスであるから前より劣化していることはないだろう。

「どうだった？」

「なかなか良い感じになってる。それにスキルも増えてたぜ」

「そうか。よかったな。2人は？」

「レベル上がりました」

「わたしも上がったよ」

「そうか。それであの剣だが、どうする？ 欲しい人はいるか？」

記念にとっておくもよし、換金するもよし。使うという選択肢は流石にないだろう。

私は別にいらないので欲しい人がいれば譲るつもりだった。

「僕は遠慮しておきます。持っても役に立ちませんからね」

「いや、誰も使えなんて言ってないぞ」

「わたしもいらなかな」

「え？ 俺も要らないんだけど」

誰も要らないのかよ！ とツツコミを入れたかったが自粛する。

「だが換金すればいくらか金になるぞ」

「欲しいです」

即答だった。最初に換金することを思いつかなかったのか？ こいつは。

他に欲しい者はでなかったので洗哉が剣に触れてアイテム欄に収納した。

「さて、帰るか。HPは大丈夫だろうが、エンカウントはなるべく避けて行くか？ それとももう少し戦いながらにするか？」

「ちよつと急ぎたいから避けて帰らないか？」

「わかった」

それぞれ、初のボス撃破の高揚感を抱きながら洞窟を出た。森は明るすぎないとはいえ、洞窟の中と比べれば明るいものだ。おかげで少し眩しかった。

来た道を少しずれて歩き、持ち前の経験を生かして一度もエンカウントせずに入り口までたどり着く。クエストも全て達成完了。3人にとって上々の一日だっただろう。私にとっても数値には残らないが、感情的には上々の一日だった。

13話 ボス戦（後書き）

剣技のスキル名は適當です。すみません
というかネーミングセンスがないです
なんか良い本ないかなと探していたりします

では、現在の3人のレベルとクラス、スキルをちょっと整理し
ておきます
使っていないスキルはまた今度の機会に

八神洸哉

レベル：21

クラス：剣術士
スキル

- ・アサルト
- ・チャージスラッシュ
- ・セカンドリー
- ・索敵弱（パッシブ）

美鶴来健介

レベル：9

クラス：魔術士
スキル

- ・炎弾

崎宮優美

レベル：6

クラス：冒険者

スキル

・バトルセンス弱（パッシブ）

洸哉だけなんか多い気がします

他の2人は使っていないだけでパッシブスキルがあります

14話 洸哉の幸運

フィールドから帰還して、駅に戻ったときには空が夕焼けに染まっていた。

空気はフィールドよりも綺麗ではない。それが別の場所であることを明確に分けているようで、戻ってきたことを実感できる。

「それじゃ、月曜日学校で」

「ああ。また会おう」

「さようなら」

「ばいばい」

初めてフィールドに行ったときのよう、残ったのは俺だけだった。もつとも、あの日は健介は途中までは一緒にいてくれたっけか。皆忙しいんだ……。他人事でもないけど。

雑踏の中に3人が消えるのを見送って、これからどうするか考え始める。

今日2人を誘ったのはもう少し羽衣に基礎とかを教わりたかったのと、幾分かの下心のためだった。目的も達成できたし、さらにはクラスも良くなった。一石二鳥とはこのことだろう。

母さんには健介のところに泊まると嘘をついて、帰らない理由を作っておいた。オーバリーカバリーをしながら明日の夜まで狩りを続けるためだ。さっそく狩を始めたがそのまえに準備することがいくつかある。なにかから始めるべきか。

「まずは本屋に行ってみるか」

情報が大事だと教わったので、それに従ってみる。本屋で買うものなんて、今までは漫画くらいなものだったから、俺も大人になったなと感心した。

本屋は駅のすぐ近くにあり、到着まで時間は掛からなかった。いざ、自動ドアを抜けて本の山に挑む。

店内は俺と同じようなフィールド帰りの学生や、幾人かの大人が

入り混じっているものの、それほどの尾人数がいるわけでもなく、どちらかと言えば空いていた。

本屋自体も大きい、アイテム化を利用しているためここの品揃えは抜群である。もともとオススメ商品は棚に並んでおり、時期が時期なためか、初心者用の本コーナーがあつたため、探す手間が省けた。

「『基礎から覚える戦闘テクニク』、違うな。『初めてのフィールド』、微妙だ。『簡単にレベルが上がる本』、こういうのって胡散臭くて買う気がなくなんだよな。『楽しい狩り基礎編』、これじゃないんだよ」

探してみるがなかなか見つからない。俺が探しているのは効率的に金の稼げるフィールドが載ってる本なんだが、需要が少ないんだろうか？

まあ高校生でレベルより金を欲しがる人なんてそうそういるもんじゃないか。その少数派に俺がいるけどな。でもレベルだってあるに越したことはない。その方がより多くの金を稼げるからだ。なら先にレベルを優先的に上げてみるのも手か？

——駄目だった。次の返済日まで時間がない。レベル上げはするにしてもその後だ。

「どうすつかな……」

「どうした？」

「のわっ！　っておまえらかよ。急に湧き出てくんない」

「そんな理不尽な」

モンスターが湧き出てくるかのように、湧いて出たのはクラスメイトの男子たちだった。その数3人。それぞれ名前が——なんだっけか？　覚えていなかった。

「えっと」

言葉を発してみるもののどうしようか。名前を訊くのも悪い気がする。

「右から山田、福田、橋田だ。覚えてくれよ、洸哉」

こいつ、心が読めるのか！？　なんてことはないだろうが、場の空気を読んで名前を言ってくれた。ちなみに今喋ったのは中央の福田だ。

「悪い。それでおまえらここでなにしてんだ？」

「見ればわかるだろ。本買いにきたんだよ」

「それもそうだな。他に来る意味なんてない。」

「もっと詳しく言えばフィールド行つた帰りによつたんだよ」

「へえ。おまえらもか」

「ということは洗哉もか。フィールド名は？」

「コカロの森。スカルナイト倒してきた」

「マジかよ！　あれ推奨レベル高くなかったか。まあいくらなんでも1人で、つてことはないよな」

驚きに声を上げると、周囲の視線が集まる。やめてくれ、俺まで恥ずかしい。

でもやけに詳しいな。俺なんて今日までクエストもよくわからなかったんだけど。それともこれくらい普通で、俺が馬鹿なだけのか？　そんなまさかな。

「すると健介と一緒にだったのか？」

山田が言う。なんでそこまでわかるんだよ。こいつらの名前も覚えてなかったのに、こっちの交友関係は知られている。本当に俺が馬鹿なだけなのか！？

「よくわかったな。それに羽衣と優美も一緒にだった」

「……そっちの方が驚きだ！……」

3人の声が綺麗にはもり、再び周囲の視線を集める。だからやめてくれって。

「なんて羨ましいことを！　殺す」

「どうしてなんだ、神様。どうしてこいつなんだよ！　殺す」

「俺らが必死にモンスターと戦ってる間にお前は！　殺す」

「物騒だぞおまえら？！」

3人して最後の言葉だけ被っていた。彼らの背後に見えるドス黒

いオーラは目の錯覚だろう、きっと。だがなんでそんなに殺意を抱かれなきゃならんだ。確かに羽衣は綺麗だけどさ。

まだ言い足りないらしく、そろいも揃ってぶつぶつとなか呟いていた。こんな風に言っているとまるで呪詛だな。上手く聞き取れないが、時折「殺す」や「消す」など危険な単語が聞こえる。呪詛で合ってるな。

「恐いからその辺にしといてくれ」

「え？　しかたがないな。殺す。それよりどういうことだよ！　教室で話してたのは見たことあったけどよ」

全然止める気ないよな？　まあいいか。

「だって友達だからな」

「」「殺そう」「」

「なんでそうなる！？」

命の危機から脱却すべく、必死にツツコミを入れた。モンスターに殺される前にクラスメイトに殺されるなんて、冗談じゃないぞ。

「だってあいつら人気投票するくらい人気なんだぞ」

人気投票ってなんだよ。そもそも進学してまだ1週間だぞ。どう考えたって情報が速すぎるだろ。

「まあそうだろうな。で、人気投票ってなんだよ？」

「あ、それ俺ら統計部の活動ね。洸哉はなんか部活入るのか？」

「入らねえけど。統計部ってなんだよ」

「別名情報部。名前はどっちでも良いんだけどとにかく色々調べて情報を売買する部だよ」

「そんなの認められてるのかよ……」

そんなのがあるならこの情報量も、速さも納得——出来るのか？　まあ納得しておこう。でも金取るの認められてるって変だろ。無償ならどうにか作れそうだけどさ。

「実際の情報屋を本格的にするってことで認められてんだよ。それになにも金だけが通貨じゃない。情報同士の交換もしてるぜ。知りたいことがあったら頼ってくれても良いんだぜ」

「それで、人気投票つてもうやってんのか？」

「投票は月曜から行う予定だったんだけどな。まあ面倒だし、今聞いとくか。おまえはどっちに入れる？」

「羽衣、かな」

「なぬ！？ 優美ちゃんじゃないのか？！」

「いや、羽衣さんだろ！」

「選べねえって！」

「こいつら見事にばらばらだ。」

「わかってないな。でも仕方ないか」

「なんか偉そうだった。わかってないのはどっちだよ。」

言い返そうとしたが、それよりも俺は本を買いに着てるんだった。これ以上無駄に時間を浪費したくない。危なく忘れるところだったぜ。でも見つかんねえんだよな……。そうだ！ 情報部っていうくらいだし、こいつらなら知ってるかも。

「おまえら金稼ぎやすいフィールド乗ってる本知らないか？」

「推奨レベルは？」

「20」

無理のない数字を指定する。自分のレベルより少し低く目が狙いどころだからだ。初日はレベルと同じ数の推奨レベルのフィールドに行ったら危ないところだった。クラスも変わったことだし、今ならそのくらいでもどうにかなると、短いながらの経験で考えた。

「もうそんなになつたのかよ！？ 驚かされっぱなしだな。で、20か。だったら『大富豪の一步目』って本がオススメだな」

在庫でタイトルを検索したらすぐに見つかった。それを取り出して手に取る。値段も手頃だ。名前はアレだけど試す程度の気持ちで買うことにした。

「ありがとな。それじゃ、また」

「ちよつと待てよ」

駆け出しそうだったところを引き止められる。なんだよ、俺は忙しいんだ。

「まさか情報料とか言わないだろうな」

「そんな悪いことはしねえよ。良い狩場見つけたら教えてくれ。それだけだ」

「考えとく」

「あと無理するなよ」

「おう！」

俺って周りから見るとそんなに無理してるように映るのか？ そんなつもりは、あんまりないんだけどな。

ともかく、本をレジに通して会計を済ませた。

Now loading...

本屋を飛び出して朝行ったショップに向かい、戦利品の売って、回復アイテムを多めに買った。あの剣が結構良い値段で売れたのは幸いだった。今やプレイヤーカードには少し大目の金額と、大量の回復アイテムが並んでいる。ちょっとリッチな気分を味わえる。でも回復アイテムは、今日と明日でほとんど使い切るんだよね……。

駅のなかで買ったばかりの本をさらっと眺めて、向かうフィールドの目星をつける。

出現モンスターが多数ではなく、強力なのが少数の方がやり易いため、そういったフィールドを探すことにした。見つけたのは『フアナティック研究所』。出現モンスターのメインは『キメラ』。個体としては強いだろうが、所詮レベルは20だ。これくらいで丁度いいか。

今度はクエストを受注するためにプレイヤーカードを開こうとする。そこで初期設定から変更してない簡素な着信音が鳴り響く。誰からかメールが来たようだった。

「誰だよ、今からクエスト受注するってときにさ」

現在、俺のメールボックスは健介から送られてきたものが数件あるだけだ。これも健介からのだと予想して開いてみる。だが差出人

は予想外のところだった。知らないところではない。むしろ知らない人はいない有名なところだ。

「NPC社？」

半信半疑で何度も読み返してみるが、差出人は『NPC社』とし
か書かれていない。なんで俺のところにメールが届くんだ？ もし
かして宣伝とか？ でもNPC社はあんまり宣伝とかしないしな…
…。

ともかく開けばわかる。だから開く。

「クエスト、コロッセウムビギナーランク初心者？」

メールのタイトルはそう書かれている。開いてみると、一行目に
も同じ文が書かれていた。クエストの告知か。でもこうやって届く
なんて聞いたことがない。

「場所はコロッセウム。そのまんまだな。内容は出現モンスターの
討伐。これじゃわかんねえだろ。条件？ そんなのもあるのかよ。

えーっとレベル100以下、メール受理者のみ、一日一回まで。報
酬は——」

ぶつぶつ読みながら内容を追っていく。一見すればただのクエス
ト告知。無視して予定のフィールドに行こうと考え始めたところで、
目を引く文があった。

報酬。その隣に書かれた金額はなかなか多かった。今日受けたク
エストの報酬金額を全て合わせた額も超えるほどに。

さらにもうひとつ。経験値、レベル5アップ。レベルがらも上が
るということだろう。レベルが上がればそれだけ稼ぎも良くなる。

このクエストを受けない道理はなかった。最後の一行にある受注
の受理と拒否のボタンを間違わずに押し、クエストを受ける。

「予定は狂ったけど、結果オーライだな。どんなの相手でも今なら
勝てそうだ」

本をアイテム欄に収納して、改札から行き先を『コロッセウム』
と入力した。

突然別画面で『IDを確認しています。しばらくそのままお待ち

ちください』という文の書かれたページが現れ驚いたが、すぐに『IDを確認しました。ゲートに移動してください』という文に変わった。

装備を整えてから先に進んでゲートを通ると、洋風の石造りな建物に着いた。コロッセウムという名だから、古風な闘技場を模しているのだろう。

「あ、NPC」

通路にはNPCが何人か徘徊していた。ばらつきのない同様の容姿が、こんなに沢山いるとぞっとするはずだが、こつも綺麗だと気にならないものだ。羽衣には劣るがNPCの容姿は綺麗だと評価する。

彼女らに聞けばおよそのことはわかるので、今回も頼らせてもらおう。

「えつと、クエスト受けてきたんだけど」

「新参者の方ですね。いつもNPC社をご利用いただきありがとうございます。ございます。このようなクエストは……、初めてのようですね。そこから説明しましょうか？」

「じゃあそこから」

「このクエストのように、メールで送られてくるものは限定クエストといえます。一定条件を満たしているか、抽選で選ばれた方が受注可能です。洸哉さんはこの後者に当る、抽選で選ばれたことになります。」

限定クエストは専用のフィールドで行われており、専用のフィールドにはこのクエストを受けている方しか入場できません」

どうして名前を知られているか、それは彼女がNPCだからだ。大抵のことは知っている。俺の名前も例外なくだ。

しかし、そんなクエストがあるなんて話は耳にしたことがなかった。でも実際にあるのだあるのだろう。知らないこともまだ多いし、知る機会に恵まれなかっただけか。

「どうして限定クエストなんてあるんだ？」

「目的は2種類あります。一方は本実施するまえのテストを目的とします。モンスターのパワーバランスやフィールドの難易度を調整するためにクエストを行い、推奨レベルを決定するためです。」

もう一方はレベル差を作るためです。平等に努力してレベルが均等化しないために」

「最初のはわかったけど、後から言ったやつの意味わかんねえんだけど」

「レベルの差を意図的に作ることですか？ これは差を作ることでレベルの平均を安定させないためにあります。過度な平均化は、上を目指す意欲を減衰させ、衰退を誘発させるからです。わかりいただけましたか？」

「まあ、一応……」

納得いかなかったけど、まあいつか。ともかく今はクエストをいち早くクリアして、報酬を貰いたい気持ちで一杯だった。

「クエストって、具体的にどう進行すればいいんだ？」

「闘技場の入り口がすぐ向こうにあります」

指指した方向には、中央の闘技場に入る巨大な入り口らしき門があった。

「あそこから入り、出てきたモンスターを倒せばクリアとなります。モンスターは1体だけです。途中棄権も可能ですので安心して挑んでください。なお、このクエストは1日1回までです」

「じゃあ明日になればまた出来るってことか？」

「そうなります。レベルが100になるまで」

俺は当たりくじを引いたと思ったら、ただの当たりくじじゃなく宝くじの一等だったみたいだ。運が良い。それも尋常じゃないくらいに。なにか悪いことの起こる前兆じゃないかと危惧するくらいだ。高校1年生の平均レベルは、学校ごとにばらつきはあるが3月頃で80ほどだ。だが、このクエストならば2週間もあれば100になる。

つまり、来年になってようやくレベル100に見合うほどの金額

が儲けられるはずだったのが、あと2週間でその域に達せられると
いうことだ。しかも高い報酬金付きで。

嬉しさのあまり顔がにやけてしまうのもしかたがない。

「じゃ、早速行ってくるか」

「お気をつけて。今日のモンスターはミノタウロスです」

「わかった。ありがとな」

NPCに礼を言つて颯爽と入り口に向かった。

通路の途中で同年代くらいの人と何度かすれ違うが、そのなか
に見知った人物はいなかった。

大きな入り口の前にすぐにたどり着き、装備を確認してから深呼
吸をする。

「さてさて、儲けさせてもらうぜ」

にやけた顔は、まだ元に戻らなかったなのでそのままの表情で入り
口の門を叩いた。

14話 洸哉の幸運（後書き）

何故が続くことになってしまった

気付いたら長くなりすぎて洸哉の話が2話連続に!?

本屋での会話が長引きくなんて、予想外でした

そもそもその考えが甘かったのかもしれない……

次で終わらせて16話から羽衣視点に戻そうと決意してます

あと、登場した3人

山田、福田、橋田はその他ABC程度のもりです

重要な役割もないので今後登場するか、今のところ不明だったりします

15話 泐哉の夕食

土の地面が広がり、そこを円形に囲う壁がある。出入り口は2箇所。俺が入って来たところと、反対側にある柵の向こう側。

闘技場だったら観客でもいるのかと思いきや、席は1つとして埋まっていない。いや、今誰か2人来た。遠目でははっきりと容姿を確認することは出来ないが、女性っぽい。本物の人が、それとも演出映像か？ わからないが、空白地帯が多いことに変わりはない。

ゆっくりと柵が上がっていく。軋む音が静寂に酷く響いた。

「ミノタウロスかよ」

歩くたびに大きな足音が鳴る。

巨大な人間の体に、牛の頭をくつつけたそれが手に持つのは戦闘斧バトルアックス。2メートルはある体躯と巨腕から振り下ろされるその威力は、想像しただけで背筋を凍りつかさそうだ。

実際はステータスによって威力や筋力が大きく左右されるため、外見はあまり関係ないのだがそこまで頭が回るほど経験は積んでいない。

「コロス！ コロスー！！」

くぐもった声で叫ぶ。その言葉から思い出したのは本屋であったあの3人の呪詛。でもこんなモンスターの叫びより、あっちの方が数倍恐ろしかった。

「あいつらの呪いか！？」

実際のところ偶然の産物でしかない——はずだ。それに勝てばいいのだ、勝てば。

今日羽衣にプレゼントしてもらった剣、『ヴィゴレ』を抜刀する。分類としては初期に貰ったバスターソードに入るが、性能は全然違う。

スカルナイトのときにも感じたが、攻撃力の比重が大きい。戦闘

の時間短縮に繋がるから、買い替えて正解だった。

ヴィゴレを構えた瞬間から、集中して動きを捉える。微々たる動きのひとつも見逃さない。死んだ父さんが、まだ幼かった頃の俺に教えてくれた数少ないことのひとつだ。

「アサルト」

移動用のスキルで距離を縮めて先制の一撃を与える。HPがいくらか減少する。だが、防御力が高いのか割合としては多くは減らない。時間は掛かりそうだが、でも報酬としてはそれでも補って余りある。

カウンターの重たい一撃の様子見に後退して避ける。攻撃の軌跡を目で追える。遅い。これなら至近距離でも避けられる。

「ほらよつと」

下がった分を前に踏み込んで剣を振るう。確かな手応えを感じつつ、バトルアクセスの反撃に気を配る。得物を手にした手に力が込められる。さあ、来い！

「アサルトすラッシュ」

放たれたのは突進攻撃。本来は突進しつつ攻撃するための技だったのだから、至近距離が災いして巨体に弾かれたところを、バトルアクセスが襲う。

空中をサッカーボールのように飛ばされ、何メートルか進んでやっと地面に帰ってくる。追撃を恐れてその場からいったんミノタウロスとは反対横行に跳んだ。

「——っ！ 1発で3割もかよ！？」

スカルナイトよりは弱い。でも回復役がないのでは、アイテムを使うしかなく、それは大きな隙を作ることに直結する。

理想としてはスキルで大きく削りながら、回復せずに勝利すること。難しいが、少し試して無理なら諦めて回復のタイミングを見計らおう。

「アサルトスラッシュ」

「しつこいんだよ。チャージスラッシュ」

移動距離は自分が使うアサルトと同じ5メートル。何度も使ったので目視だけでも間合いの判断がつく。一瞬で迫り来る攻撃を、先読みしてスキルで相殺する。武器自体では相手が有利だろうが、ステータスでは上回っているみたいで、勢いは失われる。

「カルムストライク」

硬直時間が終わってすぐの攻撃。互いに攻撃を出し合うが、高速の3連激の前にミノタウロスを競り押す。

剣術士にクラスチェンジしたときに覚えた技であり、スカルナイトの使っていたスキル。威力もそこそこで、これからは多用することになりそうだ。MPの消費が少し大きいから、残量には注意しなければならぬ。

バトルアックスは最初の攻撃は防いだが、続く攻撃から身を守るほど小回りが利かずに攻撃を浴びていく結果に終わった。

攻撃後の硬直時間が再び訪れる。だが、ミノタウロスは今の攻撃で仰け反ってすぐに反撃が出来ないでいた。体の自由が戻ってから、再び攻撃。ミノタウロスはHPをやっと2割減少させた。

「さつさと、やられるって！」

攻撃を続けようとするところにバトルアックスが振り下ろされる。事前の動きで察知していた俺は、それを体を反らして回避。攻撃の手を緩めない。

至近距離の目まぐるしい攻防。回避しながら攻撃する俺と、俺に必死になって攻撃を当てようとするミノタウロス。

「しまっ——！」

回避のタイミングを逃して、鈍い音と共にバトルアックスが俺のHPを抉る。スキルを使っていない分威力は落ちていたが、それでも残り5割。自分は今、半分まで死に近づいている。

距離を取って回復をしないと。恐怖から咄嗟に後に下がったのが間違いだった。

「アサルトすらッシュ」

相次ぐ攻撃に残すところ2割。次の一撃で俺の命は失われる。

ソロではいつもこんな感じだった。数日のうちに、何度も何度も死の淵に追いつめられている。でも、それでも、負けるわけにはいかないし、止めるわけにもいかない。

「くっ！ アサルト」

距離を引き離しつつ、アイテム欄からHPポーションを取り出す。

「あさるトスラッ——」

「アサルト」

スキルの移動距離が同等だったので、詰められる予定分、距離を引き離す。手に握り締められた小瓶の蓋を親指ではじいて、中の緑色をした液体喉に流し込む。

胃が焼けるように痛かった。全部吐き出してしまいたかったが、大丈夫だ。まだ戦える。

ヴィゴレを握る力を弱めて、肩から余分な力を抜く。HPは5割まで回復していた。あと良くて3回、悪くて2回攻撃を受ければ死ぬ。それでも焦りはしない。

「しネエー——」

スキルではなく、直に走って来る。巨大な体躯なだけあって、たいた威圧感があった。

その胸に剣が突き刺さり、HPが僅かに減少していた。俺の手からは、得物であるヴィゴレがなくなっている。

「五月蠅えんだよ。アサルト」

ヴィゴレをすぐに手に取り、袈裟切りにする。HPはそれに呼応するように残量をさらに失った。

「チャージスラッシュ」

ヴィゴレは、振り回されたバトアックスと激突する。ほぼ動いたのは同時だった。

「セカンドリー」

弾かれたバトルアックスを、正確にはそれを持つ手を追隨して攻撃を行う。狙い通り武器は手から離れ、数メートル先に回転しながら落下していく。

硬直時間が終わると、すぐに攻撃を再開。HPを見る見るうちに減らしていく。

武器を取るかこのまま素手で攻撃するか、一瞬迷うが前者に決めたようで、ミノタウロスはバトルアックスの方向へ走り出そうとする。

「させると思うか？ チャージスラッシュ」

足下を掬うように横に振り、バランスを崩す。

「セカンドリー」

そこから斬り上げ、巨体が空を舞う。

「カルムストライク」

丁度硬直時間が終わり、落下してきたところを続く3連撃。ほぼ5連撃に近い形となった。

HPも大きく減り、5割まで到達している。

「さつさと死ねよ」

地面に大きな音を立てて衝突する。そこに攻撃を加え続けて更なるダメージを促進させた。

MPの残量はまだ余裕がある。危惧するならHP。片手で剣を振り、空いた片手でHPポーションを取り出し回復をした。

Now loading...

何百回斬り付けたかは、もうわからない。でも、その何度目かでようやくミノタウロスのHPは完全になくなった。

光が視界を埋める中、感動よりも先に疲労が体を襲った。

「マジで疲れる。単体で出てくるだけはあるよな」

かなりの数を消費したHPポーションを、さらにもう2本飲む。

もったいなかったが、こうして伸びている時間の方がもったいない。

HPの残量が最初の1本で全快して、もう1本はオーバーリカバリーを起こしてくれた。体を蝕む疲労が薄らいでいく。

プレイヤーカードを開くと、『クエストの完了』という文字が現れている。そこをタッチして報酬を受け取る。

レベルアップを知らせるファンファーレが鳴り、所持金の量も増えていた。パラメーターを画面で確認してレベルアップによる上昇量を確認する。なかなか良い上がりっぷりだった。

「後は本に書いてあったフィールドに行って稼ぐか？ でも5レベルも上がったしな……。もう少し本見てから決めればいいか」

夕食を済ませないといけないし、そのときにでも見よう。

「今日もどんどん稼ぐぜー」

鼻歌交じりに呟く。『稼ぐ』という言葉が最近口癖になってきたかもしれない。

入ってきた出入り口へ向かい、外に出た。

「危なかったなあ、自分。あんなに続けとつたらすぐ死ぬで」

不意に陽気な声が投げかけられて、そちらの方向に目を向ける。

声の主は当然知らない人物だった。

ポニーテールをした二十歳過ぎくらいの女性。男子の中でも少々背が高い部類に入る俺だが、彼女の身長は、それより少し小さいくらい。女性の中では間違いなく長身の部類だ。羽衣や優美といったからだろうが、髪の色が黒色なのが少し新鮮だった。美人といえば美人だが、垢抜けない感じがしてそこが愛嬌にもなっていた。

軽装備に身を包み、腰には複雑な文字か紋様かわからない何かを描かれた鞆が下げられている。その鞆からは、ただの装飾はない濃厚な重圧感が感じられる。

「こんなところで死ぬなんて損やる？」

笑顔なのに、その瞳には終わりに見えない闇が潜んでいるかのようだった。理解できないものには自然と恐怖を覚えるのが人間である。俺も例外なく、本能が危機を知らせていた。

「ほほう、なかなか良い目や。ほんまにこれで素人かいな。将来凄いやつになるで、自分。生きてればの話やけどな」

「は、はあ」

「情けない返事やな。ま、ええか。ちよつとお茶でもせえへん？」
「え？」

そのまま有無を言わず手をつかまれぐいぐいと通路を進んでいく。困惑のあまり、声が出なかった。

ちよつと進んだ先の角を曲がると何故か食堂があつた。湯気と共に料理の匂いが嗅覚を刺激する。夕食時だからか、幾人かのプレイヤーが席を埋めて賑わっていた。もちろんこの店を営業しているのはNPCだ。同じ顔が並んで作業している。シユールな光景だつた。
「立つてないで座つたらどうなん？」

「あ、はい」

「うーん、こんなに上手そうなんがあつたら悩むなあ。好きなを選んでええよ。うちの奢りや」

「あの、誰ですか？」

やつとこの質問である。年上だったので一応丁寧な口調を使った。まさか逆ナンなわけないし、これはいったいどういう状況なのか。混乱は収まらない。

「大阪春美。春美さんでも春美でも好きに呼んでええよ」

「八神洸哉です。それでどうして声かけたんですか？」

「試合見取つたからや。自分めっちゃ危ない戦いかたしてたやろ。だから人生の先輩としては注意してやらんとなあ、なんて思ったわけや」

おせつかいな人なんだろうか。滅茶苦茶な理由だつた。

「よっしゃ。大盛りカレーライスにしようか。洸哉君は決まつたん？」

「じゃあ醤油ラーメンで」

「もっと高いのでもええのに」

そう言つて注文をしにカウンターに向かつていく。それに続いて席を立ち上がる。

会計を済ませると、すぐに料理が出てきた。それを席まで運んで、再び座りなおす。いつの間にか言われるがままになっていた。

「あの子とは違つけど飯はやっぱ良いもんやな」

2人前はありそうなカレーをスプーンで次々と口に運んでいく。
「こんなに食べて太らないんですか？」とは言わなかった。そんなことをいったら羽衣はどうなんだという話だからだ。ファミレスであれだけのパフェを1人で食べきったのは、伝説になりそうだ。

自分も箸を割ってラーメンを食べ始めた。胃の中が麺とスープで満たされていき、次の戦いへの活力がみなぎってくる。

「それ、プレゼントや。大事に受け取り」

アイテム欄から渡されたのは黒いコート。防御力の高い軽装備。今の装備よりも若干軽いくせに、この能力値は反則じゃないだろう。装備条件はぎりぎりでクリアしている。

「なんか裏がありますか？」

出来すぎた話には裏がある。親切なだけかもしれないが、さっき会ったばかりの人にそこまで信用することは出来なかった。

動かしてたスプーンが静止する。

「逆に自分を利用してなににすると思う？」

P K。つまり恐喝や暴行などのプレイヤー間での犯罪行為が頭に浮かんだが、それを行うとは考え付かない。それならばこれほど優秀な装備を無料で差し出してくる理由がない。

「信用できへんか？」

「はい……」

それでも、なにかあるのではと疑念は拭えない。

「ほれ。いいもん見せたる」

差し出されたのは可視モードに設定された彼女のプレイヤーカードの画面。なんのつもりかわからないが、それを覗くと、心臓が止まるのではというくらい驚愕した。

「え……あの……!？」

レベル10万オーバー。国内3位までがその馬鹿げた数値であることを知っている。つまり彼女は3位以内ということだ。

レベルこそが優劣。それを実感したのは今が初めてだった。

彼女がその気になれば、指一本でも触れた時点で俺を殺せる。そ

れも逃げる間もなく。この異様な俊敏力の数値では、何処にいたって喉元に剣を向けられているようなものだ。

「そんなに恐がらんという。別にとって喰おうなんて思っとらんから」

プレイヤーカードを不可視モードに戻してそれを仕舞い、再びカレを口に運び始める。

「将来有望な子への、ちょっとしたサービスや。運が良かった程度に考えといて。あ、それとこのことは秘密やからな」

「は、い……」

手が汗ばんでいた。緊張しているのが嫌でもわかる。こんな借金を取り立てに來られたとき以来だ。

地位も権力も金も実力も備えた彼女が、なんで俺なんかに声をかけたのか。きつと彼女の言った通りなのだろう。ただ運が良かっただけ。信じる他ない。

「春美さん。時間です！」

いつの間にか、もう1人女性がやってきていた。眼鏡をかけておさげという容姿は、地味過ぎて逆に個性的になっている。

「もうそんな時間か！？ まだ食べてへんのに」

「いいから行きますよ」

地味な容姿なのに、口調は随分強気だった。きつとこの人も高レベルなんだろう。

「ちよつ、待つてえ」

「あれ？ そちらの方は？」

「今さつき見かけた初心者君や」

「そうですか。さあ、行きますよ」

一瞥したが、興味なさそうに視線が春美さんに戻される。

「カ、カレーライスを食べさせてえ」

悲痛な叫びを上げながら、引きずられていった。なにがなんだかわからないまま、彼女達はこの場を去る。嵐が過ぎ去ったようだった。

残っていたのは食べかけのカレーとラーメン、それから俺だった。

15話 洸哉の夕食（後書き）

ちよつと強引な展開な気もしますが、おおよそは仕様です

16話 戸惑う3人

「（ふむ。どうしたものかな……）」

教室に置かれた自分の席に腰を下ろしたまま、腕を組み思考に耽る。英語の教師が教科を和訳させていたが、まるで頭に入らなかった。頭に入る以前に耳にも届いていない。

最近優美の元気がない。それが原因だった。

月曜日は何処となく上の空な感じがして、会話にも積極的に加わろうとしなかった。訊かれたことに対応しているだけのような、なにかする気も起きない。そんな印象。

火曜日はちよつと体調を崩して授業に遅れて参加した。理由は風邪らしいが、彼女の経済環境でそれはありえないだろう。風邪なら簡単な状態以上回復の魔法で治すことが出来るし、疲れだつてオーバリカバリーをすれば良い。どこか気になったが深く追求はしなかった。

水曜日は2度目のフィールドでの授業があつた。どこかやる気がなく、何度も回復を使って補助を入れていた。はつきり言つてあんな精神状態でフィールドに入るのは危険だった。ついでに他の生徒がまたトラップに巻き込まれたのを救助した。格好も同様だったのではれないだろう。

気付いたのは月曜日から。洸哉と健介、それに優美と一緒にフィールドへ出かけた明後日だ。土曜日は特に問題なかった気がする。つまり、帰宅後か翌日の日曜日になにかあつたのかもしれない。

「起立！ 注目、礼」

どうやら授業が終わり、教室を話し声が飽和する。

「優美、最近元気ないがどうしたんだ？ 昨日も言ったが私でよければ相談に乗るぞ」

「なんでもないって。ほら、見ての通り元気一杯だよ」

そう言うものの、表情には無理があるように映った。思い過ごしではないだろう。

でも、決して話そうとはしないからこれ以上訊いても無駄。話せないのか、話したくないのか、どっかわかれば手の打ちようがあるんだけどなあ。

「おっす」

そうこうしている間に、洸哉たちが席によつてきた。

彼らの席は教室の廊下側。希望者が多く、くじ引きで雌雄を決した。対して私たちは中央の前から2番目と3番目。比較的楽に選べる場所だったので苦もなく決定した。

「最近優美の調子が悪くないか？」

洸哉の耳元に、小声で囁きかける。

「あ、ああ。言われてみればそんな気もしなくは……」

「それで訊いてみたんだが、なかなか話してくれなくてな。心当たりはないか？」

洸哉は首を横に振る。まあ、そうだろうな。

溜息をついて自分の机に顔を伏す。そのまま頭の向きだけ変えて健介と視線を合わせる。それだけで意図は伝わったようで荒野と同じく首を横に振った。

「そうだよな。はあ……」

以前なら「優美ちゃん、溜息吐くと幸せが逃げちゃうよ」くらいは言ってくれてたのに……。

この微妙な雰囲気を感じ取って彼らも表情を曇らせる。負の連鎖だった。

「駄目だよなあ、このままじゃ」

席をゆっくり立ち上がって、廊下に足を運ぶ。聞こえていないだろうが念のため彼らには手招きで一緒に来るように促した。

「そんなわけでなんか良い案はないか？」

「ですが優美にも言い難い事情があるんじゃないでしょうか？」

「健介。それは正論だがこの際無視だ。もうやってられん。こうなったら我を通すまでだ」

「ですが……」

「じゃあなんだ？ このままで良いと？ 時間が都合良く解決してくれると？」

「それは……」

私のはただの我がままに過ぎなかった。でもそれを通してなにが悪い？ 今が駄目ならどんな手段でも使っても変えてやればいいだけのことじゃないか。

このままでいるよりは、そっちの方が何倍もマシだし、私の性に合ってる。

「だったら情報部とか頼ってみたらどうだ？」

「ほう。最後の手段を最初に使うか。まあそれも悪くないな」

「それ最終手段だったのか！？」

「そうだぞ。報部を使うってことはプライバシーを無断で覗き見ると変わらないからな」

でも取り返しのつく間に問題を片付けるなら最初からそれを使っても良いかもしれない。放課後にでも寄ってみるか。

「俺はそんなつもりじゃ！」

「安心しろ。もう決定事項だ」

「安心出来る要素がねえよ！！」

廊下の雑音を超える音量で叫ぶから注目が集まってしまったじゃないか。洸哉が変人として見られるならまだ良いが、付近にいた私や優美にまで飛び火させるなよ。

声に出すと可哀想なので心の中でその言葉は留めておいた。

Now loading...

「——というわけで優美について情報をくれ。金額の上限は考えなくていい」

放課後になって、情報部の部室を私たちは訪れていた。4人ではなく3人。1人少ないだけで、大きな空白があるようだった。

窓から見える空は、彩雲がもの悲しく漂っている。

夕日は人の心を移す鏡のようだ。嬉しいとき、楽しいときには美しく。辛いとき、苦しいときにはもの悲しく映る。だから私は今、悲しんでいるということなのだろう。

「そう言われてもねえ。優美さんについてはどのくらい知ってるよ？」

出迎えてくれたのは部員のたぶん上級生。

中世的な顔立ちで、背が低い。男子と言われても女子と言われても納得出来そうだった。しかし男子の制服を着用しているのだから男子なんだろう。

「生年月日に血液型、両親についても把握している」

「ほうほう。詳しいなあ。こっちもそのくらいしか情報はないよ」

「それで充分だ。金額は？」

「このくらいなら無料でいいよ。またのご来店、お待ちしてるよ。出来ることなら買い手じゃなくて売り手として来て欲しいよ」

部員さんはひらひらと手に持っていたデータファイルを手の中で転がした。

「それは？」

「うーん。ちょっとした企業秘密だよ」

「5万」

「売るよ！」

「「売るのかよ（ですか）！？」」

2人の驚愕を他所に受け取ったファイルを読み込む。

データでの管理の方が安全なため多く使われる。それに信用性が高い。昔と違って不正をすることは今のところ不可能なわけだし。

さて、なにが入っているかな。表示されたのは名簿のようだった。

だがただの名簿じゃない。ファイルのタイトルは『第1回新入生女子人気投票』。

「なかなか面白い趣向だ。しかし女子生徒だけを対象とした男子だけの投票では不平等じゃないか？」

「いやいや。男子のは5月にあるんだよ」

「なるほど。2重投票のロックはちゃんとかかっているな。なかなかの出来だ。これの集計は終わったのか？」

ベストスリーの名前をとりあえず見てみる。

1位——崎宮優美、月城羽衣。同票。3位——謎の黒髪サンングラス。

優美はわかるとして、何故私なんだろうか？ それと3位のこれも私だよな？ とうかが都市伝説にでもなりそうな勢いだな。昨日も動いたのが失敗だったか？

「まだだよ。でも全員には投票してもらったし、確認すれば終わんだよ」

「なら優美に私からの1票を入れておいてくれ」

「ま、そのくらいならお安い御用だよ」

ポケットからファイルの予備だろうか。それを取り出してデータを修正していった。するとこちらのデータも修正される。同期させているんだろう。

「女子の名簿から、誰がその人に票を入れたか確認できるんだな。」

逆に男子の名簿から誰が誰に票を入れたかも確認できるのか。洸哉と健介は誰に入れたのか、興味があるな」

「ちよつ、待て。落ち着くんだ羽衣！？ 頼む！ それだけは、それだけは止めてくれ！！」

「ぼぼぼ僕からもお願いします。僕らにだってプライバシーというものがある——！」

慌てる2人。ああ、優美がいればもっと楽しかったんだろうが、今でもなかなか面白い。優美の調子が治ったらこの話でもしてやるか。

あたりまえだが、彼らの言葉など無視して画面を操作して誰に票を入れたのか調べ上げる。

「ふむふむ。健介は優美か。確かに可愛いものな。その気持ちはわからないでもないぞ」

「ぐはっ！ここに優美がいなくて良かったです……」

「後で丁重にお伝えしておこう」

「情けをかけてください！」

これだから情報は恐ろしい。人気投票だけでこれほどの脅威になるんだからな。

「さて、洸哉は——」

「やめろー！！」

「う、ん？」

見間違いだろうか？もう一度確認する。——結果は変わらないか。この場合、どう受け止めればいいんだろうか？

「まあ、ありがとう」

困ってしまい顔をそらす以外の反応は出来なかった。

Now loading...

「それで、なんも得られなかったけどどうすんだよ」

廊下に出るとひんやりとした空気が肌を撫でる。放課後になってすぐ来たので、まだ生徒の姿も多く見かけられる。

部室棟だから、ここににいるのは部に所属している者が、部に用事がある者だろう。

私は時間の都合上、部に所属していない。他の3人も同様に帰宅部のようだ。

「充分情報は得られたさ。情報部が知らないということは校外、しかも生徒とは関係ない部分でのことというわけだ」

「そんなアバウトな」

これ以上調べるなら、それなりの所に調べさせるしかない。優美

は社会的地位としてみれば上流階級に入るからだ。個人としては私の方が上だが……。

「これ以上首を突っ込む気はあるか？」

「はっ？ 今更なんだよ」

「ちよつと『大人の事情』が絡んでるみたいだから。無理して深入りする必要はないと言ってるんだ。それでも協力したいなら構わないが」

大人の事情。私はそれが嫌いだ。誰かによって自分を決められることがどうしても許せない。ただ単に反抗的なだけかもしれないけれど。

どんな意味合いを含んでいるか、大雑把だが2人あ把握したように息を呑んだ。

彼らが協力しようとしまいと、私1人でも解決するだろう。だがこの2人にはただ見守る以外の選択肢も用意してやりたい。それが友達というものだろうから。

「馬鹿にしないでください。引き下がると思いますか？」

「そうだぜ。今のままじゃ寝覚めが悪りいし、協力するぞ」

「そう来ないとな！ じゃ、単刀直入に言うぞ。優美は崎宮グループの御令嬢だ」

「……………」

周りには聞こえないように最後の部分だけ小声で話す。優美に許可を取らないでぺらぺら話すのは躊躇われたが、この2人なら問題ないだろう。

問題はないのだが、話を聞いた途端さっきまでの勢いは何処へやら。瞬きの回数を増やすばかりで返答はなかった。

「それで『大人の事情』というわけだ。理解できたか？」

「……………」 規模がでか過ぎだろっ！ つうか崎宮グループってあの崎宮か！？」

「他になにがある？ 情報部もよく調べられたものだ。その情報だけでも充分入手に苦労したことだろうな」

その情報を喉から手が出るほど欲しがっている連中も多いだろうに。悪用すれば一攫千金の代物だ。そうしないのは誠意を持って情報を管理しているからだ。情報としてのプライドがあるんだろう。今でも充分プロ意識があるのに、将来はいたいどんな凄腕情報屋になることが。

「スケールが大きくて、いったい優美さんがどんな悩みを抱えているのか想像も出来ませんね……。それを解決とは、いったい僕らだけで出来るでしょうか？」

「安心しろ。どうにでもしてみせるさ」

「でもよ。こればかりは難しいんじゃないのか？」

「そうでもない。知り合いの情報屋にでもまずは調べさせてみるから、明日までは待機だな。さあ、2人とも。――世間に喧嘩をふっかけようか」

悠然と笑みを浮べた。

知り合いとはもちろんSHTの情報部の人材だ。国家でも屈指の情報収集能力を誇る彼らだ。1晩で調べ上げてもらおう。

職権乱用？ 使えるものを使ってなにが悪いんだ？ もしものときは友人として頼んだとでも言い逃れをしておけば文句を出せる人間も少ないから平気だ。

「物騒なこと言いながら満面の笑みをするな！」

そんなに嬉しそうだったのだろうか。そこまでとは思ってもよらなかった。でも優美の元気を取り戻せるかもしれないんだ。これが笑顔でいられないわけがない。

「だが物騒なことになるかもしれんぞ？」

そっちの方が私の得意分野だから、自らそっちに話を持っていく可能性も否定できない。いくら雑魚を集めても決死の覚悟で向かってくる者など出てこないだろうからな。それに範囲攻撃を使えば数の軍勢などの的でしかないからな。

「やめてくれ!？」

こいつら、よく考えると足手まとい？ 別にいいか。

「それじゃあ、吉報を待っている。また明日な」

「おう。また明日」

「さようなら」

部下を私欲に使うため隊舎に向かう足を速めた。音をかけつこを出来る速さで走ったため駅には数分もかからなかった。通行人には突風が起こった以外なにが起こったのかわからないだろうから構わない。

さて、副隊長は今日も苦勞が絶えないだろうかと、他人事のように思った。実質他人事だし。

17話 誘拐？

優美のこと、つまりは崎宮グループの事を調べておいてくれと言ったら、当然怒られた。なんだって相手は世を支える大企業。おいそれと手の出せる相手ではなかった。

しかしながら事情を説明したところ、しぶしぶ了承してくれたのだから私の人望あつてのことだろう。たぶん。

後は待つだけ。結局待つだけ。

なんともじれったい。

ストレスを発散するかの如く、昨晚の狩りはモンスターに八つ当たり気味なオーバーキルをしていた。

隊員曰く、「巻き添えで俺たちまで死んだら洒落になんないんでもう少し自重してください！」とのことだった。

そのままずると引きずって翌日の授業もまともに聞いていない。普段はまともに聞いているのかと問われればそうでもないのだけど。

優美に「どうしたの？」くらい声をかけてもらえれば少しは気が楽なもの、周りが見えていないようで声を向こうからかけてくることはなかった。

「そんなにイライラしててもなんにも事態は好転しないぞ」

声をかけてきたのは洸哉だった。

缶ジュースを左右の手に1個ずつ持つて、その片方を差し出してくる。

時刻はついさっき放課開始を知らせるチャイムが鳴ったばかり。昼食もまともに食べていないが、上手く喉を通ってくれそうもなかった。

だが好意を断るのも気が退けるため差し出してきた缶を受け取った。

「好転しないから私はイラっているんだ」

人差し指でタブを持ち上げて、中の液体を一気に流し込む。炭酸飲料だったらしく弾ける感触が喉を刺激する。

喉は潤ったが、それでどうということとはなかった。

「それもそうだよな」

同じく缶ジュースを喉に流し込む。

「もしもだけでも、俺たちじゃ力になれないような事だったらどうするんだ？」

缶ジュースを口から離して不安そうに尋ねてくる。

知り合ってから日は浅かったが、ずっと一緒にいたかのような気さえするほど4人でのいるのが当たり前になっていた。それがよくわからないなかで壊れてしまうのが怖いのは、私も洸哉も、同じなのかもしれない。

「そうじゃないことを祈るしかないだろ」

いくらトップクラスのレベルがあっても所詮は高校生。そんな自分ではどうしようもない事だって多々ある。もつともそれは個人の限界であって、個人としては比較的色彩なことが出来る部類に入るかもしれない。

「仮にそうだったとしたら、神にでも働いてもらうさ」

個人で出来ないのであれば誰かを頼る。例えば神とか。

「そんなんで神が助けてくれんのかよ」

「たぶん、な」

洸哉は苦笑する。ちよつと真剣だった場の空気が緩和されたようだった。

神はいるし、願えばたまに望みを叶えてくれる。それが世間の共通認識だ。まあ叶えてもらった人間はごく少数だけれど。でも、叶えてもらえる確信めいたものはあった。

飲み干した缶を放り投げて教室の隅にあるゴミ箱に入れた。距離は数メートルあったが、魔法を普段からモンスターに必中させているんだ。難しいことでもない。

「けど、優美がこんなに落ち込むなんてなにがあったんだろうな？」

「人死にはないだろうな。それならある程度二コースにもなるだろう。いじめの線も消えた。情報部が知らないんだからな」

今の情報を整理するが如く、消去法で選択の幅を狭めていく。

「だったら残るのはなんだ？」

「さあ。今ひとつ情報が足りないからなんとも言えんな」

「そこまで言つといてわからないのかよ!？」

学校では八つ当たりの標的に出来る物も少なく、代わりにプレイヤーカードが映し出す映像を荒々しい手付きで操作していった。

当たり前だがメールの欄には未だに報告が来ない。いくら優秀でも、それほど早く調べるなんて無理にも程があるというものだろう。

「わからないさ。私だって……」

「……………」

「……………」

言葉が見つからず沈黙する。

もし今回のことに明確な敵でもいれば、半殺しじゃ済まさないと心に決めた。

「どうしてこうなっちまったんだよ、ちくしょう!」

洸哉は私がさっきやったみたいにゴミ箱めがけて空き缶を投げ飛ばす。ただし大振りで。勢い良く放物線を描きながら飛翔した缶は、ゴミ箱の縁に弾かれ入ることはなかった。

苛立ちを見せながら、ゴミ箱まで歩み寄って缶を入れる。

そこで聞きなれた着信音が聞こえた。自分が登録している着信音は2種類しかない。片方は仕事用。もう片方はプライベート用。今鳴ったのは前者だった。となれば部下からかもしれない。

反射的に、起動させっぱなしだったプレイヤーカードの画面を、受信ボックスに移す。

「どうした？」

缶をゴミ箱に入れて戻ってきた洸哉は私の顔を見て不思議そうな表情をした。

「やっぱり私は待つより自分から行動した方が性に合ってるよな？」

きつと今の私は一週間ぶりに嬉しそうな顔をしていることだろう。メールの内容を確認すると、すぐさま席を立つ。まだ終礼から時間は3分しか経っていない。走ればなんとか追いつけるな。

「どうしたんだよ、急に」

「やっと御目当ての情報だ。健介を呼んで来い。私は一足先に優美を連れ去ってくる」

「は？」

一方的に言葉を発して、教室を駆け出した。一応、常人より速い程度の速さで。

Now loading...

思い返せば僅かなヒントがあつた。一般人でも知っている内容だったからこそ、うつかり見落としたのかもしれない。それに崎宮グループの社長、優美の父が良識人だと言われているから、その通りだという先入観が邪魔したのかもしれない。

崎宮グループの現状。

先日の大規模フィールド探索の失敗による大赤字。それは店舗に並ぶ商品の価格変動という形で身近に知っていた。休日に4人で装備を買いに行ったときにも、それは重々理解していたではないか。

金額にすれば致命的な額だったはずだ。それを直ちに回復させる手段は限られている。その中から選択されたのがヘーパイストス鍛冶錬金店との合併。そのための政略結婚。いや、年齢的には婚約表明あたりか。

どちらにしる本人の意志を無視した内容であることに違いはない。よくもまあこんな古典的な手段を考えたものだ。呆れて反吐が出そうだな。

そんな内容が送られたメールには記されていた。

「手っ取り早く、力づくでどうにかすれば問題ないわけだし、運が良かったといえれば良かったのかもな」

馬鹿馬鹿しい内容を嘲笑う。

いったいどれだけの金銭をかければ私に勝ちうるだけの兵力を揃えられるのだろうか？ たとえ金額で揃えられたとして、今の崎宮グループにそれだけの財政的余裕はないのは火を見るより明らかだ。それを理解しているからこそ、負けることなどないと確信できた。

「レベル格差が嫌だ嫌だと言ってはいるものの、結局最後にものを言うのはレベルとは、皮肉だな」

独り言を吐きながら、優美の帰路である道を辿っていく。駅を利用していたからこっちで間違いないはずだ。

駅までの道のりで優美を見つけることは出来なかった。このときばかりは駅までの距離が短いことを呪った。

こうなったら直接乗り込んでやろうかと企んでいると、幸運の女神にでも愛されているかのように、駅に入っていく優美の後姿を眼球が捉える。

それを人込みを掻き分けながら追いかけた。改札を抜けられたら本当に乗り込まなきゃなくなる。

「優美！ おい、優美！！」

喧騒にかき消されないように、声を張り上げて叫ぶ。それでも声は届かず、改札までの距離を縮めていく。

ああ、人込みが邪魔でしようがない！

さっきまでは押し退ける程度の力しか込めていなかったが、今度は前方の人々を跳ね飛ばす勢いで走った。なるべく避けはするが、それでもぶつかった人間はあっけなく体制を崩していく。

「優美！」

優美に手を伸ばす。それが彼女の手を掴む寸前に、遮られた。

「——っ！？」

そこにいたのは黒いスーツを着込んだ体格の良い男性3人。いわゆるボディーガードというやつだろう。

「……………」

無言で立ち塞がる彼らは、プロ独特の気配を纏っているようだっ

た。まるでこの場にそぐわない、重圧な気配。小心者なら外見だけでもびびるだろう。

男の1人が、私を睨みつけてくる。スキルでステータスを覗こうとしているのかもしれない。だが原則として、自分より一定以上、上のレベルが相手だと使用できない。つまり彼らの中の誰もが、私のステータスを知ることとは出来ないのだ。逆に、睨み返すついでに私はステータス解析のスキルを使用して3人のステータスを把握してやった。案の定、睨んできた男のスキルにはステータスを覗けるものがあつた。

「優美、そろそろ気がついてくれ」

「へ？ 羽衣ちゃん？」

やっと私の声が聞こえたようで、間の抜けた声を漏らした。

「御嬢様。御友人でしょうか？」

「そうだよ」

「これは大変失礼いたしました」

立ち塞がってた3人が、道を開けるように横にそれる。

「ところでどうしたの羽衣ちゃん？」

「いざ言葉にするととなると、なにかから伝えるべきか。とりあえず最近不調子だった優美の、その原因を解消させるべく来たわけだが…」

…」

「えっ……！？」

「まずは、誘拐未遂でもするか」

笑いながら優美の手を取り走り出す。後ではなく前方の改札口に向かつて。

だが相手はプロ。突然の出来事にも、瞬時に反応して見せたのに、は感嘆する。流星はボディガードなんてやっているだけはあるということか。

1人の手が私を掴み、2人が前に回り込む。これもまた、見事な連携だった。だが掴みかかるよりは囲むべきだろうな、この場合は捕まれた腕を逆に掴み返し、前の2人に投げ飛ばした。殺さない

ように手加減はしたが、ボーリングのピンのように3人は飛んでいく。HPはそれだけで3割を失った。

一方的な戦闘。レベル差がこれじゃあ、彼らがいくら足掻いても結果は覆らないのが当然であった。

「ちよつと羽衣ちゃん?！」

「ははは。とりあえず逃げるぞ」

行き先を適当に設定しよう并表示された画面に指を走らせる。

その間に起き上がった3人は、無駄とわかっていても各々のスキルで攻撃を試みる。避けることも出来たが、それでは建物に被害が及ぶだろう。だから空いている左手で全てを受けることにした。

結果的に、私のHPは僅かに減少した。防具を一切していないにもかかわらずほんの僅かだ。だが、こちらのHPが見えていない彼らからすればまだ勝機はあると思ひ込んでしまっだろう。

再びスキルを発動させようとしたところで行き先の指定を終えて改札を抜けた。

「君たちでは勝てないよ」

そう言い放ち、景色が変わる。

着いた先は見知らぬ土地の駅だった。人通りはまったくなく、出入り口から見える景色から、田舎の方だということだけが推測出来た。

「え? あれ!? ええ!!」

「まあ落ち着け」

久しぶりに純粹に驚く優美の顔を見て、微笑みを隠せなかった。やっぱり優美はこうでないと。

「いやいや落ち着けないって! どういうこと? 優美ちゃんが誘拐して? ここはどこ? わたしはだれ?」

「だから落ち着けと言ってるだろ。まあ、かくかくしかじかだ」

「わかんないよ!」

「そっだろうな。ともかく大まかな事情は把握したのでとりあえず誘拐した。以上だ」

「そこでどうして誘拐になるの!？」

理由を把握していることより誘拐の方を先に訪ねてくるとは、ちよつと予想外だった。

さて、どうして誘拐なんだろうか？ 自分でしておいてなんだが、特に理由はなかった。ひとまず、打開策にはならないが、改善策にはなりそうだからか？

「半分は八つ当たりだな」

冷静に自己分析した結果がそれだった。

「八つ当たりで誘拐するなー!」

「もう半分は心配だったからだけだな。言つたろ？ 大まかな事情は把握してゐるって」

「あつ……………」

ようやく状況が理解出来て、驚愕の言葉が途切れる。

「断つても、どうにかしてやるからな」

「もう。だからって誘拐はないんじゃないかな？」

ちよつと困つたような、でも嬉しそうに優美は言つた。1週間ぶりに会つたような、そんな気がする。

この1週間は長かつた。入学して最初の週はあつという間に感じたというのに。

「いいじゃないか。上手くいったんだから」

「それもそうだけど……………」

「優美は誰にも渡さない。だから安心しろ」

いつもみたいにぎゅつと抱きしめて、腕の中にいる優美に囁いた。
「うん。ありがと、羽衣ちゃ——」

「御嬢様」

優美の声を遮つて現れたのは先程のボディガードたち。ただし、服装は実践用に変わり、人数も十数人に増えていた。

優美に発信機でも着いてるのかもしれないな。

先頭の男が剣を構えながら前に出る。

「貴様。なにが目的だ？」

「さっき言っただろ？ 誘拐。それだけだよ」

「ふざけるな！」

声を荒げてさらに距離を詰めてくる。

「もしも優美に危害を加えようとしている人間が相手だったら、それは最善策じゃないぞ？」

「五月蠅い、犯罪者が！」

男が小声でなにかを呟くと、一気に加速して距離を縮めてくる。

洸哉のとあ比べ物にならない速度だった。

高速で近づく彼は、次の瞬間には反対のやって来た改札の方向へ飛んでいた。もちろん私が投げ飛ばしたのだ。

「全員、身の程を知るといい。そして死人が出ないうちにさっさと退くんだな」

優美に被害が及ばないように、投げ飛ばす際に前にある程度進んだが、それを誰かが目で追うことは出来なかったようだ。

それがトップクラスに君臨する者と、それ以外を明確に隔てる超えられない壁と言わんばかりに。

「だからといっておいそれと退けないんだよ、こっちもな！」

「それもそうか。ならしかたがない、時間をかけずに手早く終わらせよう」

言い終ると同時に、走り、腕を振るって次々と殴り飛ばしていく。攻撃を当てようにも、目でも終えない連中がそれをする事も叶わず、まるで無抵抗のままそれは終わった。

全員死んではないからすぐに起き上がるだろうな。だが大ダメージのせいで体を動かすのは少々辛いだろうけど。

「それじゃ、さっさと逃げるぞ。あと、どっかで服買って着替えた方が良いな。荷物もどっかに預けないと」

「ねえねえ羽衣ちゃん」

「どうした？」

「これはどういうこと？」

「あー……、気にするな」

すっかり力を出し過ぎてしまったと、今更思い出す。これだけ力を振るっておいて、下手な言い訳は通用しないよな……。

「いやいや、気にしないでいられる人なんてそうそういないって」

「ううっ！　もういいや。そのうち説明するから今は逃げる」

「うん。あとでちゃんと説明してね」

「はあ……」

後悔先にたたず、といったところか。

もうどうとでもなれ。

改札を再び抜けて、行き先を今度はある程度知っている場所に指定する。

たぶんここで逃げてもすぐに追ってくるだろう。だから今は悩むよりも先に、面倒な鬼ごっこをさっさと終わらせよう。

そうすることで悩みを少しでも遠ざけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3476/>

ゲームになった現実

2010年10月9日13時27分発行